

---

# IS - unconscious -

天童翼

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

I S - u n c o n s c i o u s -

### 【Nコード】

N 9 4 5 1 R

### 【作者名】

天童翼

### 【あらすじ】

ある少年は転生するにあたり、女神からある能力をもらう。

その能力の名前はKNF。

その能力とはK（言葉に意味をもたせられて）N（狙ったようなタイミングで現れる）F（フラグメーカーになれる能力）なのを少年は知らない。

## Prologue (前書き)

初めまして天童翼です。

この度、他の小説の連載があるのに掲載したい衝動に駆られて少しストックを持っているISの二次作を掲載してしまいました。

この小説ではK（言葉に意味をもたせられて）N（狙ったようなタイミングで現れる）F（フラグメーカーになれる能力）を持った主人公が無意識の内に一夏から女の子を略奪していきます。（一部、マインドコントロールみたいに見えるかもしれませんが、あくまでKNFです！）

ある意味、究極のアンチと呼んでも過言ではないと自負しています。ですので、そういうのが生理的に受け付けられない人は絶対に見ないでください！

さらに、主人公あるいは作者が独自の視点でISの世界を見たり、独自の技術を開発したりします。

この二次作はそういうのを前提で書いていますので！

それでも構わないという人のみ本文へどうぞ。

それと、この二次作内で出てくるオリキャラ、オリ企業、独自解釈が入った政府は、フィクションであり、現実世界の人物、企業、政府には一切関係ないことを先に言わせていただきます。

それと、この二次作の文体は試験的に普通のライトノベルと同じように書いていますのでPDFファイルおよび、縦書きの方で見るところをオススメいたします。あくまで、試験的にですので、今後、変更するかもですが。

と思っていたのですが、アクセキ解析を見た結果、圧倒的に携帯での観覧が多かったので、一旦、改行して携帯用に変更させていただきます。

最後になりましたが、これからよろしくお願いします。

## Prologue

「死んだ……………」

少年はしっかりと覚えている。

死という事実を。

最後は車にひかれそうになっている女の人を助けて死んだということ。

「まさか、大学の入学式の前の日に死ぬなんてな」

少年から青年に変わる、そんな時期に彼は死んだ。

「意外と冷静だね」

少年は驚く。

ただ白い世界に自分以外の誰かがいたとは思わなかったから。

「誰？」

少年の目の前に一人の少女が少年の前に現れる。

唐突に。

「普通、ここに来る人はもっと、大騒ぎするのに」

「冷静なのが珍しい？ 昔から俺、周りと違っていて良く言われたよ」

「そうなんだ」

白銀に輝く神と透き通るような蒼い瞳を持つ少女は微笑む。

「実はさ、あなたに転生してもらいたいんだ」

「転生？」

「そ、転生、本来なら死んだら輪廻転生の理論で全てを消されてもう一度、やり直すんだけど、上からの命令でね。一回、誰かを私たちが創った世界に転生してもらいたいの」

「……………ようは俺は実験動物扱いか？」

「まあ、悪い言い方をすれば、そうだね。でも、悪い話じゃないでしょ？ 本来なら消えるはずだった存在を私達が救ってあげるんだから」

少年は少し考える素振りをみせる。

そして

「俺が転生することで、その世界は壊れないのか？」

そう聞いた。

「大丈夫、そのあたりは『あなたのためだけに』一つの世界を作るから。他の世界と違って相当壊れにくくなる。ただし、物語の世界

「だけどね」

「物語？」

「そう、私達が一から世界を創るのには膨大な時間がかかる。そんなことをしていたら、あなた達が消滅するかもしれない。それを回避するために、人間が設定した物語を元に世界を創るんだ。もちろん、あなたというイレギュラーが入るから、人間の考えた物語とはだいぶ違ってしまうけど」

「…………俺達が消滅っていうのは？」

「そこは言えないわ。もし、言ってしまったら、あなたは行かないという選択肢を選べなくなってしまう」

「…………俺はもう、行くと決めている。だから、教えてくれ」

「いいの？」

「ああ、どうせ、なくなる命だったんだ。だから、チャンスを与えたことに感謝することはあっても、拒否するつもりはないよ」

「…………ありがとう。それなら、説明するわ。あなた達の世界は今、未曾の危機に瀕している。魂が溢れすぎているの」

「溢れすぎている？」

「ええ、発達しすぎた故に魂が生産されすぎた。世界に魂が溢れすぎると、世界はそのエネルギーに耐えきれなくなって潰れてしまうの。だから、それを回避するためのテストケース。あなたが成功す

れば、もっと多くの魂を色々な物語の世界に転生してもらおうと思うの、その時は本当の輪廻転生になるけど」

「……………俺の場合はテストしてもらおう特典についてことか」

「ええ」

「それで、俺が転生する物語って？」

「要望があれば聞くわよ」

「決めてなかったのかよ……………」

「私も暇じゃないの」

「それなら……………科学が発達した世界がいいな」

すると少女はニヤツと笑う。

「分かったわ、それなら私の好きなアニメの世界にしておける」

「頼んだよ」

「それで一つだけ能力をあげるわ。何が良い？」

「……………何でも良いや」

「え？」

「別に元の世界で何か物足りないと思ったことないし」



「そうなの……それなら私が決めてあげるわ」

そこで少女はニヤツとさらに笑う。

それはもう、計画通りと言った風に。

しかし、少年には見えない角度で笑っているので問題ない。

「じゃあ、能力は私が勝手に決めてつけておくから、じゃあ、次の人生に祝福を」

「ありがとう」

少年は白い光を受けて旅立って行った。

「ふう、やっぱり、あの子を選んで良かったわ。オタクとかだったら、何か私があげたい能力とは別の能力を要求してきそうだし」

そこで少女は嬉しそう笑う。

インフィニット・ストラトス

「さてと、あの子はISの世界をどんな風に改変してくれるのかしら　あの子につけた能力はKNFだから絶対荒れるわよね、ふふ。楽しみ。あ、そうだ。どんなISでも乗れるようにしとかないといけないわね。これはおまけってことで。さて、仕事に戻ろうかしら。あの爺どもの相手をするのは疲れるからね。私にも、これくらいの娯楽あったていいじゃない」

女神が少年に与えた能力K N FとはK（言葉に意味をもたせられて）N（狙ったようなタイミングで現れる）F（フラグメーカーになれる能力）の略なのだが、それを少年が知ることは一生ないのだった。

## Prologue (後書き)

女神「さて、と。これから面白くなるわね」

天童翼「面白そうになって……………いいのか？」

神「まあいいじゃない。今回はKNFつまり、言葉に意味をもたせられて狙ったようなタイミングで現れるフラグメーカーになれる能力の説明をするわよ！」

翼「……………すげえ無理矢理な能力……………」

神「でも、ある意味、数ある能力の中でも最強クラスの能力だもん」

翼「KNFって結局はどんな能力なの？」

神「ふふん、よくぞ聞いてくれました！ NFは分かるわよね」

翼「言葉、通りの意味だよね？」

神「そうね。ただ、狙ったようなタイミングで現れるフラグメーカーになれる能力よ」

翼「Kは？」

神「言葉に意味をもたせる能力、これが最大のチートよ！」

翼「言葉に意味をもたせられるだけのに？」

神「そうよ！ 例えば『翼！ 勉強しなさい！』この言葉を聞くと翼は嫌な思いをするでしょ？」

翼「そうだね」

神「でも、これは翼のことを心配している意味を持っているわ。普通の場合はあまり伝わらないわ。でも、この能力があれば伝わるの！」

翼「ん？ 伝わっても普通だろ？」

神「全然、違うわ。もし落ち込んでいる時に『気遣い』や『愛情』や『心配』の意味をもった言葉をこの能力を使っている状態で聞くと直にこの思いが伝わるわ。それがどれほど強力なことか……………」

翼「惚れるな……………」

神「ええ。交渉後の場においても、もし、この力を使われたら……………」

…」

翼「交渉したいという意志が伝わって交渉が成功するのか……」

神「そうよ。ただし、悪意も伝わるから、もろ刃の剣とも言えるけどね」

翼「そうなのか……」

神「また、能力が発動する場面になったら、現れてあげるからね」

翼「了解です。では、次話へ」

神「ばいばい」

## **E p i s o d e 0 1   K N F の 旅 立 ち ( 前 書 き )**

今回は原作開始までの主人公の過去編！  
次話から本格的に本編へ

## Episode 01 KNFの旅立ち

「リアム、忘れ物はない？ ハンカチは持った？ ポケットティッシュは？」

俺の前で俺のことを心配してくれる、女性の名前はナターシャ・ファイルス。

俺の遠い親戚のお姉さんで俺の面倒を三年程してくれた恩人だ。

彼女が鮮やかな金色の髪をしていられるのは、毎日、丁寧に手入れをしているからだと言っている。

彼女の格好は格好いいブルーのスーツはビジネススーツではなく、オシャレなカジュアルスーツだ。

正直に言っただけだと分かっていても、その女性特有の膨らみにドキドキしてしまう。

そんなナターシャ姉さんと俺がどうして空港にいるかと言うと俺はこの春から日本にあるIS学園に通うことになった。

そもそもの始まりは数年前に遡る。

俺の転生した先の父はそれなりの資産を持った男性だった。

天才といふべき頭脳を持ち、一代で機械や兵器を扱う会社を立ち

上げた。

俺はそんな父を本当に尊敬していた。父のようになりたいとさえ思った。

そんな父だったが世間と一つだけ違った所があった。父には『三人』の妻がいた。

世間一般では父は色魔とか呼ばれていた。

しかし、父は頑なに『俺の妻は三人だ！ 誰にも優劣をつけるつもりはない！ なぜなら三人共愛しているから！ 惚れた女を幸せにして何が悪い！』と言い張った。

世間一般で言われるハーレムというやつだった。

俺は前世の記憶があったため父が言っていることを初め理解できなかった。

そんなことが道徳的にいいのだろうか？ という疑問すらあった。

しかし、父と俺の生んだ母を含む三人の母達は幸せそうだった。

三人の母達はとても仲が良かったし俺を生んだ母以外の母も俺のことを本当の子供のように可愛がってくれた。

両親を見ているうちに俺は、だんだん、ハーレムがおかしくなないように思えて来た。

確かに世間一般ではダメでも幸せなら、それでいいじゃないか、

と。

しかし、事件は起きた。

それは俺が小学六年生になった頃だ。

俺の生みの親の母の誕生日の日に両親達は俺が学校に行っている間に四人でデートに出かけた。

別にそれは変わったことではなく、いつも通りのことだ。

しかし、いつもと違ったのは両親達ではなく、世界だった。

爆破テロ。

狙われたのは民間が経営するショッピングセンター。警察や軍の調べでは両親を狙ったモノではなく無差別だったらしい。

しかし、問題は父が会社の経営者だったことだ。

俺には莫大な財産と会社が残された。

それも、国からの見舞金も物凄い額になったため俺の親戚一同は荒れに荒れた。



正直に言って金の力というのは怖かった。

そんな親戚一同を目のあたりにして怒りをあらわにしたのは、昔、数回会ったことのあるナターシャ姉さんだった。

姉さんはIS学園を今年、卒業し軍に所属することが決まっていた。

もう単位はたりているから、こちらに戻って俺の面倒をみると。

もし、それがダメなら、IS学園に連れていくと。

親戚一同はナターシャ姉さんを金目当ての目狐だ！とか散々、罵倒した、けど……俺は嬉しかった。

姉さんは俺の両親の遺産などいらない。

自分が稼いだ金で俺を養うと言ってくれた。

ただし、俺の両親の遺産は、おまえたちに一切くれてやらない！と。

その言葉を聞いて親戚一同はさらに荒れた。

俺の両親の遺産が目当てなのがまる分かりだった。

耐えきれなくなった。

親戚一同に俺は遺産を全て自分が管理すると言い。

さらに、ここにいるナターシャ姉さん以外の人間を親戚とは思わない。

両親の葬儀にも出るな！ と強く宣言した。

それを聞いた親戚一同は態度を一変に変えた。

俺のご機嫌とりに。

ナターシャ姉さんは俺を騙す悪女だと俺に認識させるための説得をし始める者もいた。

正直に言っただけ見苦しかった。

昔、数回しかあったことはなかったが明らかにナターシャ姉さんは、そんな人じゃない。

俺の心は怒りに染まった。

父さんの親友だった軍人を呼んで、頼んだ。

父さんの遺産をこんな奴らに渡したくない。

力を貸して欲しいと。

すると、分かった、と、父さんの親友は呟いて。

父さんの遺言状を出してくれた。

正直に言ってそんなものがあるとは俺も知らなかった。

そこには、こう書かれていた。

父さん達の財産は全て俺に直接、渡せ。そして、俺の親権は俺の認めた人が持つ、と。

もし、これが守られないようなら、俺に訴訟を起こせと父さんの親友は言ってくれた。

さすがに軍人がバックにいて、正義がこちらにある以上、親戚一同は黙るしかなかった。

それと父さんの会社の方は俺と仲良くしてくれていた副社長に譲った。

譲ったはずなんだけど……『私は！ 若様以外にこの会社を渡すつもりはありません！ 若様がこの会社を継がれるまで私が守り

ます！』と言って将来、俺に会社を継がすと言って周りの意見を一切、聞かない。

嬉しい。

物凄く嬉しい。

俺ではなく父を慕ってくれているのは分かっているけど。

そして、晴れて俺はナターシャ姉さんと暮らすことになった。

宣言の通りナターシャ姉さんは自分の給料で俺を養ってくれた。

軍属で家にいないナターシャ姉さんの代わりに俺が家の家事をした。

ナターシャ姉さんはそんなことをしなくても良いと言ってくれたけどそれでは俺の気持ちが収まらないから、勝手にしていた。

そんな生活が二年程、続いたある日。

ナターシャ姉さんがISの国家代表選手に抜擢された。

正直に言って物凄く嬉しかった。

俺は、今まで溜めていた、こずかいで少しだけプレゼントを贈った。

正直、そんなに高い物じゃなかったけど、ナターシャ姉さんは喜んでくれた。

両親の遺産でプレゼントを買いのは何か違う気がしたから。

ちょうど、その時期だった俺がISに興味を持ち始めたのは。

俺は元々、機械類を弄るのが好きだった俺はナターシャ姉さんにISの実物を見せて欲しいと頼んだ。

そうしたら、ナターシャ姉さんが操縦するISを特別に見せてもらえることになった。

もちろん、我がままだったのは分かっている。

そして、いざ軍の監視のもと、見学を許可してもらった時のことだ。

まあ、軍と言っても父さんの親友の女性が色々と手配してくれたみたいけど。

そこで………事件は起こった。

俺が触らせてもらったISが起動してしまったのだ。

それを聞いた、アメリカ政府とアメリカ軍は大慌て。

ISは日本人である篠ノ之博士<sup>ness</sup>が開発した女性にしか使えないパワードスーツだ。

俺が初めて男子で初めて使える、ということになる。

正直に言っただけ最高のモルモットだった。

実験動物にされてもおかしくなかった。

そこで、俺の身柄を守ってくれたのはナターシャ姉さんと父さんの親友の軍人と父さんの今の会社の社長さんだった。

アメリカ政府と交渉して俺がISを動かしたデータを献上する代わりに俺の身の安全を保障するというものだった。

ナターシャ姉さんは国家代表。

父さんの親友は軍で位は知らないけど、相当、上の地位の人間。

そして、父さんの今の会社の社長さんはアメリカで一、二を争う企業、その社長。

正直に言っただけ、これ以上、凄いバックなど存在しないだろう。

そういう訳で俺の身は保障された。

世間的には俺のことは公表されなかったが。

ちなみに、父さんの起こした会社で俺の専用機が俺の意見をかな

り組み込んだ状態で作成してくれた。

本当に今の社長さんには頭が上がらない。

それから二年ほど経ったある日のこと、いつも通り、ナターシャ姉さんと同僚の人達とISを使った実験をしていた時、ある報道が俺たちの下に飛び込んでくる。

ISを動かせる男が日本に現れたという報道が。

名前は織斑一夏。おりむら いちか

初代ブリュンヒルデの弟にして篠ノ之博士とも交友があるそうだ。

おそらく、俺みたいなイレギュラーではなく篠ノ之博士がおそらく何かしたのだろう。

彼がIS学園に入学することになったらしいので俺もIS学園に入学することになった。

その時に俺がISを操縦していたデータを渡せと色々な国が言ってきたらしいけど、俺の祖国が必死になって守ったらしい。

色々な陰謀を余所に俺は今日、無事に旅立つことができる。

俺の相棒である『オーディン』と共に。

「じゃあ、行くよ。姉さん」

「……………何かあったらすぐに連絡するのよ。虐められたら、その国

に抗議するから言いなさい。絶対よ」

……国家代表のナターシャ姉さんが言つと……冗談じゃ済まないのが若干、困る。

そんな訳で俺のIS学園へ向けての飛行機は飛び立つのだった。



## Episode 02 KNF、学園に到着

「ここがIS学園か……………」

俺は今、IS学園の前に来ている。

正直に言って長時間のフライトで疲れている。

でも……………それ以上に周りの視線が痛い。

IS学園にいるのは基本、女の人だ。

教師から生徒まで。

唯一の男は理事長くらいだ。

先方の話しでは、まだ織村一夏はIS学園に来ないそうなので、まだ俺一人ということだ。

好奇の視線を受けるのは仕方のないことだろう。

俺はゆっくりと、しかし、堂々と歩いて事務所を探す。

こういう時にびくびくしていたら逆になめられる。

俺は別に犯罪者じゃないんだから。

そこで一人の女の子の視線に気づいた。

正直に言って普通の人じゃない。

俺の存在が公表されてから、俺のことを探ろうとしていたスパイに近い。

しかし、そのスパイも大抵はCIAに潰されているはずなので……いないはずだ。

それに……IS学園にスパイを送り込める程の組織がいるとしたら国家単位。

しかし、そんなことをしたら、バレた時にリスクが高すぎるため誰もしない。

それなら……。

俺は右手につけられた指輪にさわる。

俺の専用機をいつでも起動させられるように。

「そんなに警戒しないで」

不意に俺の後ろに立つ女の子。

その子に俺は見覚えがある……それも良い意味での見覚えじゃない。

最悪だ。

IS学園で一番、会いたくない人に一番始めにあってしまった。

俺は一步下がる。

「うん？ 君は歳上好きだと思っただけだな」

明瞭快活で文武両道、料理の腕も絶品で更に抜群のプロポーションとカリスマ性を持つ完璧超人の表向きはIS学園の生徒会長。

名前は更識楯無。さらしなたてなし

しかし、その実態は違うロシアの代表選手。

アメリカとは未だに陰悪なムードが続くロシアの代表選手……候補生ではなかったはずだ。

俺が親しくして良いわけがない。

「何の用ですか？」

「あらあら？ 思春期の男の子と話すのは久しぶりだから分からないけど私、変だったかな？」

あくまで笑顔を絶やさずにそう言う更識……さん。

この人が本当にロシア代表なのか、疑ってしまう。

「いえ、あなたのような綺麗なお姉さんと話すのは稀ですから、緊張してしまっただけ」

「あらあら、嬉しい事を言ってくれるじゃない」

そう言って近づいてくる更識さん。

「それ以上、近づかないでください」

「ん？」

「ロシアの代表である、あなたが俺に何の用ですか？」

「知ってたんだ」

「ええ、CIAをなめないでください」

「そつかあ、君のバックにはアメリカ軍だけじゃなくてCIAもいるんだあ」

「……………対暗部用暗部のあなたに言われたくないですね」

「そつかあ、それもばれちゃってるんだ。でも安心して、お姉さん個人的には君に危害を加える気がないから」

「……………個人的にはでしょ？」

「ふふ、手厳しいわね」

更識楯無……………想像以上に読めない人だ。

ナターシャ姉さんが気をつけなさいと言った理由も分かる。

「それじゃあ、俺は事務所に行かないといけないので」

「私が案内してあげるわ」

「結構です」

「お姉さん、振られちゃったあ」

特に気にした素振りも見せずにそれだけ言ってどこかに消えていく更識楯無。

あの人の真意というよりロシアの真意が分かるまでは警戒し続けないといけないのか………厳しい。

もっと、楽な学園ライフを送りたかったんだけど………

まあ、ISを動かせた時点で無理か。

「さて、と。事務所を探すか」

余談だけど、事務所を見つけるまでに二十分かかったのは内緒だ。

「ふう」

俺は今、IS学園での受付を終えて、街へ出てきている。

別にすることがなかった訳じゃない。

だけど、ナターシャ姉さんに何か日本のお菓子を送ってあげよう  
と思って日本のショッピングモールを目指している。

別にナターシャ姉さんが何か送ってくれと言った訳じゃないけど。

俺が送りたい。

ショッピングモールに着き、ぶらぶらと店を歩いている時だった。

「やめてください!」

少し、気の強そうな女の子が数人の男に囲まれている。

女の子は頭にバンダナ?　かな?　何か布を巻いている。

似合っているのでおそらくオシャレか何かだろう。

いくら女性が優遇されている世界といえども、やはり生身では男  
の方が強いからだろうか?　女の子の足が少し震えている。

「いいじゃん、そんな奴、ほっといてさ」

「そうそう、お兄さん達と遊ぼうよ」

アメリカでも、日本でもこういうことをする男は同じような輩なんだな。

俺はゆっくりと足を女の子のいる方向に向ける。

「失礼、美味しいお菓子を売っているお店を知りませんか？」

女の子に微笑みかける。

「え、あ？ はい？」

突然のことに啞然とする女の子。

まあ、当然か。

「ああ、テメエ何者なにもんだよ？」

「おい、待て、コイツ、なかなか……」

俺が女の子の手を掴んで離れようとした時だった、絡んでいた男が俺の肩を掴んだ。

「俺は男だ。男に俺は興味がない」

「っ！？ コイツ、男の癖にポニーテイルにしているのかよ！？ キモ」

男が言う、俺は髪を腰まで伸ばしてポニーテイルにして結んでいる。

ナターシャ姉さんがお揃いにしたい、とかそんな理由で髪を切るのを禁止にされているのが理由なんだが、コイツ等にそんなこと言ってやるつもりはない。

「おまえ達が勝手に解釈しただけだろ？ 俺は急ぐ」

「ああ！ 俺達が先にこの子に声をかけてただろ！」

「退け」

俺は静かにそう言い放つ。

「っ！？ なんだよ……………なんだか、俺達が悪いことしちゃってるみたいじゃないか……………」

「おい……………何、弱気になっているんだよ……………」

俺はもう一度、静かな声で言い放つ。

「消えろ」

なぜか、昔から俺はこういう風に話すと人は従ってくれる。

相手に俺の意思を伝えるようにして言葉を放つと。

「くっ！？ 分かったよ……………ほら、行くぞ」

「ああ……………」

男達が言った後、俺は女の子に向き直る。



「大丈夫だった？」

今日のあたしは機嫌が悪かった。

私の好きな人である織斑一夏さんがISを扱えることが分かった、その日から一度も会えていないからである。

何でも一夏さんは今、身柄を政府に拘束されているらしい。

そりゃあ、私だって一夏さんには無事でいて欲しい。

だけど。

恋する乙女としては会いたい。

だけど、無理だから、今日は馬鹿兄ばかにいを連れてショッピングモールに来ていた。

もちろん、荷物持ちだ。

さて、と。私は色々な場所で買い物をした後、下着売り場に行った。

もちろん、馬鹿兄はデリカシーの欠片も持ち合わせていないので着いて来ようとしたが、みぞおちに一発、叩き込んで黙らせた。

そして、いざ、下着売り場に向かおうとした時に

「ねえ、君、今、一人？」

チャライ男が二人、話しかけて来た。

ナンパは別にこれが初めてじゃなかったから、私は

「連れがいるので」

そう言って、逃げようとした。

すると、このチャラ男達はあるうことが、私が行こうとした方に先回りして私の進路を塞いだ。

しつこい。

私は

「やめてください!」

そう叫んだ。

それでもチャラ男達は

「いいじゃん、そんな奴、ほっといてさ」

「そうそう、お兄さん達と遊ぼうよ」

一向に諦める気配を見せない。

ムカつく。

一発、殴ろうと思った時、その人は現れた。

長い金色の髪を靡かせて。

「失礼、美味しいお菓子を売っているお店を知りませんか？」

外国の人だと思うけど丁寧な日本語を話す、その人は間違いなくイケメンだった。

そんな彼に私は

「え、あ？ はい？」

としか答えられなかった。

そんな私と違って何を思ったのか男達は

「ああ、デメエ何者だよ？」  
なにもん

「おい、待て、コイツ、なかなか………」

彼のことを女と勘違いしたみたいだ……………キモ。

彼はすぐに私の手を掴むと、どこかへ行こうとしたけど、それをチャラ男が止める。

「俺は男だ。男に俺は興味がない」

「っ！？ コイツ、男の癖にポニーテイルにしてるのかよ！？ キモ」

この外人さんがしてても、大丈夫だと思うんだけどな……………何と  
言うかオシヤレで。

そんな私の考えを余所に外人さんとチャラ男の話は進む。

「おまえ達が勝手に解釈しただけだろ？ 俺は急ぐ」

「ああ！ 俺達が先にこの子に声をかけてただろ！」

……………このチャラ男とこの外人さん、どちに着いて行く？ と道  
行く人に聞けば間違いなく、外人さんを選ぶ人が九割の人が占める  
だろう。

一割くらい、変わり者がいると思うから。

そんな時、外人さんの口から

「退け」

男達に向かってその言葉が放たれる。

不覚にも、その言葉にドキッとしてしまった。

何て言うのかな？

この人に連れて行ってもらいたい。

うん、うん、着いて行きたい。

そんな衝動に駆られる。

一夏さんにはない魅力……………

あ、ダメ！

私が好きなのは一夏さん、なんだから……………

「消える」

もう一度、彼の口から彼から、似たような言葉が放たれる。

また、胸がドキドキする。

私ってMだったのかな……………

こんな言葉に興奮するなんて……………

「くっ！？ 分かったよ……………ほら、行くぞ」

「ああ……」

チャラ男達もそんな外人さんの不思議な魅力に負けたのか逃げていく。

そして、外人さんは私にこう言ってくれる。

「大丈夫だった？」

「俺の名前はリアム・イーリー。君は？」

「わ、私は五反田<sup>ごたんだ</sup>蘭<sup>らん</sup>ですっ」

「蘭ちゃんって言うのか。ごめんね。もっとスマートに助けてあげられたら良かったんだけど」

「い、いえ」

できたら、こう、もっとやり方があったのかもしれないけど、今の俺にはあれくらいしか思いつかなかったからな。

未だにIS学園に入学する前なのに、ISを使って騒ぎを起こす訳にはいけないからな。

「それじゃあ、俺はこれで」

俺は本来の目的であるお菓子を買いに行こうとすると

「ま、待ってください！」

突然、蘭ちゃんに服を引っ張られた。

「ど、どうしたの？」

思った以上に蘭ちゃんの力が強かったので多少、焦ってしまう。

というより、俺がいなくても大丈夫だったのか？

「あの、その……えっと……お礼を……」

「別に気にしないで」

「い、いえ！　そういう訳には！」

日本人が義理固いつて聞いていたけど、この子も日本人ってことか。本当にナターシャ姉さんが持っていた漫画と同じだ。

「それじゃあ、お菓子を置いている店を教えてくださいませんか？　できたら日本のお菓子がいいんだけど」

「わ、分かりましたっ」

そう言つと蘭ちゃんは俺の手を引いて歩き出した。

ひゃあ!？

どうしよう！

私、一夏さんの手も握ったことないのに……

こんなに積極的に……

でも……リアムさんの言葉を思い出すとどきどきが止まらなくなるし……

私、この人のことも好きになっちゃったのかな……

ああ！



分からない！

「そ、そういえば……………リアムさんはここに何をしに来たんですか？」

「留学しようと思ってね。蘭ちゃんはこの学校に通っているの？」

「わ、私ですか！？ 私は……………」

私の通っている私立<sup>セイント</sup>聖マリアンヌ女学園中等部は筋金入りのお嬢様学校。

……………箱入り娘って思われないかな……………外国の人みたいだから、大丈夫かな？

「<sup>セイント</sup>聖マリアンヌ女学園ですっ」

「<sup>セイント</sup>聖マリアンヌ女学園？ 確か、優秀な学校だったね。凄いじゃないか」

「え、あ、その、ありがとうございます」

何でリアムさんは外国の人なのに知っているの！？

「高等部？ たぶん、俺は中等部だと思ったんだけど」

「ちゅ、中等部の二年生です。この春から三年になります！」

「やっぱりか、俺は今年の春で高校生だから、蘭ちゃんより一つ上だね」

「そ、そうなんですか？」

てつきり、大学生かと思った……………

リアムさんって滅茶苦茶、大人びているんだもん。

外国の人だからかな？

「リ、リアムさん、あ、名前で呼んでも……………」

「うん、名前で呼んで、イーリーって日本人には言いにくいよね」

「あ、ありがとうございます。リアムさん、リアムさんって、どの国の出身なんですか？」

「どこだと思う？」

……………「夏さん、ごめんなさい。」

私、今、リアムさんの笑顔に見とれてました！

別に「夏さんとは付き合ってる訳じゃないけど……………」

「イタリアですか？」

「はずれ　アメリカでした」

「アメリカ……………」

「ん？ 何かアメリカに悪い印象でもあった？」

「い、いえ。そんなことはないです……………」

「そつか。それなら良かった。ところで、蘭ちゃんの案内してくれていた、日本のお菓子の店ってここじゃないの？」

「え？」

リアムさんは、ちょうど、私が通りすぎようとしていた日本の老舗の高級なお菓子売っているお店を指差す。

「あ、いえ……………その」

「ん？ 違ったかな？」

「その……………そこは……………」

私達みたいな庶民とは殆ど縁のない店なんです、とは言えない……………。

「違ったのかな？」

「いえ、そんなことはないんですが……………」

「入って見ても良い？」

「は、はい」

店に二人で入ると、ショッピングモールの中だというのに和服の

お姉さんが、いらつしやいませ、と挨拶してこちらに寄つて来る。

うう、これじゃあ、リアムさんは買っしかない……………散財させちゃつかも……………どうしよう。

「本日はどのようなお菓子をお探しで？」

「日本独自のモノを探しているんです。女性が喜びそうな」

「あら？　こんな可愛い女の子を連れているのに、別の女の子にですか？」

店の人の言葉を聞いて私は顔を真っ赤にして俯いてしまう。

恥ずかしい……………

「いえ、故郷くににいる姉に、です」

「あら、それは失礼。海外の女性の方はこちらのセットを好んで買っていかれますよ。今なら少しサービスもしますよ」

店員さんが指差したのは……………零が四つ程あるお菓子の詰め合わせのセットだった。

確かに色々な種類の和菓子が沢山入っていて、美味しそうだけど……………学生に進めるには高すぎる……………

店員さんも私と同じでリアムさんの年齢を間違えているのかな？

「そうですか……………確かにナターシャ姉さんも喜びそうだ。後、こ

れにおせんべい？ というお菓子もありますか？」

「はい、それなら……こちらは？」

店員さんが持つて来たのは三千円程の値段のお煎餅だった。それなりに量もあるけど、やはり学生には少々、高い。

「試食のようなことはできませんか？ なにぶん、食べたことがないモノで」

「ええ、構いませんよ」

店員さんは奥に一度、戻ってからすぐにお盆に二枚のお煎餅とお茶を載せて戻って来た。

それをリウムさんは馴れた手つきで受け取り私にもくれる。

「あ、ありがとうございます」

ニコツと微笑んでくれる。

うう、笑顔が眩しいよお。

「美味しいですね。このお茶も販売されているんですか？」

「ええ、しております」

「それなら、この三つをください。海外に送るサービスなどは？」

「ありがとうございます。いたしております」

そして私がお茶を飲み終わる前にリアムさんはお会計を済ませるべく移動する、私も急いでリアムさんの後を追う。

たぶん、私を待たせないために先に行ってくれただろうけど……

…この店で一人で行るのは辛いからおいていかないで欲しいです……

なんとかお茶を飲み終えて私はリアムさんの少し後ろで待機する。

リアムさんは馴れた手つきで財布から万札を二枚取り出し、代金を払う。

凄い……私からは考えられないかな。

そして、送り先の住所を紙にスラスラ書いていく。

そこで少々、店員さんが慌てる。

「じゅ、十五歳なんですか!？」

「ええ、そうですよ」

やっぱり……もっと歳上だと思ってたんだ。

慌てて送料はサービスいたします、と付け足す店員さん。

十五歳のリアムさんにそんな高価なお菓子を進めた罪悪感が多少あるのだろう。

店員さんの、ありがとうございます、というお礼を背中に受けながら、店を出る私とリアムさん。

「蘭ちゃん、ありがとう、おかげで良い買い物できたよ」

笑顔で微笑んでくれるリアムさん。

それに私は

「え、あ、はい」

と、曖昧に返事をする。

はあ、何で私、こんなに緊張しているんだろう。

「お、おい！ 蘭！ そいつ、誰だよ！」

そこで、忘れ去っていた男の声が聞こえてきた。

「お、おい！ 蘭！ そいつ、誰だよ！」

蘭ちゃんに良いお店を紹介してもらったので何かお礼を、と考えていたら後ろから声をかけられた。

蘭ちゃんと同じような髪留めをした男だった。

「馬鹿兄……………」

蘭ちゃんが小声でそう呟く。

お兄さんなのかな？

もしかして、俺はお兄さんと買い物していた蘭ちゃんを無理矢理、引っ張り回してしまったのか…………

「ごめん、蘭ちゃん。お兄さんと買い物に来ていたんだね」

「い、いえ！ 大丈夫です！」

「っ！？ テメエ！ 何、蘭のことを名前で呼んでいるんだよ！」

……………確かに、許可をとるのを忘れてた。

でも、何でお兄さんが知っているんだ？

「兄！ 違っの！ この人は」

「テメエ……………良くも俺の妹に手を出しやがって……………」



俺の胸元を掴んで来るお兄さん。

……やめさせるのは簡単だけど。

なんか俺が悪いみたいだし……

「違っつて言ってるだろ！ 馬鹿兄！」

蘭ちゃんの右ストレートがお兄さんに決まった瞬間だった。

もう少しお淑やかな子かな？ と思っただけど………元気な子だな。

「いや。悪い、悪い、まさか逆に助けてくれた方だったとは」

「いえ、気にしませんよ」

今、私のストレートから回復した兄はリアムさんと和解した。

本来なら怒ってもおかしくないのに、リアムさんは嫌な顔一つせずに兄を許してくれた。

なんて心の広い人なんだろう。

それに比べて……兄は……はあ。

「それにしても、助けてもらってばかりじゃあれたな。そうだな。俺の家で飯食わないか？」

「え？ 悪いですよ」

「いや、良いつて。俺の実家、五反田食堂っていう料理屋なんだ」

「いや、リアムさんみたいな、お金持ちを定食屋に誘って、ちょっと！」

「本当に良いんですか？」

「ああ」

「それなら、お願いします」

え？ そこは断りましようよ！

リアムさん！

「じゃあ、帰るか。蘭」

そう言うて………実家に帰ろうとする兄………ちょっと待てや、

その馬鹿兄……

## Episode 02 KNF、学園に到着（後書き）

女神「出た……………いきなり、落としたわね」

翼「……………確かに原作、始まる前に……………」

神「今回、リアムはチャラ男たちに言葉通りの意味+自分より弱い者に命令するような思いを込めたから外国人に気後れしていたチャラ男たちには効果的だね！」

翼「その上、蘭ちゃんを守りたいって気持ちも込めてたから蘭ちゃんはその思いを感じてドキドキしてたんだな……………」

神「それも一夏君に会えなくて寂しかった、あの子にしてみれば、その優しさは酷く嬉しいものね。さて、完全にいつ落ちることやらクッククク」

翼「ちゃっかり、お家まで行くことになっているし……………」

神「今回は、リアムに卒業してもらいたいものね！」

翼「……………何を」

神「禁則事項よ！ 言ったらノクターン送りになるわ！」

翼「それは……………確かにやばいな」

神「では、また、KNFが発動した時に会いましょう！」

翼「ではでは……………失礼します」

### Episode 3 KNFの食事と試験

俺は今、蘭ちゃんと弾（蘭ちゃんの兄）の実家が経営する五反田食堂で夕食をいただいている。

別に夕飯をいただくために助けた訳じゃないんだけど、これは日本という言葉で棚から牡丹餅って言うんだったかな？

「す、すみません、リウムさん……兄が無理を言って」

蘭ちゃんが俺に気をつかってくれる。

優しい子だな。

「こっちこそ、こんな美味しい料理をごちそうしてもらって、申し訳ないくらいだよ」

「そ、そうですか……」

「なあ、リウム、おまえってどこに住んでるんだ？」

一緒にテーブルについている弾がそう聞いてくる。

そこで、ギロリと効果音が、つきそうな程、睨む、五反田食堂のマスター。つまり、弾のお爺ちゃんなんだが。

「おい、弾、食わねえなら、下げちまうぞ」

「い、ごめん」

食事中に喋るのはあまり、行儀の良い行動じゃないからな行儀に  
厳しいお爺さんだ。

その点、ナターシャ姉さんはそういうのに、甘かったからな。

まあ、俺の生みの親じゃないけど、一人そういうのにうるさい母  
さんがいたから、俺も話しかけられない限り、あまり話さないけど。  
今になっては良い思い出だ。

俺は返事をせずに苦笑してから、酢豚？ 定食を食べる。

ちらちら、と俺の方を見てくる蘭ちゃん。

きつと、俺の箸づかいがぎこちないのを見て心配してくれている  
んだろう。

「大丈夫だよ」

「えっ？」

俺がそう言うと、蘭ちゃんは少々、驚いた顔になる。

「箸の使い方はまだ馴れてないけど、こっちに来る前に多少は練習  
していたから」

「は、はい……………」

ぎこちない笑顔を俺に返してくれる蘭ちゃん。

それにしても、この酢豚？　って美味しいな。

ナターシャ姉さんにも送ってあげたいな。

それから少しして、食べ終えた俺は会計を済ませるべくレジに向かう。

「ど、どうしたんですか！？　リアムさん」

それに蘭ちゃんが慌てた声で反応する。

「え？　お会計を済まそうと」

「そ、そんな　」

「そんなことをガキが気にするんじゃない！」

蘭ちゃん何か言い終わる前に蘭ちゃん達のお爺さんの声が厨房の方から聞こえてくる。

俺は一瞬、キョトンとしてしまうが、すぐに意味を理解して。

「ありがとうございます」

と、お爺さんに頭を下げる。きっと、蘭ちゃんを助けたという話を聞いた俺に対してのお礼なのだろう。でも正面を向かって、そういうことを言えるようなタイプではないマスターはこうして、俺にお礼をしてきているのだろう。

それをお爺さんは

「ふん」

と、顔をそむけながら、無視した。

良い人だ。

「そ、そんな」

「そんなことをガキが気にするんじゃないねえ！」

お、お爺ちゃん！？

リアムさんに何てことを言ってるの！？

普通、こんなこと言われたら怒るよ！

ただでさえも、馬鹿兄ばかにいがリアムさんに失礼なことをしたのに………



私は怒っているであろうリアムさんの顔をおずおずと見る。

やっぱり……怒ってない？

それどころか、ニコニコ顔で

「ありがとうございます」

そうお爺ちゃんに言ってくれる。

あれ？

それを聞いたお爺ちゃんは

「ふん」

と、鼻を鳴らしながら顔を背ける。

そんなことしらの普通に、怒るって！ リアムさんでも！

「蘭ちゃんのお爺さんって良い人だね」

「はい？」

私の考えとは裏腹にリアムさんは笑顔でそう言ってくれる。

……また、笑顔に見とれちゃった。

一夏さん……「めんなさい」。

この時、私はそんな私を神妙な顔つきで見ている兄の視線に気づくことができなかった。

「なあ、リアム、俺達の家で話さないか？」

ぼお　　としていた私を置いてけぼりにして、兄は話しを進める。

リアムさんは右手につけた高そうな腕時計を少し見て、『少しだけなら』と返事をする。

これに私は少し嬉しくなった。

もう少しだけ、一緒にいられるんだ。

「それじゃあ、行こうぜ」

兄の後に私もついて家に入るために店を一度出る。

お店と自宅は別々になっている。

繋がっているとお店に私生活が紛れてしまいかもしれないから、とお爺ちゃんが昔、言っていた。

そして、リビングで少し話を始める。

「さっき、も聞いたけどリアムってどこに住んでいるんだ？」

「ISS学園」

「はあ？」

え？

「IS学園だよ、ほら、この近くにある」

「い、いや、それは知っているけどさ……………ISって女にしか……………」

「織斑一夏？　っていう子も動かせるだろ？」

「確かに……………だけどさ、そんなことニュースでは……………」

「あ、そうか、まだだったんだ。ん？　確か、今日か」

リアムさんはテレビをつけても良い？　と聞いてテレビをつける。

すると、速報です。とニュースが流れる。

『本日、アメリカ政府より、我が国にもISを操縦できる男がいるとの情報が各国のメディアに送られてきました！』

兄と私は顔を見合わせる。

「ね？　これ俺のことなんだ」

『え　　　　　　っ！？』

私と兄の声が重なったのだった。

「ふう、気持ち良かった」

蘭ちゃんの家で少し喋った後、俺はIS学園の俺専用の一人部屋に戻り、シャワーを浴びた。

なぜ、一人部屋かと言うと俺が一人部屋を希望したからだ。

俺は色々と本国や会社と色々としているので、相部屋だと色々almazから。

まあ、データを盗みそうな奴なんて見たらすぐに分かるけどな。

IS学園の今年、入学する生徒と在校生と教官の情報は既にCI Aから送られてきて見ている。

警戒するべきは会長である更識楯無くらいだ。

織斑千冬も、もちろん、警戒するにこしたことはないが、正直、彼女は『武』の才能はあっても『政治』の才能は皆無だろう。

そうでなければ、第二回モンド・グロッソで織村一夏を『亡国機業』に誘拐されることもなかっただろうし、ドイツにした借りの交渉も、もう少しマシなものにできただろう。

そもそも、ドイツが『亡国機業』を手引きした可能性さえある状況で織斑一夏を日本に置いてドイツに一年もいるなど下策も下策、正直に言っただけがどうかしているとは思えない。

なぜなら、モンド・グロッソの決勝戦の日に『たまたま』織斑一夏が誘拐されるなんて、変としか言いようがない。

大会が始まる前から既に、織斑千冬は優勝候補だった。もし、織斑一夏を誘拐するなら警備が薄い大会前でなく、決勝戦に出る選手の関係者として警備が厳重になるはずの日に誘拐するなんて内部に裏切り者がいるか、国家がテロ組織に力を貸したとしか考えられないから。

織斑千冬がドイツにいる間、篠ノ之博士<sup>ささの</sup>が織斑一夏を守っていた可能性も否定できないけど。

今年、入学する代表候補で俺を除けば二人の専用機持っている。その一人、セシリア・オルコット？ という子は悪いけど眼中にないと言って良い。BT兵器の適正が高いだけ。

入学試験の時の映像を見せてもらったけど、正直、酷いものだった。

最低限の装備しかしていない日本製のISである打鉄<sup>うちがね</sup>を装備した教官に対して専用機持ちならノダメージで勝って当然なのにダメ

ージを受け、なおかつ、二十分もかった時点で負けと言ってもおかしくない。

専用機と入試に使われる量産機（最低限の装備の状態）では、プロの野球チームが中学生の野球チームと試合すると同じ位、戦力差があるというのに。

政治に関してもイギリスはB T兵器の技術を守る側であってアメリカの技術を奪う気はないだろう。

もし仮にアメリカの技術を盗めたとしても実現するにはB T兵器の開発を中止しないといけないからな。その場合、コストの問題で正直、利口と呼べない。

確か、ドイツも今、A I C（慣性停止結界）の開発で忙しいはずだ。

まあ、A I Cはアメリカの第三世代よりも作るのに金がかかるのが問題と言っていたからな……表向きの第三世代だけだ。

唯一、アメリカの技術を欲しがるとすればフランスくらいだろう。あそこは色々と大変だからな。

後、最大の懸念が更識簪<sup>オウシナガンザシ</sup>。この子については、ほとんど情報が無い。I S学園の入学試験の映像さえも、公開されていないから本当に謎と言っても良い。唯一分かっているのは更識楯無の妹であることだけ。まあ、アメリカ側の人間だけの話かもしれないけど、今後、ある程度、探ればいいか。

ふと、テーブルを見るとマナーモードにしている携帯電話が鳴っ

ているのに気づいた。

携帯を開いてディスプレイを見ると、映し出されている名前はナターシャ姉さんだった。

「もしもし」

『リアム？ 大丈夫だった？ 道に迷わなかった？ 変な人に絡ま  
れなかった？』

……………一つとも記憶にある。

「だ、大丈夫だよ」

『……………本当に？』

「本当」

『一応、信じてあげる。それで、今日、何か変わったことは？』

若干、納得していなさうだけど、話しを進めるナターシャ姉さん。

「……………更識楯無が接触して来た」

『っ！？』

おそらく電話の向こう側で絶句していることだろう。

『ちょっと、リアム！ その話を詳しく話さない！ 最悪、上に  
報告しないといけない案件よ！』

「大丈夫。挨拶くらいだよ。向こうも、たぶん『俺』という人間性を見たかったんだと思う」

『……………本当に何もなかったのね？　ちよつと、私はこれから本国を離れるから、なかなか連絡をとれないと思うけど……………何かあればすぐに、イーリスに相談するのよ。くれぐれも無茶はしないように』

「え？　どこか演習でも行くの？」

『……………ごめんなさい。機密だから』

「分かった。それじゃあ、わざわざ、日本のお菓子をそっちに置きたんだけど無駄になったかな？」

『何よ、それ！？　いつ、届くの？』

「え？　たぶん、四日後」

『ギリギリね、うん、受け取ってから行くから大丈夫。安心しなさい』

「そっか、良かった。じゃあ、こっちはもう夜だから、寝るね」

『ええ、おやすみなさい。私のリアム』

「はあ！？」

反論しようとした時には既に電話は切られたようで、何を言って



も返答はなかった。

「はあ」

一度、盛大にため息をついた後に俺はベッドに横になる。

これから、大変になるだろう。

「どういうことですか？」

時刻は未だ早い時間。

リアムは一つの演習場に呼びだされていた。

リアムの存在が一般のメディアに公開されたのは昨日のことだが、政府、つまり、各国の代表とIS学園の関係者は一月ほど前、つまり織斑一夏がISを起動させて三日後には知っていた。

「おまえは学生なのだ。高校に入学する場合試験を行うのは当然であろっ？」

そう言ったのは、黒のビジネススーツをきつちりと着こなす美人、  
織斑千冬だった。

「……………アメリカ政府および、エターナル・ヴァルキュリア EV社の許可は？」

EV社、それはリアムの父が設立した会社であり、リアムのIS  
の開発を担当している会社である。

「むろんだ」

「……………相手はあなたですか？」

「いや、違う」

それを聞いて驚くリアム。

「俺の戦闘データはこちらに届いていないのですか？」

「ああ、おまえに関しては、ほとんど情報は開示されていない」

「……………だからですか」

「どういう意味だ？」

「俺は既にIS学園卒業後、正式にアメリカの国家代表になることが  
決定しています。どこかの誰かは学生の間に国家代表になりますが、  
あれは特例でしょう。俺の相手をあなた以外の教師に務ま  
りますか？」

「……………思い上がるな。おまえは、私からみれば、まだまだ、新米<sup>しよしんしゃ</sup>だ」

「分かりました。お相手いたします」

「分かった」

そう言つて、どこかに通信すると一機のISがこちらに近づいてくる。

「あれは……………<sup>ブラクティスクイーン</sup>『練習の女王』……………そうか、IS学園に……………」

「本人の前でその名前で呼んでやるなよ」

苦笑気味で言う千冬に

「分かりました」

リアムは素直にうなづく。

「お待たせしました」

近づいて来たISはラファール・リヴァイヴ（疾風の再誕）。

フランスのデュノア社製の第二世代型だ。

それに関しては別に驚かない。

リアムが驚いたのは

「装備が完全ではない……………」

「そうだ。試験用の装備だ」

そんなリアムの驚きを千冬は何事もないように言っただけ。

「いくら、『ブラクテイスクイーン練習の女王』が操ると言ってもあれは専用機持ちをなめているでしょう？」

リアムは千冬にしか聞こえないように話す。

「それでも、公平を期すためだ」

しかし、リアムの言葉は千冬に受け入れてもらえなかった。

「……………了解しました」

仕方ないのでリアムは『ブラクテイスクイーン練習の女王』こと山田真耶やまだまやの前に立つ。

「え　と、ISを展開してください」

「していますよ」

そう言ったリアムの服装は、まさしくIS学園の制服のままだった。

IS学園では寮以外の場所では基本的に制服の着用が義務付けられている。外出する場合は別だが。

「シールドバリアーは展開しています。問題ありません」

そう言うリアムに、普段温厚な真耶も多少、怒ったようで、目つきが険しくなる。

『Ready……GO』

その開始の合図と共に

「来い、グングニル！」

リアムは黄金に輝く槍を展開する。

本来、武器の名前を呼ぶのは初心者のことなのだが、リアムは気合を入れるためにあえて名前を呼ぶ。

それと同時に真耶はラファール・リヴァイヴ（疾風の再誕）の装備であるサブマシンガンを連射する。

と、言うより、入試用なのでサブマシンガンしか装備されていない。

そもそも、IS学園はISを学ぶための学園である。

既にISを学んでいる代表候補生などを除けばISを動かしたことが皆無な人間ばかりを対象に試験する。

教師が使うISの装備はこれだけで十分なのだ。

たいていの生徒はISに乗っていたとしても、これを避けきれずにエネルギーを零にされる。

真耶はリアムの右から左にかけて連射する。

これでリアムは左にしか移動できない。

もちろん、ISを装備しているなら上という選択肢があるのだが、あいにくISを展開していないリアムにとっては違う。

しかし

「そんな!？」

リアムは空を飛んでみせた。

それは見た真耶まるでリアムが生身の人間ではないように思えた。しかし、これは普通のことである。ISは部分展開が可能なパワードスーツである。

その応用でISが空を飛ぶ基本システムであるPIC部分展開  
パッシフ・イナーシャル・キャンセラー  
できたとしても、何もおかしくない。誰もしただけであつて。

そんな真耶の驚きを余所にリアムは

「貫け！」

グングニルつまり、黄金に輝く槍を真耶に向かって投げる。

リアムが飛んだことにより動揺していた真耶だったが、そこは仮  
ブラクテイス・クイーン  
にも『練習の女王』の称号を得ている女性。

サブマシンガンでグングニルの軌道を変えようとする。

しかし、弾いたはずのグングニルは真耶に向かって再び向かう。

「追尾性！？」

そうオディーンが使ったとされる槍は相手に必ず当たったとされている。

それを再現するために、この漆黒のグングニルにはミサイルのように追尾する性能がつけられている。

例え、サブマシンガンを受けようとも、その中心に存在する核が  
コア  
破壊されない限り、リアムが狙いを定めた相手に向かって飛んでいく。

「くっ！？」

真耶はグングニルを回避するために、上、つまり、空へ飛ぶ。

しかし、それは罠だった。

「え？」

いつの間にかリアムは真耶の目の前までやって来ていたのだ。

「これでお終いです。デュランダル！」

リアムが握っていたのは、これも黄金に輝いているロングソード。ロングソードとは馬上では片手、徒歩では両手で使う剣である。

それが真耶の目の前まで迫っている。

真耶はそれをギリギリの所で避ける。

この奇襲を避けたのは真耶の経験がなせる技だろう。

しかし

リアムは口元を軽く緩める。

「きゃあ!？」

真耶はリアムのデュランダルを避けるべく上に行くのを諦めて右



に移動する。

その回避方こそ畏だった。

リアムが初めに放っていたグングニルが真耶に直撃したのだ。

不意をつかれてしまったため、あきらかに軽傷ではない。シールドバリアーが発動してしまっている以上、かなりのダメージだ。

おそらく、いくつか動作不良を起こしている部品もある可能性がある。  
パーツ

なぜなら、ISを操縦している人間はシールドバリアーによって守られている。しかし、ISの装甲は実体を持っている攻撃を受ければ壊れるのは自然の摂理だ。

「終わりだと言ったでしょ？」

そこからリアムはデュランダルを使い、真耶を斬る。

それも装甲がない所を、つまり、シールドバリアーが発動する。

先ほど、グングニルに貫かれたために受けたダメージとこの攻撃によって受けるダメージは相当なものだ。

本来のラファール・リヴァイヴ（疾風の再誕）ならば、ここで自らのダメージを受けるのを覚悟で手榴弾を使うのだが、生憎、試験のためにラファール・リヴァイヴ（疾風の再誕）に備え付けられている装備はサブマシンガンだけだ。

「くっ!？」

真耶は何とかリアムと距離をとるが

「終わりと言ったでしょ？」

いつの間にかリアムの手に戻っていたグングニルが、また真耶を貫く。

また、シールドバリアが発動する。

本来より試験用に少ないエネルギーしか積んでいないラファール・リヴァイヴ（疾風の再誕）のエネルギーはそこで零になったのだった。

試験が始まってから、終わりの合図が聞こえて来るまでに三分しか経っていなかったことにリアム以外にここにいた者は全員、絶句していたのだった。

### Episode 3 KNFの食事と試験（後書き）

女神「戦闘シーン手を抜きすぎじゃない？」

翼「戦闘シーン、あまり書きたくありません、ISでの戦闘シーン書くの難しいから……………」

神「……………あんたねえ……………」

翼「だって、この物語はコミュニケーションと心理描写がメインであつて、別にISでの戦闘重視じゃないんだもん！ 何のためにリアムを究極無敵のチート機に乗せるのか！？ 早く戦闘が終わるから！ そのためです！（ちなみに、オーデインは未だに未完成）」

神「……………まあ、次回の展開は読めるけど……………真耶攻略、頑張renaさい。ちなみに、にじファンの日間ランキング、昨日の二十一時頃……………二位だったわよ……………」

翼「はい！ 次回は真耶がメインのお話です！ それと、ランキングについては、応援してくださっている皆様、ありがとうございます！ ただ、そのプレシャーに若干、ビビってます（汗 これからもよろしく願いしますっ）」

## Episode 4 KNFのシャワールーム（前書き）

活動報告の方に、リアムのプロフィール（専用機情報などを除く）を公開しました。

よろしければ、見てやってください。

## Episode 4 KNFのシャワールーム

「す、すいませんっ、織斑先生、あれほど、新人に負けるなって言われてたのに」

今、俺はとても、後悔している。

早朝に呼び出されたことと、明らかに俺を舐めた学園というより織斑千冬の対応にいつい苛立って怒って本気をだしてしまったけど……目の前で泣かせてしまっている女の子を見ると、ただ、罪悪感が押し寄せてくる。

業界で、つまりIS業界では、知らぬ者がいない『ブラクテイスクイーン練習の女王』  
その特徴を俺はすっかり忘れてしまっていた。

『ブラクテイスクイーン練習の女王』は涙もろい。

織斑千冬も若干、渋い顔をしている。

仕方ない。

「えっと、山田先生」

「は、はひい!？」

かなり脅えられてしまっている。

『練習の女王』ブラクティスクイーン はナターシャ姉さんより上だったはず………だけど、顔が童顔なせいとか、かなり幼く見える。俺よりも下に………見える。

そんな『練習の女王』ブラクティスクイーン に向かって

「申し訳ありませんでした」

頭を下げた。

「え、え？ ええ！？」

「申し訳ありません。生意気なことをしてしまって」

生意気なことをしてしまったのは本当だ。

例え、いらいらしていることは、いえ、目上の人に生意気なことをして良い訳がない。

「い、いえっ。私も完全な装備じゃなくて………」

「それでもです」

俺は頭を上げると、『練習の女王』ブラクティスクイーン の手をとって、『練習の女王』ブラクティスクイーン の目を真っ直ぐ見詰めながらそう言う。

「は、はふっ」

なぜか、山田先生は顔をなぜか真っ赤にして、俺の手を振りほど

いて織斑千冬の後ろに隠れてしまっ。

「織斑さんにも、申し訳ありませんでした」

「ふん、気にするな。それから、これからは教師だ。織斑先生と呼べ」

「分かりました」

「それで、なんですが」

「どうした？」

「ここから近いシャワールームはどこですか？」

本当なら寮まで戻って浴びるのがベストなんだが、生憎、このアリーナから寮までは結構な距離がある。

例え、今が春でも未だに少しか肌寒い、汗をかいたまま寮までの距離を歩くのはできることなら避けたい。

「……………そうだな。このアリーナのシャワールームを使うと良い。ただ……………」

「はい、女子用しかないんですね」

このアリーナはISの訓練をするためのアリーナ。

つまり、女性しか使用しないのだ。

わざわざ、必要ない男子用のシャワールームを作るはずがない。

「それなら、山田君」

「は、はいっ!？」

「申し訳ないが、イーリーをシャワールームに連れて行ってやってくれないか？ 私はこの後、少々、外部の人間と会わないといけないものでね。時間がないんだ」

「え、でも……そのお」

何か申し訳ないことをしているような気がする。

「すみません」

やっぱり寮に帰ります、と言うより早く織斑先生が口を開く。

「山田先生、仮にもあなたはこの春から教師になるんですよ。生徒にシャワールームを案内することくらいあるでしょう」

まるで親が子供にさとすように織村先生は『ブラクティスクイーン練習の女王』  
「そう言う。」

「……………そうですね……………分かりましたっ！ 頑張ります」

大きな二つの膨らみ前でガッツポーズをとる『ブラクティスクイーン練習の女王』……………  
教師に向かってこんなことを言うものじゃないけど、一瞬、可愛  
いと思ってしまった……………



「では、え　と」

「リラムです。リラム・イーリー。これからよろしくお願いしますね」

「私は山田真耶です。こちらこそ」

「では、後はお願いします」

そう言っ て織斑先生はどこかに行ってしまった。

「では、私達も行きましょうか」

「はい」

そう言っ た時だった。

山田先生が何もない所で躓いた。

俺は咄嗟に体を山田先生の前に滑り込ませる。

そして、受け止める。

幸いなことに山田先生の背は俺よりも遥かに低い。

そのおかげで、なんなく受け止められた。

しかし……………山田先生の女性特有の膨らみが俺の胸にあたる……………

「す、すいませんっ!？」

慌ててどうとすることから余計に俺の胸に山田先生のが……………あたる。

それもISスーツは基本的に昔の日本のスクール水着のようなスーツだ。

直に感触が伝わると言っても過言じゃない。

それも山田先生のISスーツは扇状に胸の部分が開いていて胸が見える。俺の胸に当たって潰れているせいで、それが余計に強調されている。

正直に言って男としては、非常にまずい状況だ。

「す、すぐにどきますからっ!」

そう言ってくれるが……………山田先生は足を絡ませて、もう一度、俺に倒れ込んで来る。

うつ、考えないようにしていたけど……………山田先生の胸ってナターシャ姉さんよりも……………大きい。

っ!？ 俺は何を考えていたんだ。

「山田先生……俺に任せてください。体の力を抜いて……」

「え？ あ、はひい……」

ふう、俺はゆっくりと息を吐きながら、山田先生の肩を持って立たせてあげる。

「ありがとうございますう」

山田先生はモジモジしながら、少し涙目でこちらを見てくる。

「い、いえ」

「そ、それじゃあ、シャワールームに行きましょうか！」

無理矢理といった感じで元気を出して、シャワールームに案内してくれようとする山田先生。

良かった……あんまり気にしてないようだな。

少し離れた所で、本当に小さくだけど山田先生は

「……どうしよう……もう、お嫁にいけない……」

と、山田先生が言っているのを聞いてしまった。

……山田先生が初うづというのもあるんだろうけど、あれほど、胸を不可抗力とは、いえ、異性に押し付けてしまったのは乙女としてはいけないことなのだろう。

俺にできることと言えば……

「山田先生！」

「はひい！？ 何ですか！？」

「もし、誰の所にもお嫁にいけないなら、俺がもらってあげますよ」

微笑みながら、そう言う。

もちろん、俺が山田先生のような美人を本当にお嫁にもらえるとは思っていないし、それは失礼にあたるだろう。

だけど、やっぱり、事故とは、いえ、俺が傷つけてしまったんだ。

責任くらいはとるぞ。

「っ！？ あ、いえ………その………でも………あの、わたし………あうあう」

顔を赤くする山田先生。

やっぱり、男にこんなことを言われた事なんてないような初<sup>つひ</sup>な人だったのか……俺も言ったのは初めてだけど……

それから、俺は真っ赤なトマトみたいな顔をした山田先生に連れられてシャワールームに向かったのだった。

皆さん……初めまして、山田真耶ですう。

今年から先輩である織村千冬先輩と同じIS学園に勤務することになりました。

本番に専ら弱かったため代表選手には選ばれなかったのですが基本的な技術が認められて見事、IS学園の先生に抜擢されたんです。

織斑先輩もいるし、本当に楽しくなるだろう、と思っていました

……

しかし、私はそうそうに失敗してしまいました。

世界で初めてISを使える男の子である織斑一夏君のISの試験を受け持ちました。

そこで私はてんぱってしまつて織斑君に突撃してしまいました。

そして、それを避けられて……………負けてしまいました。

物凄く、怒られました。

織斑先生と一緒に謝ってくれたので、なんとか首にはなりませんでしたが。

その名誉挽回をすべく、もう一人の男の子のIS操縦者であるアメリカの子の試験を受け持ちました。

その子は織斑君とは違い、専用機を持っているそうなので、私も頑張らないと！ と思い気合をいれて、アリーナに出たのですが……………結果は惨敗。

相手の男の子はISの展開すらしていません。

こんなんだから『ブラクテイスクイーン練習の女王』なんて呼ばれてしまふんだと思います……………

模擬戦では全勝……………公式戦では全敗……………だったから、つけられた名前。

IS学園では、そんなことを言われないように頑張ろうと思ったのに……………

そして、落ち込んでいたら……男の子をシャワールームに連れて行くように織斑先生に言われた……どうしよう、男の子と何て……喋ったこともなにのに……

でも、イーリー君は悪い子じゃなさそうなので……勇気を出して連れて行こうと思いました。

すると……何もない場所で躓いてしまいました。

ああ、私って何でこんなにダメな子なんだろう。

そう思った時だった。

イーリー君が抱きとめてくれた。

だけど……その……男の子に胸を押しつけてしまった。

こんなことしたことないですし……

恥ずかしい。

恥ずかしさを紛らわすために、何もなかったかのように、

「そ、それじゃあ、シャワールームに行きましょうか！」  
と言った。

そして、少し言った所で、ふと無意識の内に

「……どうしよう……もう、お嫁にいけない……」

と、呟いてしまった。

そんなことを呟いてしまったことで、さらに顔が真っ赤になる。

何を言っているんだろう……

自己嫌悪に陥ってしまいそうになった時、後ろからイーリー君が

……

「山田先生！」

「はひい！？ 何ですか！？」

声をかけてくれました。

そして、彼は

「もし、誰の所にもお嫁にいけないなら、俺がもらってあげますよ」

そんなことを言ってくれます。

うう！？

私とイーリー君は教師と生徒なのに……でも、イーリー君の顔を見ていたら……見ていたら……胸がときどきしまいた。

こんな気持ち初めてです……

織斑先生を見ていて思う憧れとは違います……



そんな訳の分からない感情が私の胸の中に渦巻いていたから……

「っ!？ あ、いえ……その……でも……あの、わたし……  
あうあう」

そんな変な返事しかできない……

それから、私は何も言わずにイーリー君をシャワールームまで案内します……

「先にどうぞ」

そう言ってくれるイーリー君……

「い、いえ、私は先生ですから、あ、後で構いませんっ」

動揺しているのがまる分かりです……

「分かりました。では、お先に失礼します。申し訳ありませんが、誰も入ってこないように見張っていてもらえますか？」

「………わかりました」

イーリー君は、何事もないようにシャワールームに入って行く。

ああ、私……教師なのに……

でも、イーリー君が気をつかってなのかもしれないけど……

言ってくれた言葉……嬉しかったなあ。

もしかしたら、私、IS学園やめても永久就職できるのかなあ……

「ふう」

俺はシャワーを浴びながら、さっきのことを考える。

責任をとると言ったことに嘘はないし後悔もない。

でも、やっぱり、もう少しだけ、色々なことを知ってから言うべきことだろう、さっきの言葉は女の人にとって一生が決まる言葉なんだから。

だから、反省は必要だ。

これからは、もう少し違った慰め方をしよう。

今度、ナターシャ姉さんに相談するのもいいかもしれない。

でも、ナターシャ姉さんも、ああ見えて俺という邪魔者がいるから彼氏とかいないだろし。

ISの操縦者は職場に出会えないからなあ。

それも色々問題だな。

前にナターシャ姉さんの親友のイーリスさんが言っていたけど、IS操縦者というだけで合コンなどをする場合も敬遠されるらしい。

主に男の方が恐縮してしまって合コンにならないからだとか。

時々いる、勇者も、ほとんどが口だけのチキンだって言ってたからな。

そんな人にナターシャ姉さんは任せられない。

俺って……シスコンなのかな？

でも、やっぱり、ナターシャ姉さんには幸せになって欲しいし。

……と、話しがズレたな。

うん、今度、誰かに相談することにしよう。

さてと、あまり外で山田先生を待たすのも悪いし、出るか。

俺は備え付けられていたタオルを使って体を拭くと、また、制服を着なおす。

この時、既に太陽は真上、近くなっているのに俺は気づいていなかった。

## Episode 4 KNFのシャワールーム（後書き）

女神「また、発動したわね！ KNF！」

天童翼「……………今回はリアムが口説いただけのような……………」

神「違うわよ！ 今回は山田が落ち込んでいる状態で、励ましの意味もこもつての言葉よ！ ポ モンで言うなら効果抜群よ！」

翼「……………そうなのかな？」

神「ええ、そうよ！ だけど、そろそろ、メインのヒロインを食べたいわね……………ジュルリ」

翼「……………怖い……………ガクガクガク」

神「震えていても仕方ないわよ！ さっさと、次の話を書きなさい！」

翼「はひい！」

## **E p i s o d e 0 5    K N F、お嬢様遭遇す（前書き）**

次回からは更新時間を07:00に変更します。  
ご了承ください。

## Episode 05 KNF、お嬢様遭遇す

IS学園、それはある意味で俺にとって最悪な場所だ。

なぜなら、俺の性別が男だから。

そう、男と女で別れていて一番ないと困るもの……考えてもらえれば、すぐに分かる。

それは『お手洗い』だ！

生理的現象のため、これをしないで一日過ごしていることは不可能。

そう言う、俺も人間であるため、この現象は存在する………だから、お手洗いに行く必要がある………

事の発端は山田先生と別れて飯でも食いに行こうと思っていた時だ。

壁に備え付けられていた時計を見ると、時刻は十一時半。

うん、昼飯にはちょうど良い時間だ。

しかし、ここで思い出してしまった。

俺の試験は急な呼びだしだったため、朝からずっとお手洗いに  
行っていない。

いや、正確ではない。

正確には昨晚、寝る前に行ったのが最後になる。時間的には、ほ  
んの十二時間程経過している……

人間、意識すると急に行きたくなるものである。

しかし、ここは天下の女の園、IS学園、男が使用できるトイレ  
など、外来用に備え付けられた職員室か事務所の横しか存在しない。  
後は、俺の自室ということになる。

ちなみに、俺が今いる所は、そのどちらからも遠い学校の食堂付  
近である。

山田先生がIS学園の食堂が今日は祝日だけど営業していると言  
っていたので向かっているんだけど……

非常に不味い。

何が不味いかは鈍感な人以外は気づいてくれるだろう。

嫌な汗が背中を伝う……

俺は事務室の横にある天国トイレに全速力で走る。

確か、IS学園の規則には廊下を走ってはいけないというものが



あつたが、今は緊急事態だ。ロシアがアメリカに向かって核弾頭を  
発射しようとしている時くらい、やばい。

この歳で、漏らしたなんて……………俺は高校生活をIS学園で送れ  
なくなってしまう。

それも、ここには各国から色々な人がいる。

やばい……………これからIS関係の職につく場合、非常に不味い！

一瞬、ISを使おうか？ という誘惑もあつたが、そこは厳しい  
規則により制限されているので、使えない。

ああ！ 何のために！ 存在するんだよ！ IS！

少なくとも、天国<sup>トイレ</sup>に行くために存在するパワードスーツではない  
ことは知っているけど！

俺は走る。

ただ、走る。

天国<sup>トイレ</sup>に向かって。

周りから色々と声が聞こえるけど、全部、無視！

よし、もう少し！

天国<sup>トイレ</sup>が見えた時のことだ。

俺の目の前に俺と同じ金色の髪の女が飛び出して来た。

スカートをひざ下まで伸ばしているお嬢様風の女の子。余談だけど、IS学園の制服は改造？ 可なので、大抵はミニスカートに皆改造している。そういう俺も長いスカートよりも、短いスカートの方が好きなのは秘密だ。

「チエルシー、事務室はこちらで合っていますの？」

……………思い出した、こいつはイギリス代表候補のセシリア・オルコットだ。

急ブレーキをかけようとするが、間に合わない。

ドンと効果音が聞こえてきそうな程、綺麗にセシリアとぶつかった。

「きゃあっ!？」

俺がセシリアを押し倒す形になって二人で転倒してしまう。

……………ナターシャ姉さんに見つかったら大目玉だな。今、本国だから大丈夫だろうけど。

「な、なんですよ!？ あなたは!」

俺の下敷きになっているセシリア・オルコットは焦ったようにそう言う。

そんなセシリアに対して俺は、素早く立ち上がり、

「ぶつかってしまつて、すみません、時間がないので、失礼します」  
それだけ、言い残して天国<sup>トイレ</sup>に駆け出す。

「え？　ちょ、ちょっと待ちなさい！　男のくせに私にぶつかつて、それだけですの！」

……女尊男卑の風潮が彼女にこんなことを言わせるんだろう。  
何が男女平等な社会だ。聞いてあきれる。

でも、今はそんなことを気にしている場合じゃない。

余談だけど、無事に俺は天国<sup>トイレ</sup>に辿り着くことができた。

無事に天国<sup>トイレ</sup>に辿り着いた俺は昼食を取るべくISS学園の食堂に向  
かわなかった。

正確には一度、部屋に戻って色々してから行こうと思ったのが間  
違いだった。

俺の携帯を開いてみたら……着信回数二十六回、メール件数三十五通という、よく分からない状況になっていた。

メールを開こうとした時に三十七回目の着信が入った。

「もしもし」

俺が電話をとると

『若様！ オーディンを使つたとは本当ですか！？』

スピーカーから、大音量の声が聞こえてくる。俺の恩人である女性<sup>と</sup>の一人だ。

「レーナさん、声が大きいです」

レーナ・アंकシャス。エターナル・ヴァルキュリア現EV社の社長にして経営、政治に関しては父さんに匹敵する程の天才。いや、この二つに関しては父さんさえ、上回るかもしれない。まあ、究極に運動ができない人だけ。

『も、申し訳ありません、若様………』

「大丈夫です。まだ、オーディンは使っていません。使ったのはグングニルとデュランダルだけです。二つとも能力は最低限しか使っていませんし」

『……………そうですか……………それでも申し訳ありません。こちらのミスです。アメリカ政府の動きをよみきれませんでした……………まさか、この段階でオーディンでの戦闘をさせようとするとは……………』

「たぶん、E Vを良く思わない一部の官僚の仕業でしょう。だいた  
い、目星はついてるんでしょう?」

『はい』

さすがは……………レーナさん。

『近日中にアメリカ政府から追放しますよ。そういう輩は裏金に絡  
んでいる場合が多いですから』

「そうですね」

『それですが、若様、やはり、オーディンのD Qを完成させるべ  
きです。若様の安全のためにも、あのシステムを不完全な状態で使  
用すれば、どうなるかわかりません。例え、若様の母君が開発され  
たシステムだとしても』

今、レーナさんが言った母というのは俺の生みの親のことじゃな  
い。俺のもう一人の母親の方だ。

「……………どうしても?」

『ナターシャさんにも先ほど、了解を得ました。すぐに本国に戻っ  
て来てください。飛行機はこちらで用意させました。若様のオーデ  
インは我々の希望でもあるのですからお願いします。IS学園の始  
業式の日までには調整は完了しますから。それに母君も、きつと若  
様にはできる限り万全の状態でD Qを使ってもらいたいはずです』

「……………分かった。戻るよ。フライトの時間は?」

『今から空港に向かってももらえれば、ギリギリ間に合う便を用意しました』

という、やりとりがあつたため、俺は朝から何も食べずに本<sup>アメリカ</sup>国に戻ることに<sup>アメリカ</sup>なつた。

……………腹減つたな。

「ふう」

私は若様、つまり、私の恩人であるリアム・イーリーに電話をかけた後、政府の高官のリストを見ながら思考する。

若様は私が尊敬しているのは『若様のお父君』と、思われているようだけど、私が尊敬しているのは『若様のお父君』ではなく『若様』だ。

そもそも、私がこの<sup>エターナル・ヴァルキュリア</sup>EV社に入るきっかけも『若様のお父君』ではなく『若様』のために何かしたいと思つたからだ。

あれは、まだ、私が一般人ではなく、政府の高官を相手にするスパイに近いことを行っていた時のことだ。別に犯罪をしていた訳じゃない。ただ、お酒の席で政府の高官に近づいて極秘の情報を引き出したりするのが仕事だった。

そんな仕事をしていた、ある日、ある会社からEV社という会社の社長から情報を引き出して欲しいと依頼された。報酬は十年程、遊んで暮らせる額だった。もちろん、成功報酬の方だが。

そんな美味しい話しあるはずがない、と思い、調べてみると、その会社は私にそれだけの額を支払っても情報を欲したのには理由がきちんとあった。

日本の科学者が作ったパワードスーツISの兵器開発権をEV社にとられそうになっていたのだ。エターナル・ヴァルキュリア

確かに、ISの兵器開発には金がかかる、と聞いていた。もちろん、政府の高官からだけど。それを行うには、どうしても政府の援助が必要になる。

仮にその会社が政府の援助をEV社にとられてしまった場合、たちまち資金が底をつき、倒産してしまう。エターナル・ヴァルキュリア

私に來た依頼はどの政府の高官がEV社を支援しているかを調べることだった。おそらく、その政府の高官に裏金を渡して支援を潰す算段だろう。

主要な人物は分かるが、表立っていない高官は分からないから私に調べて欲しいのだろう。

エターナル・ヴァルキュリア

EV社の社長は女好きらしいから、簡単だろうとたかをくくっていた。今まで誰にも肌を許したことの無い私にとっては。

エターナル・ヴァルキュリア

しかし、その考えが甘かったことを知るのは、EV社の社長つまり、若様のお父君と話した時だった。お酒の席で一緒にになり、そのまま、ホテルなどへ、と置いていたのだけど、若様のお父君に案内されたのは若様のいる本宅だった。

……… 三人の奥方に紹介するから、と言って連れて行かれました。

私を連れていったことが初めてではないようで奥方達は笑顔で迎えてくれました………

夜が遅かったこともあり、私はイーリー家に泊まるように言われました………

こんなことは初めての私が戸惑っている間に泊まる用意を完了させたイーリー家の人達によって強制的に泊まらせられました。

その時点でイーリー家は異常だと思っていたのですが、その家の長男は私の想像を遥かに凌ぐ存在でした。

彼は私に会った途端に

「大丈夫？」



と、聞いてきました。

さすがに、情報を聞きだすまでは愛想よくしないといけないので、私は

「心配してくれて、ありがとう。お姉さんは別に余所のお家に泊まっても、しんどくないよ」

と言った。

そこで若様は……

「違うよ。お姉さん、辛そうな顔してる」

と……確かにそう言った。

今まで、こんな仕事をしている私をあざ笑うかのような視線は受けたことはあった。

だけど、こんなまるで、実の親が実の子を心配してくれるような視線を受けたのは初めてだった。

私には家族はいないから……

「……僕、お姉さんは大丈夫なんだよ」

「ダメ。お姉さんは、無理してる。無理してたら、辛いよ。だから」

そう言って若様は私を三人の母君の元へ連れて行ってくださった。

「ママあ　　っ」

「なに？　リアム」

「この人、辛そう。だから、助ける」

「……………いえ……………私は……………」

困ったような顔を浮かべた私に若様の生みの親であるリーナ様は

「ふふっ、そうね。一緒に何か楽しいことをしてあげなさい」

「うん！　だから、お庭に出るよ！」

その日、まる一日、私は若様と外で遊ぶことになった。

若様が言ってくれる言葉一つ一つに温もりを感じた。

日が傾いて来た時だった。

「じゃあ、戻ろうか」

若様の言葉を聞いた時に気づいた。

私は既に大人だというのに若様と遊ぶことに夢中になっていた。

まるで、親が子供に甘えるように若様の言葉を遊びに甘えていた。

その日、私は生まれ変わることを誓った。

それにかから私は<sup>エターナル・ヴァルキュリア</sup>EV社に就職し若様の助けになろうと必死に努力して副社長という地位についた時のことだ。

社長と奥方の死。

リアム様は一人になった。

私は若様を引き取りたかった。

だけど、若様はナターシャさんという方に引き取られた。若様の親類であつたし、若様の決定に私は異を唱えなかった。

そして若様は私に<sup>エターナル・ヴァルキュリア</sup>EV社を任せてくださった。

若様の母君の一人であるムーラ様が提唱したDQと共に。

……私はそこで再び誓った若様に完璧な状態の<sup>エターナル・ヴァルキュリア</sup>EV社とムーラ様が残したDQを守ると。

もちろん、若様のこともできる限りサポートしていくつもりで。

やっと私が社長代理に就任して落ち着いた時だった。

若様がISを操縦できることが分かった。

正直に言って、若様ならできそうな気がして仕方なかったので別に驚かない。

私は若様をモルモットにされないために、ナターシャさんと社長エターナル・の親友である軍人のタリスさんと共に色々と根回しをした結果、EヴァルキュリアV社の専属パイロットにすることができた。

これで、私は本当の意味で若様に全てお渡しできる。

私は信用できる数人の部下と共にDQ搭載ISオーデインを開発した。

技術的なことはムーラ様が提唱されていたので、正直、開発は難航しなかった。

唯一の問題があるとすれば誰も扱えなかったことだ、オーデインを。

若様を含めて。

一時はオーデインの開発は中止されようとしていた。

しかし、若様がムーラ様の遺品の中から最後のピースを見つけてくださった。

キーボードシステム。

ISをパソコンと同じようにキーボードで操作するシステム。誰

も思いもしなかった。

だけど、これで膨大な情報処理が可能となりDQは完成した。もちろん、並みの人間には扱えなかった。だけど、若様は問題なく使えたので問題ない。

そして、最後の調整をしている最中に若様はIS学園に入学することが決まり、日本に行ってしまった。

後は、想像通りになった。

不完全な状態でのグングニルとデュランダルの使用………まあ、これには一部の政府の官僚が関与していたのだけど。

そして若様の安全を確保するためにDQを未完成ながらも調整する必要がある。

だから、一度、若様には本国に戻って来てもらおう。

ああ、不謹慎ですが、若様に会えるのが楽しみで仕方ない。

そして、ムーラ様が提唱されたDQを若様に完全に近い状態でお渡しできることも。

先行試作第五世代ISオーデインと共に



Episode 05 KNF、お嬢様遭遇す（後書き）

女神「これは……微妙……」

翼「え!？」

神「なんで、こんな微妙なことをするの？　ぶつかった拍子にキスくらいしなさい!」

翼「で、でも、オルコットさんは……戦闘デレでしょ?」

神「はい?」

翼「戦闘して善戦したらデレするという、新しい萌えなんでしょ?」

神「……原作でデレているから……否定できないわね」

翼「でしょ?」

神「それにしても先行試作第五世代IS……束さん、でも、『まだ』第四世代だったわよね」

翼「いいんだもん!　思いついたから!　文句を言われても変えないもん!」

神「他の二次作の時と違って、ここで翼ってなんか子供じゃない?」

翼「だって!　自分がどこに向かいたいのか、分からないんだもん!」

神「……ダメだ、こいつ……とりあえず、読んでくれている人にお礼をいつときなさい、ちなみにレーナさんはリアムのKNFの餌食になってるわ。一応、最後に言っておいてあげる」

翼「こんな、作品ですが、読んでくさってありがとうございます!」

## Episode 06 KNFの新学期

「げっ！？ 関羽！？」

…………俺が所属するはずの教室であるIS学園一年一組から痛そうな音が聞こえてくる。

おそらく拳骨でも落とされたのだろう……

それに声からしておそらく男…………おそらく、この声の主が織斑一夏だろう。

さて、なぜ、俺が授業が始まっているのにも関わらず廊下にいるかという話は簡単だ。

エターナル・ヴァルキリア

EV社がある本国に戻った方がいいが俺の専用ISであるオーディンの調整にかなり時間がかかったためだ。

まあ、そのおかげで、オーディンは完成したと言っても過言ではないんだけど。というより、開発者であるムーラ母さんが死んでしまっているため、これ以上の発展は不可能に近いと言っても過言じゃない。俺も機械を弄るのは好きでも開発は専門外。

もし、オーディンの発展形を作れるとすれば、ISの開発者である篠ノ之博士位だろう。まあ、あの人は今、どこにいるか分からないため、頼みようがないんだけど。

今、思えばムーラ母さんは何かを開発する面においては篠ノ之博士を越える天才だったのだろう。もし、ISがなければムーラ母さ



んがISに近いものを開発していただろうし。

現実逃避はこれくらいにして俺は扉を開けることにした。

おそらく中で何か喋っているのは織斑千冬……いや、織斑先生。

さっきから女子の悲鳴に近い叫び声が聞こえてくるのが良い証拠だ。

織斑先生はISを操縦する女の子達の憧れの的だからな……初代モンド・グロッソ優勝というのはそれほどまでに、凄まじい意味を持っているからな。

まあ、できレース……悪く言えば詐欺みたいなものだったんだけどな。初回は。

未だに世界では第三世代を開発するのに、手間取っているのにあの時、既に織斑先生のISは第二世代後半の力を有していたのだから勝てるはずがない。

勝ったものがあるなら、それは真正正銘の化け物だろう。

それにISを開発段階から操縦していたのなら、誰よりも操作技術が上手いのも頷ける。

だから、機体と実力、両方の面から見ても織村先生は勝利して当然だ。

昔らか変わらないらしいスライド式の扉を開けると、そこには眉を吊り上げた織斑先生の姿があった。

生徒の方はキョトンとしてしまっている。

「すみません。遅れました」

俺は何でもないように言う。

現に仕方なく遅れたんだ。

怒られる要素はどこにもない。

「……………話しは聞いている。おまえの席はそこだ。さっさと座れ」

あきらかに、めんどくさそうな織斑先生を視界に残しながら、指定された席へと向かう。

余談だけど、山田先生もこの教室にいた。

初代ブリュンヒルデ、ブラクテイスクイーン『練習の女王』、世界でISを使えるたった二人の男……………後は、篠ノ之博士の妹。

あきらかに誰かの作為を感じる。

それだけ、織斑一夏を大切にしているのか、あるいは……………『亡国企業』が動きだしたのが問題なのだろう。すでに、アメリカのISは一機、奪われたから……………国家機密だけど。

「お、お、男？」

俺が指定された席は織斑一夏の隣の席だった。

まあ、たった二人しか男はいないんだ。当然と言えば当然か。

「初めまして、織斑一夏君、俺はリアム・イーリー」

「あ、ああ。よろしくな」

たぶん、良い子なんだろう。

「よろしく」

「こら、そこ、私語は慎め」

織斑先生は頭に手を置きながらこちらを見ている。

この後の展開が読んでいるのだろう。

かくいう俺も耳に指をあてる。

そんな俺の動作を見て織斑一夏は首を傾げている。

「お、お、お」

誰か知らないけど一人の女の子が現実に戻って来たようで、声が聞こえ始める。

『二人目の男おおおおおおお！？』

その後、クラスの大抵の女子がそう叫んだのだった。

「な、なあ、イーリー……………さん？」

「何ですか？」

今は一時間目が終わった休み時間。

織村一夏が俺に話しかけて来た。

俺、個人的な意見を言わせてもらえば、織村一夏のこととは嫌いじゃない。というより、好きでも嫌いでもない。彼はおそらく、篠ノ之博士の最大の犠牲者の一人なのだから。

だって？ そうだろ？ ISを動かしたことで世界各国どころか、本当の意味で『亡国企業』に誘拐される可能性まで出て来たんだから。

「本当にISを動かせるのか？」

「はい、動かせますよ。嘘についても何の意味もありませんし」

「そ、そうだよな！」

織斑一夏は少し嬉しそうな顔をしている。やっぱり女ばかりの空間で男が一人というのは色々な意味でしんどいからな。

……先日のお手洗いで俺も痛い目をみたし。

「あのさ、IS学園のたった二人の男なんだし、さ」

そついつことが。

「ああ、改めて、よろしくだな。俺のことはリアムでいいよ」

「じゃあ、俺も一夏で」

「よろしくな、一夏！」

「おう」

嬉しそつに笑う一夏。

基本的には俺は女の人と初対面の人には気を使って丁寧に話をするが、男の友達とは別だ。気を使わずにフランクに話す。

そつこうしている間に一夏に一人の少女が近づいて来た。

彼女は篠ノ之博士の妹、名前はほつぎ箒。

おそらく彼女も姉である篠ノ之博士のせいで普通の学校では生活できなかったのだろう。

IS学園は厄介事を一つに纏めておくには恰好の場所だからな。

さて、一夏が連れていかれてしまったので俺は女の子ばかりの教

室で一人になってしまふ。

別にこれ自体には、戸惑わない。

これでも少しの間、ナターシャ姉さんと共にアメリカ軍のＩＳ部隊にいたんだ。問題ない。

「ちょっと、よろしくて？」

事態は俺が考えていたよりも斜め上にいつていたのを、この時の俺は気づいていなかった。

「何でしょうか？」

ふり返って見ると、以前、事務所の前でぶつかった少女であるセシリア・オルコットが立っていた。

しまった、彼女、同じクラスだったのか。

「先日は失礼しました。なにぶん、緊急の用がありましたもので。それでご用件はなんでしょうか？ ミス・オルコット」

「ふんっ、多少は礼儀をわきまえているようですが、未だに自分が犯したことの重大さがわかっていないようですわね」

「謝罪はさせていただきましたが、それではお気にめさないのですか？」

「まあ、まだ、分からないのですの？」

これだから男は、と付け足すセシリア・オルコット

「申し訳ありません。分かりません」

「教えて差し上げますわ。あなたはイギリス代表にして、入学試験におけるトップである私にわたくしぶつかったのですよ？ 謝罪のために下僕、いえ、奴隷になる位のことをしてみせたら、いかがですか？」

「……………いくら何でも、それは」

一応、こちらが悪いので下手に出る。

俺は一応、常識人のつもりだから、馬鹿をいちいち相手にしない。

「どうしたんだよ、リアム」

そこで篠ノ之博士の妹さんを連れた一夏が教室に戻って来た。

「あら、この方にあなたが、起こした罪を話していませんか？」

「罪？」

「ええ、この方は先日、私にわたくしぶつかったのです」

「はあ？ それのどこが罪なんだ？」

一夏……疑問は分かるが、こういう輩には関わるな。

「まあ、無能の友は猿ですの。さすがは極東の地」

一夏も、さすがに驚きすぎて、何も言い返せないようだ。

「仕方ありませんわね。あなたのような無能の上に立つのは上の者の務め、今回は寛大な私わたくしは許してあげますわ」

そして高らかに笑うセシリア・オルコット。

はあ、何とか馬鹿の気は済んだらしい。後で一夏に礼を言っておこう。

ちょうど、チャイムが鳴った。

扉の方からコツコツと靴の音が聞こえて来る。織村先生か山田先生が近づいて来たのだろう。

自分の席に戻ろうとした所で、セシリア・オルコットは思いだしたように言う。

「あなたのような無能を生んだ親の顔を今度、ぜひ見せていただきたいものですわね」

「ああ、何て言ったんだ？」



「え？」

教室の扉が開く、そこに立っていたのは織斑先生だ。

でも、俺は構わず、もう一度、問う。

「今、おまえは何て言ったんだ？」

たぶん、怒気を隠しきれていない。

「おい、イーリー。授業だ。座れ」

織斑先生の言葉を無視して叫ぶ。

「テメエは今、何て言ったか、聞いているんだよ！ 馬鹿女！」

「あ、あなたのような無能を生んだ親の顔を見たい、と言ったのですわ！」

「外に出ろ！ 俺のことをいくら悪く言っても構わない！ だけだな！ 俺の親を侮辱するな！」

「おい、イーリー、貴様、今、授業中だというのが聞こえなかったのか？」

「黙っていてください、織斑先生！ 俺は！」

「頭を冷やせ」

織斑先生は俺に向かって拳を放つがそれを俺は避ける。

「これだけは譲れません」

俺は織斑先生の目を真っ直ぐ、見据える。

「……………はあ、どうしても、か？」

「はい」

「分かった。それなら、午後の授業が終わった後、アリーナを使って決闘でもしろ。しかし、今はダメだ。オルコットもそれで良いな？」

「もちろんですわ。その思い上がりを私が叩きのめしてあげますわ」

「そういう訳だ。イーリー、おまえも席につけ。おまえが誰であっても今は私の生徒だ。教師の命令に従え」

「……………分かりました」

「見苦しい所を見せたな」

俺は苦笑気味に一夏に声をかける。

「いや、そんなことないって。リアムにとって、両親って大事な人

達なんだろ？」

「…………… ああ、大事な人達だった」

「え？」

「もう死んだんだ。日本でもニュースになってたんじゃないか？  
ロサンゼルス爆破テロ」

「あ、あの、死者、五百人を出した…………… そうなのか？」

「ああ、俺の両親四人はそこで命を落とした」

「…………… ごめん」

「いや、もう気持ちの整理はついているよ。だけど、やっぱり、親を馬鹿にされると、な」

「…………… そつか。リアムはいいな。そんな誇れる位、立派な親がいて」

「ああ…………… ごめん。一夏も……………」

「いや、俺も気にしてないからさ。さ、飯食いに行こうぜ。箒、いや、篠ノ之も誘っていいか？」

「ああ」

「箒、飯食いに行こうぜ」

良い奴だな、一夏って。

俺も両親のことを言われたら、すぐにキレる癖は直さないと。

でも、どうしても、これだけはな……

はあ。

「だから、私のことは放っておけと言っているではないか、一夏！」  
俺が考え事をしている間に一夏は篠ノ之を連れて来た。

「初めまして篠ノ之さん、俺はリアム・イーリーです」

近くまで来た所で俺は一応、挨拶した。

さっきのセシリア・オルコットとの会話でクラスの人が俺に近寄ってこなくなってしまったかな……一応、一夏とセシリア・オルコット以外の人で初めて話すことになる。

「あ、ああ。私は篠ノ之箒だ」

「何、恥ずかしがってんだよ、箒」

一夏はニヤニヤしながら箒にそう言う。

「な！？ 私は恥ずかしがってなどいない！」

顔を真っ赤にしながらそういう篠ノ之。

もしかして……篠ノ之は一夏のことが好きなのか？ 授業中も何度も一夏のことを見ていたし。一夏はイケメンだから、モテテも不思議じゃないからな。

「はいはい、リアム、お待たせ、食堂に行こうぜ」

「ああ」

一夏は箒の手をがっちりつかんでズカズカと歩きだす。篠ノ之も満更でもなさそうだし。これはやっぱり。

俺は二人のことを微笑ましく思いながら後を追うのだった。

リアム・イーリー。アメリカ力所属のIS操縦者。

本国からはなるべく、この男に近づいて誘惑してでもイギリスに引き込むように言われていますが……正直に言って最悪ですわ。

まず、初対面はIS学園の事務所の前の廊下でしたわ。

それも私にぶつかるなんて、男の分際で。

寛大な私ですから、誠心誠意、謝れば許してあげませんことありませぬのに、あろうことか、リアム・イーリーは軽く謝って、どこかに言ってしまった。

これほどまでに侮辱されたことはありませんでしたわ！

私は寮に荷物を置くとすぐに彼を探しました。

きちんと、私に謝罪させるために。

しかし、事務所は彼の部屋の場所を教えてはくさいませんでした。何でも今はまだ色々と事情があつて話せないそうですわ。私が聞いているというのに！

そして、結局、入学式にも参加していませんでしたので、私は彼を見つけられませんでした。

が、天はやはり、このセシリア・オルコットに味方していたようで、彼は私が所属する一年一組だったのです。

そして、一時間目が終わって彼が一人になった所を見計らって彼に声をかけましたわ。

リアム・イーリー、あなたがどれほどの罪を犯したか、教えてさしあげますわ。

会話も終始、私が制してあげましたわ。

まるで、お母様がお父様に話すように。

ふん、この男もお父様と同じような情けない男ですわね。

そして、類は友を呼ぶという日本の言葉と同じようで、リアム・イーリーと仲良くしていた織村一夏も無能でしたわ。私の前に屈しないなんて。

まあ、上流階級の私の前に恐縮しきっている庶民をいたぶっても楽しくありませんので、私は海よりも深い慈悲で彼らの行いを許してさしあげましたわ。

あ、でも、まだ、言い足りませんわ。

だから、

「あなたのような無能を生んだ親の顔を今度、ぜひ見せていただきたいものですわね」

そう言って差し上げましたわ。

すると、リアム・イーリーの顔つきが変わりましたわ。

突然、

「ああ、何て言った？」

と、今までとは違い低い声で私に言ってきた。

何て失礼な……と思うより先に、彼に恐怖した……まるで、憎悪をそのまま、叩きつけられたような感覚になりましたわ。それでも、私はセシリア・オルコット、あのような情けない男に後れをとることなどできませんわ。

意を決して、言葉を聞こうとした時、織村先生が私達の間<sup>わたくし</sup>に立ってリラム・イーリーと話を始めましたわ。すると、あるうことが入学主席の私<sup>わたくし</sup>に対して決闘を挑もうとしてきましたわ。

何て愚かな。

その思い上がりを放課後、叩き潰してあげますわ。

私の第三世代ESブルー・ティアーズ（蒼い雫）で。



## Episode 07 KNFの決闘

「それで、リアム、大丈夫なのか？ 相手はあんな変な奴でも代表候補なのだろう？」

「箒さん、心配してくれてありがとう、でも、大丈夫です」

「そうだぜ、箒、リアムなら、あの、え      と、金髪を倒してくれるぜ！」

時刻は五時を少し周った頃、俺は一夏と箒さんと一緒に第五アリナを目指していた。

アメリカ政府及び、エターナル・ヴァルキュリアEV社には既に、了解をもらっている。アメリカ政府を通してイギリス政府にも許可をもらったので、もし、セシリア・オルコットをボコボコにしても外交問題に発展することはない。

もし、あの時、織斑先生が止めてくれなければ、間違いなく外交問題に発展していただろう。あの人には借りができてしまった。

まあ、先方、つまり、セシリア・オルコットの発言にも問題があったため、俺が一方的に糾弾されることはないだろうが。もちろん、ボイスレコーダーである時のやりとりは録音させてもらってる。俺がキレた所を除いて。

ちなみに、箒さんとは昼食の時から仲良くなった。

一夏のことを聞いてみたら、案の定、顔を真っ赤にして

「い、い、一夏には内緒にしておいてくれ！」

と、頼まれた。

凜々しい感じな篤さんだったが、その言葉を言っている篤さんは可愛い、と思っただのは内緒だ。

「じゃあ、俺達は観客席の方で見ているから、ああ、頑張れよ」

「ああ」

そう言っ、俺は更衣室に向かう。

と、その前に篤さんに目で頑張れよって合図を送っておいた。

まるで、壊れた人形みたいに顔を真っ赤にしてコクコクと頷いた。かわゆい。

さて、あの時の怒りはもう、収まっているといっても良い。だけど、やはり、父さんと母さん達を侮辱されたのは許せない。イギリスの勘違いお嬢様にお灸を添えてあげようか。

今回、俺はISを展開する。山田先生の時のような圧倒的な戦力差がある訳ではないので、手加減する必要はないだろう。それに、イギリスが開発しているBT兵器というのにも多少、興味がある。

エターナル・ヴァルキュリア

EV社ではムーラ母さんが残してくれたデータがあつたので案外、簡単に完成したんだけど、イギリスの方で開発されたのにも興見がある。ムーラ母さんが開発したのは、初めから追尾性能を持っているので曲がるから。本人の意思で曲げれる方が戦略としては確実に良いので、羨ましいのも事実だ。

俺は自分の右手の中指に嵌めてある黄金の指輪にさわる。

「未来を掴もうオーデイン」

すると、リアムは淡い光に包まれる。

「あら、逃げずにやってきましたの？」

そう言ったのはリアムよりも先に第五アリーナに来ていたセシリア・オルコットだった。

「君に、敗北という言葉をプレゼントしてあげたかったからね」

「あら、それは強者が弱者に言うべき言葉でしょ」

それを聞いてリアムは不敵に笑う。

「もちろん、分かっているさ、世間知らずな、お嬢さん」

「っ！？ よくもぬけぬけと男の分際で！」

怒るセシリア・オルコットに対してリアムは冷静だった。

もし、彼が冷静でなかったならば、セシリア・オルコットに勝機はあったかもしれない。だが、今の彼は万全の状態と言っても差し支えない。リアムの勝率を上げたのは、まさしく、織村千冬、北欧神話に登場する戦乙女であった。それは彼のISの名が『オーデイン』ということに関係するか否かを知る者は誰もいないのだった。

「さて、始めようか」

「ええ」

二人が合意したことによって開始の合図がアリーナに響き渡る。

余談だが、このアリーナには模擬戦を行う二人の他に織村姉弟、箒、山田先生と一組の生徒、そして更識楯無、学園長がいるのだった。

警戒、敵IS操縦者の左目が射撃モードに移行。セーフティのロック解除を確認。

そうオーディンからリアムは報告を受けるがリアムは余裕な表情を崩さない。

警告！ 敵IS射撃体勢に移行。トリガー確認、初弾エネルギー装填。

今度は警告を受けても動じない。

「私<sup>わたくし</sup>には向かったことを後悔なさい！」

その言葉と共に、セシリアはレーザーを放つ。

その先には、まるで、黄金の鎧のようなISをまとったリアムがいた。

だが、厳密には纏っていない。彼のISであるオーディンはリアムの体に一切、密着していない。周りにあるだけだ。

リアムは無言でグングニルを実体化させると、上に飛ぶ。

もちろん、B T兵器は最大活動時、曲がる。しかし、セシリア・オルコットは未だにそれを使いこなせていないため、避けられてしまうとそれで終わりだ。

「……………何だ、曲がらないのか」

「っ！？」

もちろん、リアムはセシリア・オルコットがB T兵器を使いこなせていないことを知っていた、だが、あえて口にすることでセシリア・オルコットを怒らせた。

「思い知らせてあげますわ！」

その言葉と共に、セシリア・オルコットのISであるブルー・テイアーズ（蒼い雫）から四機のビットが展開される。

そして、その内の一機からリアムに向かってレーザーが放たれる、だが、それをリアムは何事もないように避ける。

右、左、上下から、攻撃を受けるが一切、当たらないリアム。

「イギリス代表候補、こんなものか……………シールドビット展開」

リアムがそう言うと、リアムの両腕、両足に展開されていた鎧が外れて、変形し楯のような形になる。

「っ！？ それは、まさか！？」

セシリア・オルコットは動揺する。自国の最高機密であるビット

システムが他国のISが使ったのだから。そして、四機のビットを四機のシールドビットがマークしているので攻撃を放ったとしても、リアムには届かなくなってしまった。

「甘い」

そこで、見てしまったセシリア・オルコットはリアムの凛々しい顔を。そして、次の瞬間、彼は右手に持っていたグングニルが投げられ、セシリアを貫いた。

「ガンド」

そうリアムが言った瞬間、四機のシールドビットから砲門が現れて、セシリアを貫いた。

その猛攻に、セシリア・オルコットのIS、ブルー・ティアーズ（蒼い雫）は呆気なく力尽きるのだった。

「お疲れ、リアム」

俺がピットに戻ると、一夏の他に、箒と山田先生がいた。織村先生はおそらく向側にいるのだろう。

「お疲れ様です。リアム君」

ISの展開を解くとすぐに山田先生が少し赤い顔で俺にタオルを渡してくれた。

「ありがとうございます」

こういう気づかいは、本当にありがたい。

「それにしても、あの女、口だけだったな。リアム」

「いや、一年生の中ではトップクラスの実力だ」

「は？ でも、リアムに簡単に負けてたじゃん」

「俺は…… ISの代表選手と一緒に訓練していたから、強くて当たり前なんだよ」

「代表選手？」

「ISの国家代表、モンド・グロッソに出る人達だよ」

「そんな人達の中でIS動かしてたのかよ！？」

「ああ、俺の存在は世間から隠されたから必然的に国家代表選手と同じ扱いになっただだよ」



ISの国家代表選手ともなると、他国からのスカウトが絶えない。だから、他国からのスカウトをなくすために基本的にISの国家代表選手の所在とかは隠されるからな。国家代表選手と同じ扱いの方が楽だったのだろう。

「まあ……ここより、ひどい環境だったよ。女の人ばかりだったから……ナターシャ姉さんがいなかったら、俺は色々失ってたよ」

「…………人ごととは思えない…………」

俺と一夏は無言で抱き合った。

山田先生がなぜか、手で顔を隠しているけど、指と指の隙間が空いている……………見ているでしょ？

「そうだ、一夏、おまえ寮はどうなったんだ？」

「え？ リアムと一緒にじゃないのか？」

「すまん、俺は色々とあるから一人部屋なんだ」

「な！？ じゃあ、俺はどうなるんだ！？」

「あ、それなら、織斑君は篠ノ之さんと同じ部屋ですよ」

『はあ！？』

一夏と箒さんは同時に声をあげる。

……確かにそれは俺でもどうかと思う。俺達は年頃なんだから。

「でも、他の子達と同じ部屋にする位なら、篠ノ之さんとした方が安心だ、と織斑先生たっての希望でそうになりました」

……確か、織斑先生は以前から箒さんと面識があっただよな？ 箒さんがヘタレだと知っているからか。

「し、しかし……」

口籠る箒さん。

はあ、せつかくのチャンスなんだから、これを使わない手はないだろう。

俺はそつと、箒さんの傍によつて

「チャンスだよ、この機会に一夏を落としちゃえ」

そう小声で呟く。

すると、一瞬で完熟トマトよりも顔を赤くする箒さん。

「そ、そ、そ、そつだな。うむ。一夏、良いぞ。私は」

「本当に良いのか？ 箒」

一夏は………鈍感だな。

さて、と。俺は今日のオーディンの稼働状況をE.V社に報告して  
休むとするか。エターナル・ヴァルキュリア

そして、この後、一夏は篝さんに殺されそうになるらしいんだが  
………何をしたんだ、一夏？

私の名前は篠ノ之箒、私の姉はあの篠ノ之束だ………

正直に言っあねてその事実がとてつもなく辛かった。なぜなら、私の  
姉が天才だったから。

姉は私と親友の織斑千冬、その弟の織斑一夏にしか興味を示さな  
かった。

父と母と私と囲んだ食卓はまさに地獄絵だった。厳格な父はふわ  
ふわした態度の姉をまるで、いないもののように扱い、私にしか話  
しかけてこない。さらに姉も、父と母には一切話しかけずに私にだ

け話しかける。ドラマなんかで見る一家団欒からは程、遠かった。唯一の救いが両親が織村姉弟を良く食卓に招いてくれたことだ。

そして、私が小学生に上がって少しした頃だ。私は一夏に恋をした。

初恋だった。

学校で、道場で、私は一夏と二人でいた。

一夏はどうか分らないが、私は幸せだった。

だけど、そんな幸せも長くは続かなかった。

IS

姉が世界に公表したパワードスーツ。日本政府は私達の安全のため身柄を確保すると言ってきた。幼かった私は一夏と離れたくなかった。だけど、姉のせいで別れざるを得なかった。

最終的に私が一夏の傍にいと一夏に迷惑がかかると言われて妥協した。

ISなどというものを作った姉を呪った。その頃だ。姉が『ちょっとお空に行ってくるよ』とか訳の分からないことを言って蒸発したのは……………

それから、私達、家族は一つの場所に留まる事ができずに各地を転々としていた。

私は友も作らずにひたすら剣に励んだ。今、思えば吐き気がする。あの剣を見て父が悲しそうな目をしていたのを今でも覚えている。

そんな生活を続けていた、ある日、政府の人間が私の進学先をIS学園にしてみても、どうだ？ と聞いてきた。

IS学園……………私の嫌いなISを扱うための学校。

誰がそんなものに……………

しかし、元から私の選択の余地などなかった。ISに頼らないと私は職にもつけない。なぜなら……………私が篠ノ之箒だから……………普通の企業に就職しようものなら……………その企業が……………どうなるかなど分かりきっている。

だから、普通の職には就けない。なら、どうするか？ 剣では生きていけない。

それなら……………残っているのはISだけ。私は決死の覚悟でその話を了承した。

そんな時だった。世界でたった一人だけISを使える男が現れた

のは

織斑一夏

私の初恋の相手。

姉が何かしたのは分かりきっている。

だけど、不謹慎だが……嬉しかった。私のことを唯一、理解してくれた一夏と、また一緒にいられることが。姉の思惑であつたとしても。

そして、いざ入学してみると、一夏と同じクラスになれた。嬉しかった。

一夏に話しかけようかとも思っていたが、一夏が私のことを覚えていてくれないかもしれない、と思うと体が動かない。

そんな時だった。奴が現れたのは……

リアム・イーリー

世界でISを扱えた本当の一人目。彼はいとも簡単に一夏の傍を獲得した。違う……そこにいるべきは……私だ……私は腹をくくことにした。迷っているのは私らしくない。次の休み時間、一夏と話をすると。

すると、どうだろう。一夏は私のことを覚えていてくれた。その上、中学の時に剣道の全国大会に優勝したのを知っていた。私は浮かれていた。

昼食にも一夏は誘ってくれた。

しかし……そこには奴がいた。

リアム・イーリー

こいつ……こいつさえ、いなければ……一夏は私だけを見してくれるのに……

そんな私の感情を知ってか知らずか、リアム・イーリーはにこにこ顔で昼食をとる。

「俺、ちょっと、トイレ行ってくるわ」

そう言って一夏が席を立った時、リアム・イーリーは口を開く。

「篠ノ之さんって一夏のこと、好きだよな」

「い、い、一夏には内緒にしておいてくれ！」

私は飲んでいたお茶を吐きそうになりながらも……………何とかそう返事をする。

まさか……………完全に隠せていると思っていたのに……………リアム・イーリー……………何と侮れない男だ。

「応援するから頑張って」

笑顔で、そう言ってくれた。

胸がどきどきした。その笑顔に。

ええい！ 私は一夏が好きなのだ！ 何を迷っている！

「あ、ああ」

そう無難に返したが、気が気でなかった。

高校になってできた初めての友に私は浮ついていたのかもしれない。

ま、まあ、悪い奴ではなさそうだし、これから仲良くしてやろう。

こんなに楽しいのは何年ぶりだろう。

例え、こんな状況になってしまった原因を探れば間違いなく姉のせいだが、それでも、感謝します。こんな楽しい時間をくれた



束お姉ちゃん

## Episode 07 KNFの決闘（後書き）

女神「まさかの篤ちゃんの心理描写！？」

翼「そうそう、あなたの思い通りにことが運ぶと思うなよ！」

神「あんた………… セッシーどうするのよ？」

翼「このまま、デレ？」

神「………… 単純ね。だけど、私的には早くヒロインを落としたかったから問題ないわね」

翼「次回、ついにセッシーのデレかと思わしといて！ 実は！？」

神「………… まあ、頑張りなさい」

翼「はい！」

## Episode 08 KNF妄想される（前書き）

セシリア・オルコットのキャラ崩壊の恐れあり  
セッシーファンの方はご容赦を……

活動報告の方にも書かせていただきましたが

いつも皆様にお世話になっている翼です。

この度は、感想の返信に関して少し、お知らせなのですが、申し訳ありませんが今後（約一年くらいの間）返信が必要だ、と判断した感想（この判別は私の独断と偏見で行わせていただきます）以外は申し訳ありませんが返信を控えさせていただきます。

主な理由ですが感想を書いてくださるのは、とても、とても嬉しく、執筆する励みになるのですが、現在、私はリアルで多忙な日々を過ごしております。

執筆にとれる時間が少ないのが現状です。

ですので、苦肉の策としてリアルで多忙が続く今後、約一年くらいは、このスタイルでいかせていただきます。

いつも、感想を書き込んでくださっている皆様には大変失礼なことだと承知の上でさせていただきます。

申し訳ありません。

ご理解の程、よろしくお願いします。

最後になりましたが、今後もよろしく願います。

## Episode 08 KNF妄想される

「そ、送信……………」

ふわあああああ!?

どうしよう、どうしよう、送信しちゃったよ。

私は今、ベッドの上で寝転がりながら携帯の画面を見ている。

今、私がメールを送った相手は……………この前、知り合った、リアム・イーリーさん。

昨日まで、アメリカに戻っていたらしいんだけど、今日、帰って来たらしいの。

だから……………明日のお休み、良かったら一緒に何処かに出かけませんか? という内容のメールを送ったんだ。

うう　、やばっり、こっちのデコの方が良かったかな? 子供っぽいって思われないかな?

悩んでいると唐突に携帯電話が鳴り響く。

ビクンって心臓が高鳴るのが分かる……………こんな気持ち、今まで一夏さんにしか、したことがなかったのに……………やっぱり、私……………うんうん、それを確かめるために、明日、誘ったんだ。

おそる、おそるメールを開く。

そこには……………

OKだよ。どこに行く？ 本当はこういう時、男の方が場所とかをセッティングしないといけないんだけど、まだこっちに来て日が浅いから分からないんだ。ごめん、決めてもらっても構わないかな？

これって、これって、OKって書いてあるし……………大丈夫だってことだよな？

「やったあああああああ！」

私はベッドの上で飛び跳ねる。

「ど、どうしたんだ、蘭！」

馬鹿兄<sup>ばかにい</sup>がノックもせずに私の部屋に入ってくる。

せ、せっかく、リアムさんとデ、デートの約束ができたのに！  
こんな奴の顔なんて見たくないっての！

「ノックくらいしろ！ 馬鹿兄<sup>ばかにい</sup>！」

私はそう言いつつ、馬鹿兄<sup>ばかにい</sup>のみぞおちに左ストレートを叩き込む。

「うぐっ!？」

よし、今日も絶好調。

さ、明日のり、リアムさんとのデ、デートのための服を選ばなく  
つちや。

やっぱり、大人な感じのリアムさんには可愛い系の服は似合わない  
よね？

で、でも…………可愛いって言ってもらいたいな…………

「んぐっ!？」

とりあえず、床に寝ころんで遊んでいる馬鹿にいの上に乗って考える  
ことにしよう。

やっぱり、黒で大人のイメージを…………でも、リアムさんって金  
髪だし…………どんな服を着るんだろう…………この前は、ジャケット  
を着てたような…………

ああ、ここは弄られるの分かりきっているけど…………生徒会の面  
子に相談しようかな？

うん、そうしよう。一人で決めてリアムさんにダサイ子って思わ  
れたくないもん。

「ふう」

私は今、先ほどの戦闘のデータを本国に送った後、シャワーを浴びています。

## リアム・イーリー

私に完勝した男……あれは私自信の敗北の他に機体事態の差もあったような気がします。それに本国でも、まだロールアウトできていないシールドビットシステムを使いこなしていました……本国が彼を誘惑してでもイギリスに引き込めと言った意味が分かりましたわ。彼は今いる一年生の中では、いえ、IS学園で最も強いでしょう。もちろん、織村先生を省いての順にですが。

ああ……あの時の、彼の顔……お父様のような弱々しくない顔、凛々しい男の顔。

私が探し求めていた殿方……



強くたくましい方。

分かりますわ……………これは初恋ですわ。

歪んだ理由で彼を好きになっていること位、私も分かつていますわ。

でも、好きになってしまったのです。

ですから、仕方ありませんわ。

恋は自分の意思では、どうにもなりませんわ。

ああ、少し前の私に言<sup>わたくし</sup>ってやりたいですわ。

私にぶつか<sup>わたくし</sup>つて来た無能な男こそ、私の探し求めていた人間であることを。

今、思えば私にぶ<sup>わたくし</sup>つけて来た怒気さえも、凛々しく思えますわ。

ああ、これが恋ですのね。

分かりますわ。

お母様、こんな気持ちになってしまえば、相手がお父様のような弱々しい男でさえも、結婚したくなりますわね。

ああ、彼と会いたいですわ……………

ですが、時刻は十一時を少し過ぎていますわ……………

こんな時間に会いに行けば、礼儀知らずな女だと思われてしましますわ。

いゃん

『そんな礼儀知らずな女には仕置きおししないといけないな』

そう言いつつ、彼は私わたしの始めてを奪うのですわね。獣のように乱暴に。

ああ、どうしよう、お母様、セシリアはセシリアは……………

『おい、どうした？ まさか、仕置きおしされているのに、喜んでいるのか？ この礼儀知らずな女が』

『いゃんっ、待ってくださいまし、や、優しくしてくださいまし』

『初めに言っただろ？ これは仕置きおしきだ！ 優しくしても意味はないだろうが！ そんなことも分からないのか！ この無能』

『ああ、申し訳ありませんわ。ですから、ですから、セシリアを強引にあなたのモノにしてくださいまし』

『はは、良からう！ この獣のようなリアム・イーリーのモノにしてやろう』

『いやあああああ』

「……………ねえ、セシリア、妄想、ダダ漏れだって、後、私もシャワ

「浴びたいから、早く上がって来てよ……シャワー浴びるだけなのに……一時間半はやりすぎだって……いくら年頃の女の子でも、そんなにかからないって……」

知りませんわ！

余談だが、このことが同室の子から、クラスの皆に伝わり、クラスの皆はセシリアのことをリアムの一件の後、避けるどころか可哀そうな子に接するように優しく、本当に優しく接したとか……ある意味、平和な織村学級だった。

さて、昨夜は何やら取り乱してしまいましたが気を取り直してリアム様の所に向かうとしましょう。時刻は休日の朝、十時ジャスト、この時間ならリアムさんも起きているでしょう。

そしてそれから。

「おい、こんな時間から、俺に何の用だ？」

「いえ、先日の模擬戦の件で」

「おい、いつから、おまえは俺にそんな態度をとれるようになった

んだ？ 昨夜の仕置きしおを忘れたとでも言うのか？』

『いえ、ですが……こんな朝、早くから……』

『馬鹿が！ 時間など関係あるか！』

『あ　　れ　　』

「……………セッシー……………これは私でもひくよ……………」

動物の着ぐるみのようなパジャマを来ていた少女は引きつらせた笑みを浮かべていたが、セシリアはそんなこは気にしない。さすがはイギリス代表候補。今すぐ、イギリス国民に土下座してくべきだと、主張したい。

「さて、リアム様のお部屋は」

事前に調査ストーキングしておいたのでリアム様の部屋の場所は完璧ですわ！

私が廊下を曲がり、リアム様のお部屋に行こうとした時、リアム様がお部屋から出てきましたわ。

それも、IS学園の制服ではなく、私服。

ああ、リアム様は白色をメインにしたコーディネートコーディネートをされるのですね。オシヤレですわ。

しかし、どこに行かれるのでしょうか？

ここはクラスメイトとして調査ストーキングしないといけませんわね。

ええ、これは決して私情ではなく、クラスメイトとして彼を心配しているだけでしてよ。

「セツシー……………明日、お菓子あげるね……………」

誰か、いたような気もしますが、リアム様の後を追いませんと。  
目標を見失っては調査ストーキングできませんからね。

わたし私はリアム様の後を追う。

すると、あるうことが、リアム様は駅の方に歩いて行きます。

これは……………おそらく、駅前にあるショッピングモールに行くの  
でしょうね。

もし、お一人で周られるようでしたら……………このセシリア・オル  
コットがお付き合いいたしましょう。

ええ、これは私情ではなく、本国よりリアム様と仲良くするよう  
に言われているからでしてよ！

「ママあ　、あのお姉ちゃん」

「こら、指さしちゃいけません」

な、何ですって!?

駅で待っていたのは、お、女でしたわ!?

わたし私にあれほどのお仕置きをしておいて!? 他の女と会うなんて  
..... ゆ、許せませんわ。

それも見た所..... 歳下ですわね。妙に可愛い服を着て..... リ  
アム様を誘惑したい感じが前面に押し出されていますわ! そんな  
小娘の相手をしていないで、わたし私にお仕置きしてくださいまし!  
わたし私の方が、そんな小娘よりも、あなたに似会いますのに.....

「リ、リアムさん、お、おはようございます」

なんですよ、あの小娘、リアム様のことを名前で呼ぶなんて.....

「おはよう、蘭ちゃん、今日も可愛いね」

「あ、ありがとうございます」

下を向いて顔を赤らめる小娘。

むつきいいいい! まだ私でも、リアム様にあのような言葉かけて  
いただいていませんのに! ああ..... でも、罵倒していただく  
のも.....

「それじゃあ行こうか」

「は、はい」

二人で方を並べて歩き出しましたわ……………何て、何て羨ましい…

……

私も後を追わなければ、と思った所で気づきましたわ。三人の小姐がリアム様をストーキングしていますわ。何てことを、リアム様は私が守りますわ！  
わたくし

「ちょっと、そのあなた達！」

「は、はい」

見た所、日本人のようすわね。

まさか……………極東にはリアム様のような格好の良い人はいませんから……………アメリカから来たリアム様を狙って……………私のブルーテ  
わたくし  
ィアーズの餌食にしてくれますわ。

「あ、会長、行っちゃうよ」

「あ、あの、私達、急いでいますので……………」

「ん？ 会長？ リアム様は会長ではありませんわよ？」

「え？」

「リ、リアムさん、お、おはようございます」

「おはよう、蘭ちゃん、今日も可愛いね」

ひゃあ！？ リアムさんに褒めてもらっちゃったよ。やっぱり、可愛い系の服で良かった。

「あ、ありがとうございます」

「それじゃあ行こうか」

「は、はい」

うう　　、緊張するな……でも、やっぱり、リアムさんって格好良い……今日は白のパーカーに普通のジーンズだけど……何て言うのかな？ 日本人にはない魅力がある。格好良い……

「それで、今日は、服を見るんでいいんだよね？」

「え、あ、はい……申し訳ありません。私の我儘で……」

「大丈夫だよ。今日の予定は何もなかったし」

「そ、そうですね……」



良し！ 会話はできている。

「ん？ あの店なんて、可愛い服置いてない？」

リアムさんが、指差したのは私達（庶民）があんまり、使わない、ブランドモノの店だ。

「あ、た、確かに可愛いんですけど……値段が……」

恥ずかしいけど、言わないと、もっと恥をかくから。

「あ、そっか。蘭ちゃんは中学生だったもんね。ごめんね。お詫びに、何着かプレゼントするよ」

「は、はひ！？ い、いいですよ！？ そんな……」

「良いから、良いから」

笑顔でそう言いながらリアムさんは私の手を引っ張ってお店の中に

「俺は一応、アメリカ代表候補だから給料をもらってるんだ。だから、遠慮せずに」

「で、でも……」

「これは、可愛い女の子の気を引くために男が勝手にやることだから」

か、可愛い！？

それに気を引くためって…………お世辞で言ってくれているのも分かるけど…………嬉しいな。

「これなんて、どうかな」

リアムさんが手にとったのは、この季節にピッタリの水色のワンピースだった。

「あ、可愛い」

私は咄嗟にそう呟いてしまった。

「すみません、この服、試着したいんですけど」

それを聞いたリアムさんはすぐに店員さんと呼ぶ。

「試着室はあちらになっております」

店員さんの案内で私を連れて、試着室まで行くリアムさん。

「可愛い彼女さんですね」

「か、彼女!？」

リアムさんが返事をする前に私が素っ頓狂な声を上げてしまった。

うう　　、恥ずかしい。

「そうですね。彼女は可愛らしいです。ですけど、残念ながら、今は友人なんです」

「あら、それは失礼しました。試着室はこちらです」

「じゃあ、蘭ちゃん。試着してきて」

「は、はい……………」

店員さんが試着室に入る前に『頑張つて、脈はあると思うわよ』なんて言うから心臓がばくばく言つて仕方ない。

私は手早く、ワンピースに着替える……………値札を見たら……………一万二千円だった……………確かに可愛くて欲しいけど……………こんなの買つてもらえないよ……………気にいらなくて言つて違ふのにしてもらおう。

ちょうど、セールで二千位の服がワゴンにあったような気がするから……………それくらいなら……………後で返せばいいし。

私はカーテンを開けてリアムさんにワンピースを見せる。なぜか、店員さんも、まだ傍にいて一緒に見る。

「可愛らしいですね、彼女さん」

「ええ、蘭ちゃんは、元々可愛いですから、何でも似合うと思つてはいたのですが、ここまで似合うなんて……………」

「じゃあ、次はこちらなんていかがでしょうか？」

「あ、それも良いですね。こっちもでうですか？」

「まあ、さすが、リアムさん。センスがいいですね」

……それから、私はリアムさんと店員さんの着せ替え人形のごとく、服を着せられた。

「じゃあ、さつき話してた服ください。あ、まけてくださいね、佐<sup>さ</sup>恵子<sup>えこ</sup>さん」

……いつの間にか、リアムさんは、店員さんのことを名前で呼んでいた……何で？

「あら、彼女さんの前で値切りですか？ 格好悪いですよ、リアムさん」

「少し、予算オーバーでして、お恥ずかしい」

肩をすくめるリアムさん……たぶん、予想通りの値段だけど、交渉するために演技しているみたいだ……私でも分かる。でも、リアムさんがそれをやると、なぜか、値段を安くしてあげよう、みたいな気持なる。

「冗談ですよ。服もこんな可愛らしい子に着てもらった方が嬉しいでしょうし、お安くしておきますよ」

「ありがとうございます」

そう言つて、佐恵子<sup>さえこ</sup>さん？ と一緒にどこかに行つて、お会計を済ませて来るリアムさん。

「あ、あの、服のお金は返しますから！」

貯金なくなっちゃうかもだけど……

「え？ 何を言っているの？ 蘭ちゃん」

「え？」

「これは全部、プレゼント。男がせっかく可愛い女の子の前で格好つけたんだから、最後まで格好つけさせてよ」

満面の笑みで私に笑いかけてくれるリアムさん。

「で、でも……」

「そんなことは気にしないで、ほら、ご飯食べに行こ」

ああ、ダメだ……。ただ、さえも、格好良いリアムさんにこんな風にお姫様みたいに扱ってもらったら……。前から好きだったとか以前に……。好きになっちゃうよ……

ちなみに、お昼もリアムさんがおごってくれた……。いいのかな

……

## Episode 08 KNF妄想される（後書き）

女神「…………私、こちらのセシリアの方が好きよ！ キャラ崩壊と  
か気にしないで良いと思うわ！」

翼「大丈夫ですかね？」

神「私が許すわ！ 誰が文句言ってきたても、私が許すわ。ただし、  
弓弦イズル先生に言われた時だけは自嘲しなさい！」

翼「そうですね！ 勇気が出てきました！」

神「次も頑張りなさい！」

翼「はい！」

## Episode 09 KNFのデート・ファースト

「あ、あの……セシリアさん……そろそろ、やめませんか？」

「何を言っていますの！？最後まで監視しませんと！」

私は<sup>わたくし</sup>リアム様と一緒にいる女の子と同じ学校で同じ生徒会に所属する生徒達だそうですわ。

「で、でも……」

「やるなら、徹底的にですわ！ 帰るなら、貴方達だけでやってくださいまし」

私は彼女達を置いてリアム様を追いかけますわ。

リアム様と小娘が向かった先はイタリアンレストランですわ。

むう、あの小娘、リアム様に椅子をひいてもらっていますわ……  
…羨ましいですわ。

なんて言っているか分かりませんわね……でも、盗聴器などは持っていないせんし……店内ですと見つかる可能性が高いですしね。仕方ありませんわ……ブルーティアーズを部分展開しましょう。

頼みますわ、ブルーティアーズ、<sup>わたくし</sup>私に力を貸してくださいまし！

ISは元々、宇宙での活動を前提としたパワードスーツですわ。  
店内の会話を盗み聞く位、簡単ですわ。

「リ、リアムさん………すみません………本当に服を買ってもらっていいんですか？」

「ああ、気にしないで」

むきい！

まさか、私<sup>わたくし</sup>を差し置いてリアム様からプレゼントをいただいたんですの、あの小娘！ 私<sup>わたくし</sup>だってお仕置き以外にもリアム様から何かいただきたいですわ！

「ご注文はお決まりですか？」

ウエイトレスがリアム様達に聞く。

「おすすめは？」

「本日は海老<sup>えび</sup>を使ったスパゲッティがおすすめになっております」

「じゃあ、それを二つ、後、デザートは？」

「苺のタルトが人気です」

「それも二つ」



「かしこまりました」

注文だけ聞いて帰って行くウエイトレス……何てウエイトレス  
ですの？ リアム様に話をしてもらって、あろうことか何もなかつ  
たかのように戻るなんて……感動を噛みしめてから帰りなさい。

「あ、蘭ちゃん、今の注文で良かったかな？ 大丈夫？ アレルギ  
ーとかは？」

「だ、大丈夫です。私、元気だけがとりえです！」

本当に元気だけがとりえそうですもんね。

「そんなことないよ」

「そ、そうですか？」

「ああ、蘭ちゃんには良い所がいっぱいあるよ。優しい所とか、気  
配りができる所とか」

「あ、ありがとうございます」

顔を真っ赤にしていますわ、あの小娘、やっぱり、あの小娘、リ  
アム様に惚れていますわね。リアム様は渡しませんわよ。

リアム様にお仕置きしていただくのは私わたくしですわ！

「ふう、美味しかったね」

「は、はい」

私とリアムさんは昼食を食べ終わると、色々な店を周りうと思っています。

本当は、ゆっくり周っている間に私はリアムさんに対しての気持ちを考えようと思っていたのですが……正直に言ってリアムさんは一緒にいれば、一緒にいる程、好きになってしまふタイプの人だと分かりました。

まず、本当に絵に描いたような王子様のような振る舞いで、気づかひができて、話しも上手いですし……何より、私がして言うて欲しいことを全てまるで分かっているかのように言うてくれる所が……

「ごめんなさい、一夏さん、私……私……本当に一夏さんよりリアムさんのことを……好きになっちゃったみたいです。」

「蘭ちゃん?。」

「は、はい。何ですか!?!?」

「いや、さつきから呼んでも返事がなかったから」

「あのアクセサリーの店に入ろうか」

「はい！」

あの店は知っている。

私達の学校の生徒も良く利用するお店だ。手頃な値段で可愛いアクセサリーを置いてあるから。

もう、迷いません。

このデートを楽しむことにします。

「あ、このネックレス、リアムさん、可愛くないですか？」

「ん？ あ、本当だ」

私が見つけたのは十字架をモチーフにしたネックレス。どこにもありそうな、無難な奴だけど、こういうのこそ格好の良いリアムさんがつければ、規格外の格好の良さになると思う。

「ちょっと、つけてみてくださいよ」

「つけてもらってもいいかな？ 俺、ネックレスをつけるの、苦手なんだ。いつも結構、時間がかっちゃって」

「いいですよ」

私は、屈んでもらって、リアムさんの首に。

こ、これって、リアムさんの顔が……顔が……近い。

後、ちょっと、後、ちょっと顔を近づければキスできそうな距離

……

どきどき、どきどき、と心臓の音が耳から聞こえてくる。

私はそつとリアムさんの首に手を回してネックレスをつけてあげる。

その時に気づいた……リアムさんは既に何かつけている。

だって、既にチェーンが巻かれていたから……でも、服に隠れてしまっているから……今まで分からなかった。

「リアムさん、リアムさんって、もう、何かつけているんですか？」

「あ、うん。つけているんだ」

そう言っつてリアムさんは服の中からロケットをとりだして見せてくれた。

可愛い。時計の形をしたロケット。

そして、リアムさんはそのロケットの中身を見せてくれた。

そこには五人の人が一緒に写真に写っていた。

金色の髪の人と、その人に似た子供、そして、茶色の髪で目つきがキツイ女の人、銀色の髪をしたたれ目の女の人、男の人と子供よりも明るい金色の髪の女の人。

「これは……………」

「俺の死んだ、父さんと母さん達」

そう、どこか、こことは違う、どこかを見て、そう言うリアムさん。

……………私はなんてデリカシーのないことを聞いてしまったんだ………  
……………いつも、馬鹿兄ばかにいにデリカシーがないって怒るけど……………私も………

「父さんと母さん達は、物凄く早く死んでしまった。だけど、きつと幸せだったと思うんだ。だって、父さんと母さん達は死んでしまっう、その日まで笑顔だったから。そんな父さんと母さん達を見て思っただ。一日、一日を笑って生きれるように生きようって」

……………私はどこか、リアムさんのことを勘違いしていたのかもしれない。

リアムさんは……………リアムさんは私よりも本当に、大人で。

だから、私は……………好きになっちゃったんだ。

ああ、たぶん無意識のうちに、もっと本能的な部分で彼に惹かれていたんだ。

一日、一日を必死に笑顔で生きている彼に。

「ありがとうございます」

「え？」

「私にそんな大切な話をしてくれて」

リアムさんは笑って

「ありがとう、そう言ってくれて」

私とリアムさんは二人で笑いだした。

周りの人には不思議がられても、構わない。

私も今を笑顔で生きて行くことに決めたのだから。

できたら、リアムさんと一緒に生きていきたいな。

だから、頑張ろう、こんなに素敵な人なんだ、IS学園の女の人  
も狙っているよ。

きっと

そうだ、ISの適正審査を受けよう。

確か、政府がやっているから無料ただだったと思うからお爺ちゃんは反対しないだろうし。

それで、来年、IS学園を受けよう。

リアムさんと一緒にいたいから。

「う、う　　っ」

まさか、リアム様にそのような過去があつたなんて……私も両親を失いましたが……お父様のことを貶すばかりで、お父様とお母様が幸せだったかなど、考えませんでしたわ。

本当に彼は私わたくしの理想の人ですわ。

私もわたくし一日、一日、笑顔で生きられるようにしましょう。

きっと、それを今は亡きお母様とお父様も望まれていますわ。

そして、その一日、一日をリアム様と一緒に行きたいですわ。

わたくし 私がリアム様を好きなのは、もちろんのことですが、リアム様に  
わたくし も私のことを好きになっていただきたいですわ。

そして、わたくし 私は亡きお母様とお父様の分まで笑顔で生きましょう。

それが、今は亡きお母様とお父様が望まれていると思うから。

そうと決まれば、わたくし 私はリアム様より、先にIS学園に帰ってリアム様の部屋の前で待たせていただきましょう。

まずは、お互いの事を知ることから始めるべきですわね。

さて、そうと決まれば部屋に帰って下着を変えませんか、もしかしたら、もしかしたらがあるかもしれないしね。



## Episode 09 KNFのデート・ファースト（後書き）

女神「どんどんぱふぱふ」

翼「口で言うの!？」

神「ついに、二人、完全に落としたわね。その調子よ、もっと落しなさい!」

翼「わ、私の言うこと全部無視!？」

神「それにしても蘭ちゃんって可愛いわよね。作者は年上好きだから、あんまりみたいだけど」

翼「な、なんで知ってるの!？」

神「神だから」

翼「……酷」

神「そういう訳だから、次回もがんばりなさい! 分かったわね!

次は山田先生あたりかしら、あの人の攻略状況、微妙な所でしょ?」

翼「確かに……でも、それより、蘭ちゃんがリアムに告白するイベントを書くべきか書かざるべきかで悩んでいるから、そちらを先に考えるよ!」

神「とりあえず、今日はこのあたりで」

翼「失礼します」

「ふう」

IS学園の寮の自室にてパーカーを脱いで洗濯物籠に入れておく。ナターシャ姉さんとの生活で家事が趣味になってしまっている俺としてはできれば自分で洗濯もしたいんだけど、IS学園では業者が一斉にやってくれる。

それで、その業者の経営が上手くいつているのだから、俺があれこれ言うのは筋違いだろう。その利益で生活している人達がいるのだから。

本来なら、ここでナターシャ姉さんに定期連絡を入れるように言われている日なのだが、たぶん、今はどこかへ行くための準備で忙しいだろうから、電話しない方が賢明だろう。

もし、電話しようものなら

『もう、リアム！ 私の下着どこに直したの！？ 全然、見つけれないんだけど！』

オシャレや気配り、ISの操縦にかけても一流としか言えないナターシャ姉さんだけど、家事が一切できない……………目玉焼き、さえ、できないのが良い例えだろう。

本人曰く

『そついうのができなくても構わないって人と結婚するわ』

と、言っているが……そんな優良物件と巡り会えるのだから？

まあ、たぶん、ナターシャ姉さんが結婚することになったら、俺、泣くけど。

『ピーポーン』

不意に俺の部屋のインターフォンが押された。

IS学園の部屋の扉の鍵は部屋にいる時は常にかけておくのが決まりだ。

何でも、前に男を連れ込んだ、うんたらかんたら。

まあ、それは嘘だろうが。だって、そうだろ？ 天下のIS学園の警備がそんなヘナチヨコなら、既にIS学園は無法地帯になっているだろう。だから、もっと、別の理由があるのだろうけど、そこまでは俺も分からない。

と、鍵が空いているにも関わらず、態々、インターフォンを押すのはIS学園の寮で暮らすにあたって暗黙の了解になっている。

俺は軽い気持ちで扉の方に向かう。

俺の部屋に態々、来るのは一部のモノ好きな上級生が一夏くらいだろう。

「どちら様でしょうか？」

そう言いながら扉を開けると、淡い水色のワンピースを着たセシリア・オルコットがそこには立っていた。

……俺は居留守を使わなかったことに後悔した。

何で、セシリア・オルコットが態々、俺の部屋に来るか分からない。

そこから、しばしの沈黙が流れる。

……何も言わないなら帰って欲しいんだけど……俺もさすがに、例え、決闘でかたをつけたと言っても、両親のことを謝罪された訳でもないのに、セシリア・オルコットと仲良くする気はない。

そこまでお人好しじゃない。

もう、扉を閉めようと決意した時だった。

「……申し訳ありませんでした」

セシリア・オルコットは深々と頭を下げた。

IS学園に戻った私は、<sup>わたくし</sup>まず、腕を組んで悩んでいましたわ。

なぜなら……

「リアム様はどんな服が好きなのでしょう？」

さすがの私も調査では、<sup>わたくしストーリーキング</sup>そこまでは分かりませんでしたわ。

何せ、リアム様に関しての個人情報アメリカが開示している情報以外はほとんど、分かっているのが現状ですから。今まで、アメリカでISを動かしていたにも関わらず、<sup>わたくし</sup>私の祖国、イギリスを初め、各国はそれを知ることができなかったのですから、余程、嚴重に情報を隠されていたのでしょうか。

しかし……好きな服の種類くらい、後悔してくださいませ！

そのせいで、今、私は<sup>わたくし</sup>こんなに悩んでいますのよ！

誰かに……相談するにも……チエルシーは本国に一時、帰っていますし……クラスの方々に知られれば間違いなくリアム様のお部屋に一緒に行くと言い出しますわ……

「いや、行かないよ……だって、セシリアと一緒に行ったら、セシリアと同類に見られるかもだもん……それは嫌だもん」

ルームメイトの方が何か言ったような気がしますが無視ですわ。

仕方ありませんわ。

このお気に入りの服で生きましょう。

「すみませんが、私は所要で少々部屋を開けますが後をお願いしますね」

「……………分かった。ごゆっくり……………」

さて、リアム様の部屋まで行きましょう。

『ピーポーン』

インターフォンを押してから気づきましたわ……………私まだ、リアム様と未だに和解していませんわ……………

どうでしょう？

どう話していいのか、分かりませんわ。

「どちら様でしょうか？」

そう言いながら、リアム様は扉を開けてくれますわ。

私の顔を見てリアム様は固まってしまいました……………気まずいですわ。

でも……………このままでは……………暗い女と思われてしまいますわ。

小細工をしても、姑息な女と思われる可能性もありますし……………

ここは……………

「……………申し訳ありませんでした」

誠心誠意、頭を下げましたわ。

私は石のように固まってまゝ、いくらでもリアム様の言葉を待つ  
つもりでしたわ。

どれだけの時間が過ぎたでしょう。おそらく、現実の時間は数分  
も経っていないでしょうが、私の中では、途方もなく長い時間に感  
じますわ。

「顔を上げて」

そう優しく言うてくださいましたわ。

「しかし……………私は貴方の両親を侮辱してしまいましたわ……………あ  
れは許されることではございません……………それにリアム様にも  
大変、失礼なことを申し上げてしまいましたわ……………どんな仕置き  
でも受けるつもりです」

「謝ってくれたなら、それで良いよ」

「そ、それでは、私の気が済みません！」

ぜ、是非、お仕置きを！

「……………それなら、分かった。目を瞑って」

「え？」

「ほら、早く！」

「は、はい」

どきどき、どきどき、自分で言うのも何ですが、どきどきですわ。

ああ、この焦らされるのも、なかなか

「い、痛っ！？」

おでこが痛いですわ……………これって……………

「そ、デコピン」

満面の笑みで私にそう言っ、リアム様……………

はう、その眩しい笑顔は反則ですわ。

「お仕置き、終わり、部屋に入って喋る？」

「は、はい」



き、きつと、部屋に入ってから、もつと、凄いお仕置きが待っているんですね。

『おい、おい、本当にさっきので終わりだと思ったのか？ この礼儀知らずな女』

『そ、そんな………まだ、私を辱めるのですか！？』

『ぐへへ、本当は嬉しいんだろ？ 口ではそう言っているけど、体は正直だぜ』

『い や 』

「どうしたの？ 入って来ないの？」

は、はう、妄想の世界に入ってしまったっていましたわ。

リアム様の部屋は物が、きちんと整理整頓されていて清潔感があるものでしたわ。男の方の部屋はお父様の部屋のようにメイドが掃除しないと汚れていると思っていましたが、違うんですね。リアム様が特別なのかもしれません。

「さ、そこに座って」

リアム様は椅子を指差す。

ま、まさか………あの椅子に特別な仕掛けがあつて………

私はお仕置きされてしまうのですわね

いやですわ

私<sup>わたくし</sup>はお仕置きされることなど、望んでいませんわよ

「セシリア、紅茶に何か入れる？」

「あ、ミルクとお砂糖を少々、お願いしますわ」

「了解」

台所に立つリアムさん……………ありがとうございますわ……………

「はい、どうぞ」

男の人は紅茶も満足に入れられないと思っていましたが、リアム様はきちんと、入れられるのですわね……………

私<sup>わたくし</sup>と対面する形で椅子に座るリアム様、緊張しますわ。

そして、リアム様は座ってすぐに

「オルコットさん、雰囲気変わった？」

そんなことを言ってくれます。

「え？　そ、そうですか？」

「うん、変わったよ。なんて言うのかな？　……………そう、柔らかくなっ

「そうですか？ 自分では分からないものですわね」

わたくし  
私は変わったのでしょうか？

「前は何て言うのかな？ ぎすぎす？ した雰囲気纏って男の俺を馬鹿にしたような感じがしていたけど、今は、うん、そんな感じが無いから」

やはり、もし、わたくし私が変わったのなら、その原因は……… Liam 様ですわね。

Liam 様に変えていただいた私。わたくし

うふふ。何でしょうね。嬉しいですわ。

好きな男の人に変えられてしまった自分。

そんな自分を好きになってしまいそうですわ。Liam 様と繋がりを  
持てているようで。

「Liam 様」

「何？」

「少し聞いて欲しい話があるのです。本当なら、このような話し  
出会って間もない Liam 様に聞かせるべき話ではないのですが……  
……聞いていただきたいのです」

「聞くよ」

リアム様は、一切、迷うことなく私の<sup>わたくし</sup>目を見据えて、そう言ってくれます。

リアム様の優しさが直接、私の<sup>わたくし</sup>心を触れられているようで、リアム様の言葉を聞くだけで、リアム様の部屋に来て良かったと思えますわ。

それから私は<sup>わたくし</sup>話しましたわ。

お母様とお父様の話を。

死んでしまったことまで包み隠さずに。

そんな私の<sup>わたくし</sup>言葉をリアム様は何も言わずに聞いていてくれましたわ。

何か仰ってくださいまし……………

「オルコットさん」

リアム様は唐突に立たれる。

それにつられて私も立つてしまいますわ。

それから、リアム様は近づいて来て。

「良く、頑張ったね」

私<sup>わたくし</sup>を優しく抱きしめてくださいました。

私の中でリアム様の言葉が反復される。

良く、頑張ったね

一人ぼっちになった私<sup>わたくし</sup>を励ますように

良く、頑張ったね

家族のように親身になってくれている

良く、頑張ったね

私<sup>わたくし</sup>の今までの苦労をねぎらってくれる

良く、頑張ったね

リアム様の優しさが伝わってくる

「リアム様」

「何？」

「私は、まだ、リアム様と知り合って間もないですし、リアム様は優しいお方ですが、未だに私に良い印象をお持ちでないのは分かっておりますわ」

「……………」

それに何も返事をしないリアム様。まるで、私の答えを待っていないように。

「それを承知でお願いいたしますわ。まだ、恋人になってくださいとは言いません。私自身も、まだリアム様の優しさに応えられる程、成長しておりません。ですが、どうか」

お傍においてくださいまし

「喜んで」

リアム様の笑顔は何度見ても、心地よかったですね。

Episode 10 KNF セシリア・オルコット（後書き）

女神「つ、ついに一人……完全なハーレム要員ね」

翼「ここまで、長かった……十話もかかった……」

神「まあ、リアム達の紹介的なお話があったから仕方ないわよ」

翼「……そうかな……」

神「まあ、それはともかく、順当にいったら次は蘭ちゃん？」

翼「ふふ、それは内緒だ！」

神「翼が強気だ！？」

翼「とりあえず、ここまで、お付き合いくださってありがとございしました。これにstage 01 完結です。次回からはstage 02 になります。では！」

神「……いつもと立場が逆だわ……次からはまた主導権をとり返すわ！」



## Episode 01 KNF、悩まされる

それまで、多少、騒がしかったはずの教室の中が急に静かになる。  
そして彼女の叫び声が木霊する。

「決闘ですわ!」

荒れ狂うセシリアの声…………と…………

「上等だ!」

…………それに激昂する一夏…………だ。

ちょうど、休み時間が終わり教室に入って来た織斑先生が壇上で  
頭を抱えている。

山田先生は涙目でおろおろしている。

そして、クラスメイト達は好奇の目で二人を見ている。

俺はどちらの味方をしていいか分からずに、頭を抱えている。

なぜ、こうなった?

「あ、あのリアム様……………」

現在の時刻は七時、そんな時間からセシリアは俺の部屋に来ていた。

あの後、つまり、セシリアが俺の部屋を訪れた後、俺達は恋人未満、友達以上の関係になった。別に俺は鈍感ではないので正直に言えば、紅茶を飲んでいる最中に気づいていた。

もし、仮にセシリアが『付き合ってください』と言っていれば、俺は断るつもりだった。自分で言うのも何だけど、いくら俺がお人好しでも散々、今まで罵倒されていた相手と付き合えない。確かにセシリアは性格を除けば、かなりの可愛い。だけど、両親を見て育った俺にとっては『愛』のない、付き合いなどできるはずがなかったから。

でも、セシリアは俺の傍にいたい、と言った。

それを拒む理由もない、だから、俺とセシリアは恋人未満、友達以上の関係になった。

その後、少し世間話しをした後、セシリアは自分の部屋に帰って行った。

それから俺はセシリアが来るまでにしていた『亡国企業』の動きが書かれた報告書を読んでいた。アメリカは既にISを一機、『亡国企業』に奪われているので『亡国企業』の動きに敏感だ。でも、

まあ、一時でもCIAや軍を欺いてISを奪った組織だけのことはある、報告書に、ほとんど、実がない。

その後、俺はナターシャ姉さんにメールをいれてから寝た。

そして、今にいたるんだけど……

「何？ セシリア」

「あ、あのですね」

「うん」

「朝食に一緒に行きませんか？」

「いいよ」

俺の言葉を聞いたセシリアは顔をにはあと輝かせて手を胸の前で組んで嬉しそうに俺の腕に抱きつく。

「では、行きましょう！」

「ちょっと待って。少し、用意してくるから」

いくら何でも、こんな時間に誘いに来てくれるとは思っていなかったのだ、さすがにパジャマではないけれど、何も用意していない。

IS学園の授業開始時刻は八時四十分、普通の学校と変わらない

時間だろう。ただし、他校と一番違うのはIS学園の敷地内に寮がある。寮から校舎まで徒歩で十分程度で、ついてしまう。

そのため、七時半に起きて三十分で用意して、二十分で朝食を食べて登校しても、十分前に着くことができる。

だから、女の子は朝、身支度があるので無理だけど、俺と一夏と  
いった男は七時現在に起きていることはあっても、用意が完璧なはずがない。

まあ、朝からワックスなどで髪を一時間位かけてセットするような奴なら、ある程度、用意できているだろうが、生憎、俺は長い髪をとかしてくくって終わりなので、用意できていない。

俺は手早く髪をとかして、くくると、すぐに鏡でおかしい所がないか確認してからセシリアの所に戻る。

「お待たせ」

「いえ、では、今度こそ参りましょう、リアム様」

鼻歌を歌いだしそうな程、ご機嫌のセシリアと一緒に食堂に向かう。

……………毒を吐かなくなった、セシリア……………普通に可愛い……………

「ところで、セシリア」

「はい、何でしょうか、リアム様」

「何でリアム『様』なんだ？」

「そんなこと決まっていますわ」

セシリアは今日、一番の笑顔で

「わたくし私の王子様だからですわ」

そう言ってくれる。

やばい、顔が赤くなるのが分かる。

俺は不自然だと分かりつつもセシリアとは反対の方向を向く。

「ふふ、私を少しは意識してくださっているようで、嬉しいですね。わたくしこの調子で、リアム様に好きと言っていただけの日まで頑張りますわ」

……父さん、あなたが三人の母さんから、『愛していますよ、あなた』と言われた時に顔をだらしなくさせていた理由が分かります……確かに嬉しいです。

その後、何事もなく、食堂に着いた俺とセシリアはお互い、好きな朝食を購入して合流した。

まだ、数回しか利用していない寮の食堂だけど、どのメニューも安い割に物凄く、美味しい。全メニューを制覇した訳じゃないけど、見ている限り美味しそうにしか見えない。さすがは日本政府が巨額な資金を費やしているだけはある、と言える。

ちなみに、俺の今朝のメニューは鮭定食だ。

鮭の塩焼きと味噌汁、卵焼き、お漬物、炊きたてのご飯で百五十円のメニュー。もちろん、ご飯のおかわりは自由。転生前の知識しかないで、分からないが、どれだけ、モーニングセットが安く設定しているとは、いえ、このIS学園の食堂の値段に勝てる定食店は存在しないだろう。日本の物価がおかしくなっていない限り。

「リアム様、あの四人用の席が空いていますわ」

「あそこにしようか」

「はい」

セシリアが持っている、朝食はミルクとサラダ、二つのクロワッサンだけだ。女の人が小食なのは知っているが……それで、昼間で持つのか本当に疑問だ。ナターシャ姉さんは

『リアム、私は食べたいだけ食べるけど、きちんと運動もしているから太らないのよ!』

と言っていた。

ああ、そういえば、昨日、俺はセシリア・オルコットのことをセシリアと呼ぶことにした。

「リアム様は日本食なのですわね」

「あ、うん。せっかく日本に来たんだから日本独自の食べ物を食べたいじゃないか」

「はい、そうですね」

それから二人共、何も喋らないで黙々と朝食をとる。

おそらくセシリアの母親はテーブルマナーのうるさい人だったのだろう。俺の母さんの一人であるアリス母さんも、物凄く、そういうのに厳しかったんだけどな……ナターシャ姉さん曰く

『「飯は楽しく食べないと損!」』

ということ、喋りながら食べていた。今、考えると保護者として、どうなのだろう? ナターシャ姉さん……

「おはよう、リアム……」

沈黙が続く、俺達の朝食の席に一夏がやって来た。

その、何だ……まだ、知り合ってから数日……正確には、三日だけど……痩せたな。箒さん……何をやっているんだ?

「私は変なことはしていない一夏が軟弱なんだ！」

後ろから篝さんが、まるで、鉄砲玉のように飛んで来た。

何で、俺が考えたことが分かるのだろうか？ ご飯を噛みながら考えているから一人ことを言っている可能性はないのに……さすがは篠ノ之束の妹……読心術くらい会得しているのか……

「むう……リウム……貴様、何か私を馬鹿にするようなことを考えていないか？」

「いえ、そんなことはありませんよ。篝さん」

「……そうか……」

全然、納得していません、という顔をしている篝さんだけど、ここは無視するのが一番だろう。

「って、何で金髪がここにいるんだよ？」

一夏がセシリアを見て驚いている。

あ、篝さんもか。

「あら、私がリウム『様』の傍にいましたら、変でしょうか？  
織斑さん？」

「い、いや……変ではないんだけど……」

一夏が俺を見る。何か助けを求めるみたいに。



まあ、仕方ないか。後で話すとアイコンタクトを送ると、納得するよつに、セシリアの隣に座る。

「まあ、織斑さん。私とリアム『様』との楽しい食事を邪魔なさいますの?」

「はあ? おまえら、何も話してなかったじゃないか? 何が楽しいんだ?」

「まあ!? 少しはリアム『様』のように落ち着いてくださいまし、食事では最低限の言葉しか話さないのは世界共通のマナーですよ?」

「うつ、世界は世界、日本は日本!」

「…………一夏…………それは、まるで説得力がないぞ。後、世界の日本人に謝れ。」

「日本人ではなく、あなたが野蛮なだけですよすわね。織斑さん」

「確かに、今のは他の日本人に失礼だぞ、一夏」

「ほ、箒まで…………リアムう…………」

「はあ、今回は一夏が悪いが、確かに親しい人と喋りながら食事をするのも楽しいのも事実だよ。俺も姉さんと良く喋りながら食べたから」

「…………親しい人…………そうすわね! リアム様! 喋りながら、

食べるのは楽しいですわね！」

「おい！」

一夏がセシリアに何か言おうとした時だった。

「こら、ガキ共！　いつまで、ちんたらと食事をとっている、つもりだ！　早く準備をしろ！　始業時間に遅れた者には反省文とグラウンド五周をプレゼントするぞ！」

白いジャージを着た織斑先生が食堂にやって来た。

織斑先生がいきなり、食堂に来たことに驚いて一夏は言葉を言うのをやめて、織斑先生の方を見る。

「何で、千冬姉が！？」  
ちふゆねえ

一夏の言葉を聞いた織斑先生はこちらに、すぐにやって来て

「織斑先生だ、馬鹿もの！」

……織斑先生の拳は痛そうだ、とだけ言っておこう。

「……分かったよ、織斑先生……」

「分かりました、だ。馬鹿もの」

……一夏……二発目は、くらうなよ……

「おまえ達も遅刻するなよ……まあ、食事が終わってないのは織

斑だけ、だから大丈夫か」

「え？」

そう俺とセシリアはほぼ、食べ終わっていたので織斑先生が来た時点で、急いで残っていた朝食をたிரげた。そして、箒さんも、凄い早さで朝食を食べた……………

そう、必然的にこのテーブルで朝食をとっていないのは、一夏だけだ。

「さて、遅刻しないように、行くとするか」

「はい」

セシリアは笑顔で俺の後について来てくれる。

そして、箒さんは

「早くしろよ、一夏」

一夏を見捨てることにしてみたいだ。

「リアムう　　っ」

一時間目の授業が終わった休み時間。セシリアと談笑していた俺

の所に一夏がやって来た。

「どうしたんだ？ 一夏」

「おまえ、授業の内容分かる？」

「ああ、まだ、基礎のところだし」

まあ、科学者だったムーラ母さんに色々と工学系の知識はかなりあるから、応用になったとしても大丈夫だと思うけど。それ以前にナターシャ姉さんと一緒にいた時に、つまり、代表候補の予備軍になった時にナターシャ姉さんにISの基礎は叩き込まれた。

「……………授業についていけないんだ」

「はあ？」

驚いているのは俺だけではなく、セシリアも、だ。

セシリアも代表候補だから、この時点で分からないということはないのだろう。いや、このIS学園に入る人間はそれなりに勤勉な人間か才能がある人間しか入れないので、必然的に、この時点で分からない人はいないだろう……………特例を除いて。

「織斑さん、あなた、入学前にもらった、教本をお読みになられませんでしたの？」

「教本？」

「ええ。この位の厚さの本ですよ」

セシリアが手で大きさを表現する。

ああ、そんな本あったな……確か、新聞の回収にだした記憶がある。

「…………古い電話帳と間違えて捨てた本だ……………」

「まあ！？ あなた、馬鹿ですか？ 天下のIS学園から支給された教本を捨てるだなんて」

…………この状況で俺も捨てた何て言えない。

「仕方ないだろ！ 捨てちまったんだから！ それに、朝からリアムの傍にいて、小言言いやがって、俺はリアムに相談しているんであって、おまえに相談しているんじゃないんだよ！ 金髪！」

「何ですって！？ 朝は、リアム様の前でしたから、我慢しましたが、二回も私のことを金髪ですって！？」

「だって、金髪だろうが！」

「むきい！ 何て失礼な男！ 何でしょう！」

「そっちこそ、何てしつこいんだ！」

「決闘ですわ！」

「上等だ！」

その話を聞いていた織斑先生は寝不足そうな顔をして

「……………おまえ達の間では、決闘が流行っているのか？」

と、俺に聞いてきた後にアリーナの使用許可書を書いてくれたとか……………何か、ごめんなさい。

そして、なぜか、これがクラス代表決定戦ともなったのだが、セシリア、アメリカ代表である俺がいる状況でイギリス代表のセシリアがクラス代表になるのは問題だろう？

クラスの盛り上がりを見て、言い出せない俺だった。

## Episode 01 KNF、悩まされる（後書き）

女神「この頃、感想にリアムがKNFを使っていないって感想で言われているでしょ？ 何で連発しないの？ この物語のうりはKNFじゃないの？」

翼「……………実は……………『今』は少し、抑えています。シャル編あたりから、異常な程、KNFのお世話になるので……………」

神「ふうん、私は連発させてもいいと思うけど？」

翼「俺の意向なの（涙）シャル編あたりから、ありえない程使うから……………」

神「泣かなくてもいいじゃない……………まあ、ネタバレになるから言わないけど一応、理由があるのよね」

翼「うん……………（大泣き）」

神「（はあ、このバカの相手するの疲れるわ……………）」

では、これからもIS - unconscious - をよろしく願います」

## Episode 2 KNF、教える

「はあ」

本来なら、学生の楽しみであるはずなのだが、今日、ばかりはそうではない。

なぜなら。

「織斑さん、あなた向こうに行ったらどうかしら？」

「嫌だね。俺はリアムと飯が食いたいんだ」

「私もリアム様と食事がしたいのですわ<sup>わたくし</sup>」

「な、俺が先にリアムと一緒にいたんだろ！？」

「ですが、私<sup>わたくし</sup>の方が先にリアム様に声をかけましたわ！」

『むう！』

……………なぜに、仲良くできないんだろう……………それに何気に、二人共、息があっているけど。

ちなみに、この場には箒さんもいるのだけど、箒さんは黙々と和



食定食を食べ続けている。おそらく、二人の仲なんてどうでもいいのだろう。

「そういえば、一夏、どうするんだ？」

「何が？」

「勉強だよ。全然、ついていけないんだろう？ でも、一週間後にセシリアと決闘するならISを動かす練習もしないといけないだろう？」

「……………気合で……………」

下を向いて落ち込んだ様子で、そう言う一夏に対して非情にもセシリアが

「なりませんわね」

切り捨てる。みると、篝さんも、うんうんと頷いている。

まあ、気合でどうにかなるなら、誰も学校に勉強しに来ないか。

「何だと！」

セシリアに対して怒る一夏……………この二人、本当に犬猿の仲だな……………

「ほら、怒らない。怒らない。セシリアの言っていることも事実だから」

「…………はい」

「ふんですわ」

「はい、そこで、セシリアも勝ったような顔をしない。そんなんだから、喧嘩になるんだよ？」

「…………分かりましたわ」

「まあ、決闘の話はおいておくとして、俺達は今、一年生だからな。たぶん、今から申請しても学園が保有する量産型のISは貸してもらえないだろう」

「え！？ そうなのか？」

驚く一夏。

「ああ。普通、卒業間近の三年生に優先的に貸し出されるからな。それも成績順に」

「何だよ。それ、平等じゃないのかよ？」

心の底から本当に疑問に思ったのだろう。首まで傾げる一夏。

そんな一夏に対してセシリアは

「当たり前ですわ。ISの数は決まっているのですわよ、三年生になった段階で進路は二つに分かれると言っても過言ではございません。一つは代表候補、あるいは代表、及び、どこかの国家または企業のテストパイロットになること。もう一つは普通に進学あるいは

就職する。後者の場合は研究、開発関係にいかない限り、ISと関わる機会は絶たれることになりますが」

「はあ？ それじゃあ、何で、IS学園には、こんなに人がいるんだよ？」

「簡単ですわ」

セシリアの言葉を引き継ぐ形で俺は言葉を紡ぐ。

「そのわずか一握りになりたいからだよ。代表選手になれば、正直、レベルが違うからだよ」

「何の？」

「待遇だ」

「はあ？」

俺は昔、調べた日本の情報を一夏に話す。

「日本の代表選手になった場合、まず、特典として税金が全て免除される。消費税については別だけど。さらに、国からの給金は政治家並み。公共交通機関、航空機、宿泊施設を使った料金も全て無料<sup>ただ</sup>あるいは半額などの特典が得られるんだ。それでも、一部だけ、細かいの特典を言っただけなら足りない」

「何だよ……………それ……………いくら、今が女尊男非な世界だからって……………」

「リアム様が仰った理由でだいたいあっていますわ。代表選手になれるのは数世代で数人。ですが、それでも代表選手になれる可能性がある限り皆、私達<sup>わたくし</sup>は、夢を目指すのですわ。周りも様々な特典があるために後押ししてくれますし。ある人は名誉のため、ある人はお金のため、理由は様々ですが」

「一夏、まだ、これはISがもたらしたIS操縦者における、利点のみだ。汚点は正直、ここ说不出的程、酷い。それもIS操縦者なら覚えておかないといけない。特に俺と一夏はIS以外の道が絶たれていると言っても過言ではないから」

俺の言葉を聞いてセシリアも暗い顔をする。代表候補生だから、ある程度、知っているのだろう。

俺と一夏の立場について。

「まあ、話しはそれだが一夏の勉強の話しただけ、勉強と決闘両方をとるなら、学校が終わってから数時間は体を鍛えて、それから、十二時くらいまで座学を俺が教えるよ」

「お、おう！ でも、何で体を鍛えるんだよ？ ISに乗るんだったら……」

「初心者が陥りやすいミスなんだけど、それは間違っているんだ。そもそも、ISはパワースーツ、つまり、強化する訳だから、元が良いに越したことがないんだ。代表選手クラスになると、皆、武術や何か特殊な方法で体を鍛えているよ」

「そ、そうなのか……」

それ、故に……また暗い話が生まれてきてしまっただけだな。  
今は話す必要はないか。

「それで、体を鍛える方法なんだけど……」

「それは私が受けもとう」

それまで静観していた箒さんが会話に入ってきた。見れば、いつの間にか一人だけ食事を終えている。

「一夏、おまえ、私と別れてから剣から離れていただろう？ 体の作りが変わってしまっているぞ」

「わ、分かる………か？」

「ああ。私が一週間で、体を戻すとはいかないが、心構えだけは叩き直してやろう」

自信満々な箒さん。

それなら………俺は

「それじゃあ、一夏のセコンドが箒さんなら、セシリアのセコンドは俺だな」

「はあ！？ 何でそうなるんだ！？」

テーブルに手をついて、立ち上がる一夏。

「そっちの方が面白いだろ？ 篤さん、それでいいか？」

「ああ、勝てないにしても善戦できるまでにはしてやるっ」

自信満々の篤さん。一夏のことを信賴しているのだろう。

「リ、リ、リアム様！」

今までにないほど、高い声を出すセシリア。

「ん？ どうしたの？ セシリア」

「ほ、ほ、ほ、本当に………よ、よろしいのですか!？」

何これ、可愛い。

「ああ。だから、一夏が篤さんに、剣の指導を受けている間、セシリアは俺とISの訓練をしてあげる」

「はい！ ありがとうございます！」

「そうと決まれば、今から本国に連絡をとって許可をもらっよ」

「私も今すぐ、連絡してきますわ！」  
わたくし

そう言っただけ残ったご飯を、すぐに食べ終えて電話するべく、どこかに飛んでいく勢いで走って行った。

もちろん、俺もEV社に許可をもらうために、席を立つ。

「じゃあ、一夏、夕食の後に、一夏の部屋に行くから」

「ああ、頼むよ……それで……」

「ん？」

「セシリアの情報を……」

「決闘は公平にやらないといけないな」

「うっ」

引きつった笑みを浮かべる一夏。

「だから、少しだけだぞ」

「いいのか!？」

「相手は代表候補、一夏は素人。当然だろ？」

「ああ!」

「夜の勉強の後にでも教えてやるよ」

「頼んだぞ!」

「はあ、はあ、はあ」

「どうした？ もう終わりか？」

「ま、まだですわ！」

黄金のシールド・ビットを四機携えた、生身のリアムに対して、セシリアは四機のブルーティアーズと全ての装備を装着した状態で対峙していた。

しかし、装備とは裏腹に形勢は明らかにリアムが優勢だった。

セシリアはスターライトmkⅠⅠⅠつまり、ブルーティアーズの主力兵器である特殊レイザーライフルの銃身をリアムに向けて、そして、引き金を引く。スターライトmkⅠⅠⅠから放たれたレイザーは一直線にリアムへ向かうがあっさりとシールド・ビットによって防がれる。

「まだですわ！」

セシリアの掛け声と共に、リアムの背後に配置していたブルーティアーズからレイザーが放たれる。

しかし、それも、リアムの操作するシールド・ビットに弾かれる。



戦闘行為を始めてからリアムは同じ位置から、まったく動いていない。その時間、三十五分。

その上、リアムは一度もシールドバリアーを発動させていない。つまり、全てシールド・ビットでセシリアの攻撃を全て防ぎきっている。

「ここですわ!」

セシリアのブルーティアーズの数とシールド・ビットの数は互角、スターライトmkIIIをいれると、セシリアの武装の方が多い。

ということは……

五方向からの一斉射撃がリアムを襲う。

しかし

「ガンド」

シールド・ビットから砲門を出し、セシリアのブルーティアーズと同じレーザーを放つ。そして、セシリアの放ったレーザーに当てて軌道を変え、さらに、一機のシールド・ビットを自分の前に移動させて、防ぐ。

「そんな……レーザーにレーザーを当てるなんて……」

「代表生なら、できるはずだよ」

「くっ、ブルーティアーズ!」

セシリアはブルーティアーズに様々な動きをさせてリアムを攪乱し、さらに自分もランダムに移動してリアムの気を逸らそうとする。しかし、数で勝っているのに当てられないのに、少し攪乱した程度で当てれるはずもなく、時間はどんどん、経っていく。

そして

「アリーナの使用終了時間だ。ここまでにしよう」

「はあ、はあ、はあ、分かりましたわ。ありがとうございました……」

アリーナを借りられた時間は四十分。一年生でありながら、これは破格のことである。

後がない三年生を差し置いて借りられたのはリアムがアメリカの最終兵器と影で呼ばれていることと、第三世代のデータを少しでもとりたいたいイギリスの圧力がかったためだろう。

「リアム様はどうして……そこまでビットを操れるのですか？」

ビットに戻りながら、セシリアはリアムに聞く。当たり前前の疑問を。

そもそも、ビットシステムがイギリスで開発されたのは最近なのだ。

この技術を持っていると公表していなかったアメリカがそれより

も早く開発していたとは考えにくい。

だが、ここまで高度な技術をリアムが持っているとなると認めざるを得ない。

イギリスよりも早い段階でアメリカはビットシステムを開発していたか、あるいはリアムが天才であるかを。

「初めから、ある程度、上手かったのは事実だけど。練習したのは確かだよ」

「失礼ですが、何時間程？」

「百時間くらい」

「ひゃ、百時間!？」

それは代表候補からすれば、破格の時間だった。

なぜなら、セシリアがISを動かした総時間は二百時間弱。ブルーティアーズの操作の訓練はせいぜい、二十数時間だ。

しかし、それは別におかしいことではない。いや、むしろ、多い方だ。

IS学園に入る前の彼女はあくまで代表候補の候補だ。専用機を持っている訳はないし。ISの数は限られているため、例え、適正ランクAであっても、優先的に使わせてもらえるはずはない。

なぜなら、代表生候補の候補よりも代表候補にISを与えた方が

色々都合が良いからだ。

唯一の特殊ケースがあるとするれば、リアムや一夏、さらに適正ランクSの人間だけだろう。

適正ランクS。それは世界で未だに数人しか確認されていない。

しかし、適正ランクSの人間がISの専用機に乗った場合、今までのケースから推測するに、必ず、ISは二次移行している。ISの核がブラックボックスであるがために、理由は不明だが。

ちなみに適正ランクSの人間の代表例が織斑千冬であることは言うまでもない。

「まあ、それだけ動かしっていてセシリアから攻撃を受けたら、俺にはよっぽど、才能がないってことだよ。これから、毎日、ビットの動かし方を体に叩きこんであげるから、覚悟しててね」

「か、か、体に叩き込む……………いやですわ　リアム様ったら」

「ん？」

突然、顔を真っ赤にして、リアムとは別の方向を向いたセシリアに対してリアムが首を傾げたの言うまでもない出来事だった。

セシリアが、自分がお仕置きされるという妄想から帰って来たのは実に……………二十分後のことなのだが、リアムは律儀にそれを待っていたのだった。



### Episode 03 KNF、不幸に思う

簡潔に今の状況を言おう。

セシリアが一夏を蹂躪している。

もちろん、変な意味ではなく、ISでの戦闘での話だが……

向こうのピットには、織斑先生、山田先生、箒さんがいるのだけど、おそらく皆、啞然としているだろう。

そもそも、事の発端は先ほどまで遡る。

ISでの決闘をするに関して、俺は一週間、セシリアにブルーティアーズの操作というよりもピットの動かし方をひたすら体に教え込んだ。セシリアに元々、才能があったためか、みるみる内に、ピットの動かし方は俺と決闘した時とは比べ物にならないレベルにまでなった。

もしかしたら、一時間くらい、初日のように俺は防ぎっぱなしなら、一撃くらいはいれられるかもしれないレベルだ。

一夏にピットの弱点や攻略方を教えたんだが……明らかにセシリアのレベルはそんなものでは、解決できないレベルになってしまったので、できる限り、分からないように手加減してあげて、とセシリアに頼んでいたのだけど……

俺が若干、教師陣に怒ってしまい、セシリアに手加減する必要はない、と言ってしまったのだ。

……セシリアも俺が言うから手加減したくないが、仕方ないといった感じで承だったので滅茶苦茶、喜んでいた。

一夏には悪いことをしてしまった。

なぜ、俺が若干怒ってしまったかというと、理由は簡単、一年一組の担当である織斑先生、山田先生の両名が向こうのピットに行ってしまったからだ。

例え、一夏の専用機である『白式』が今日、届いたとしても、他の先生を呼んでも、片方はこちらに来るべきだろう。

セシリアだって一年一組の生徒なのだから。

どれだけ、一夏は特別扱いなんだ？

俺がそのことに文句を言いに行くと織斑先生、山田先生、両名とも、少し、うるたえていた。

……そこまで考えていなかったのか？

まあ、そういう訳で、セシリアが蔑ろにされてしまったことに怒って許可を出してしまったことに俺は少し後悔していた。

……一夏に非はなかったんだから。

『くっそ、せっかくリアムに教えてもらった避け方も、相手がこんなに早いんじゃないよ』

『あら、それはあなた自身が弱いからではなくて？ リアム様があなたに間違ったことをお教えになったように言わないでくださいま

すか？ 不愉快ですの』

ISの通信機能によって喋っている一夏とセシリアの声がこちらのピットにも聞こえてくる……………

……………現在、試合開始から五分経過。

セシリアのエネルギー残量 九割

一夏のエネルギー残量 一割

状況を確認した、その時だった。一夏の『白式』が光を放つ。

一次移行……………まさか、一夏の奴……………最適化もしていない状態で戦っていたのか？

いや、この場合、それをさせた織斑先生、山田先生に問題があるのか……………

それにあれは……………織斑先生が現役時代に使っていた武装……………確か、名前は雪片<sup>ゆきひろ</sup>……………そうか、あれは篠ノ之博士の作成した専用機か……………それなら、本来、セシリアのブルーティアーズでは勝てない……………はずなんだけど、後は操縦者の問題か……………



たぶん、篠ノ之博士は一夏が自分の身を守るための『剣』を与えたつもりなんだろうが……一夏の操縦技術では、むしろ、悪手か……誰かが、ISの訓練をつけてやらないと最悪『白式』を奪われた上に殺されるぞ……いや、拉致されて実験動物か……

仕方ない。俺が……いや、きっと篤さんが教えてくれるだろうから、そのサポートだな。

そして、一夏が雪片ゆきひらを使おうとすると、一夏のISのエネルギーが切れた。

……織斑先生、いや、姉のISの能力を知らなかったんだな……  
……一夏。

「リアム様！ 勝ちましたわ！」

満面の笑みでリアムの待つピットに戻るセシリア。

もし、仮にこちら側のピットにいたのが他の誰かなら、セシリアは『当然ですわ！ 私わたくしはイギリスの代表候補生ですから』と自信満

々に言うのだろうが、待っていてくれる相手がリアムであるため、そのような意地ははらない。

「よく頑張ったね」

そんなセシリアをリアムも笑顔で迎える。

内心では

（一夏……大丈夫かな？ いじけてないかな？）

と心配しているのだけど、そこは女の扱いを母親（とても厳しい）より叩き込まれているリアム、顔には一切出していない。

セシリアはすぐに、ブルーティアーズの展開を解除するとリアムに抱きつく。

「うふふ、勝ったのですから、これくらいは許してくださいまし」

「ああ、いいよ」

少し顔を赤くしつつもリアムも一応、セシリアを受け止める。

おそらく、これは日本人にはできないだろう、過激なスキンシップを行うことのあるアメリカとイギリスだからできたのだろう。もちろん、そういうことが苦手な人間もいるが、リアムとセシリアは割と寛容だった。

「そ、それですね……」

「何？」

セシリアは顔を真つ赤にさせてリアムの胸に自分の顔を埋めながらリアムに話しかける。

「か、勝った、ご、ご、ご褒美に……………デ、デートしてくださいましっ」

盛大に顔を真つ赤にさせる。もはや、今のセシリアの顔は完熟したトマトと勝負できるレベルだろう。

「ん？ そんなことでいいの？ 別に良いよ」

セシリアは、これを言うために昨晚、ルームメイトに向かって予行演習していたのだが、まさか自分でも、ここまで上手くいくとは思っていなかったため、一瞬、啞然としてしまう。

ちなみに、その時の内容を音声のみ録音していたとしたら……………以下のようになる。

『セシリア……………これ、何？』

『私<sup>わたくし</sup>を助けると思ってお願ひしますっ！ 今度、本国で行う劇の台本なのですわ！』

『……………分かった……………それで私は、どうすればいいの？』

『ありがとございますわ。この男役の方をお願いしますわ！』

『…………分かった…………』

『では、行きますわよ！』

『…………うん…………』

『リアム様っ！ 私はリアム様に言われた通り、織斑さんに、手加減して勝ちましたわ』

『はっ、俺の言いつけを守れたようだな、この雌は』

『いゃん！ リアム様…………なぜ、私を叩くのですか！？』

『はあ！？ 貴様、俺に飼われている雌であるにも関わらず、手加減していても、一分以内に勝つのは当たり前だろ？ それができなかったなら、仕置き、だ。今日はいつもの倍だ』

『そ、そんな…………で、でしたら…………お仕置きは受けますから…………で、ですから…………勝った、ご褒美に今度デートしてくださいましっ』

『ふんっ、飼われている雌の分際で何てことを言いやがるん。身の程を知れ！』

『で、でも…………』

『しかし…………そうだな…………たまには外で仕置きをするのも一興か。喜べ、雌。今度は外で仕置きをしてやる。そのついでにデートもしてやるよ』

『ほ、本当ですか！？ リアム様！』

『ああ』

『完璧ですわ！ これで明日はいけますわ！』

『……せめて、台本の名前は変えておこつよ……セシリア……  
……後……これ、絶対イギリスで公演できないでしょ……それに、  
そもそも、リアム君ってこんなキャラじゃないよね……』

もちろん、セシリアはルームメイトに自分がリアムに恋をしていることは隠しておせていると思っている。

色々な意味で本当にお嬢様なセシリアだった。

今すぐ、関係各所に謝りに行くべきだろう、イギリス代表候補生、セシリア・オルコット。

「日程の方は今度の土曜日でいいよね？」

「ええ、お願いしますわ」

「それで、行く所は決まってる？」

「いえ、特に何も決めていませんが」

「分かった。それなら、俺が決めるから、セシリアは楽しみにしてて」

「はいっ  
」

自分で自分のハードルをあげるリアムにセシリアは満面の笑みで返事をする。

ちなみに、今はまだ、授業中だというのに、抱き合って次の休みの時のデートの話しをする二人を監視カメラで見ていた警備の人はあきれるところか、鼻息を荒くして見ていたとか。

その話を聞いて、また、頭が痛くなる織斑先生だった。

もちろん、今回の件はセシリアのピットに担当の教員が誰も行かなかったことの詫びとして見逃された。

あの仕事に関して真面目な織斑先生を知っている者なら驚くだろうが、真面目な分、ミスに対する埋め合わせは、きちんとする、人だったのだ、織斑先生は。

後にウサギ耳をつけた、ある科学者は

『ちーちゃんは昔から自分を叱ってくれる人には甘いから、きっとMだね』

もちろん、その後、千冬のアイアンクロ　がさく裂したのは言うまでもない。

### Episode 03 KNF、不幸に思う（後書き）

翼「つまらん、原作ちゃんと読め、アンケートするのもどうなの？  
とか言われてしまっている翼です……………」

女神「……………あんた、元気なの？」

翼「うん！　だって人気ない作品には、つまらない、とかいう感想も書き込んでもらえないんだよ。人気が出てきた証拠だよ　それに、人の意見は千差万別、このお話を気に入ってくれている人の意見しか真に受けない！　占いで悪いことを言われても無視、良いことを言われた場合のみ信じる！　そんな性格です作者は！　もちろん、伏線をきちんとはった方が良いとか、ここの表現があいまいだったから、もっと具体的にとかのアドバイスの悪いこと？　は、もちろん、きちんと受け止めますが、つまらんとかそういう言葉に對してのみ」

神「……………ある意味、ポジティブね……………」

翼「アンケートは現在、数を数えています。参加してくださった皆様、ありがとうございます。アンケートが終了いたしましたので、ユーザー以外の方の書き込みはできない仕様に戻しました。ご了承ください」

神「アンケートに参加してくださった、たくさんの方々、本当にありがとうございます。たくさんの方々に参加していただけて本当に嬉しかったです」

翼「原作ちゃんと読み直した方が良いとか言われていますが、小説情報のキーワードにも書いてあります、作者の独自解釈を、勝手にこれからも貫いていきます。ご了承ください」

神「これからもIS - unconscious - をよろしく願います」

翼「では、失礼します」

## Episode 4 KNFのデート・セカンド

「一年一組の代表は織斑一夏君になりました」

「はあっ!？」

一夏の素っ頓狂な声をあげて驚く。

まあ、それはそうだろう。代表を決める決闘でボロ負けしたにも関わらず、自分が代表になっているのだから。

「な、何で、俺が代表になっているんですか!？ 山田先生!」

最後の理性が残っているのか、敬語で教壇の上にいる山田先生に問いかける一夏。

「それは、私が事態わたくししたからですわ! 織斑さん!」

後方の席から、セシリアの声が挑発的な声が教室内に響く……………  
何で……………そんなに喧嘩けんか越しなんだよ……………

相変わらず、俺以外の男に対しては偉そうな態度をとるセシリア。  
この学園内では一夏が該当する訳だけど。まあ、きっと後で喧嘩するだろう。

「何で負けた俺が代表なんだよ!」

「それは高度な政治的判断ですわ!」



偉そうにそう言うセシリア。

まあ、セシリアにそう言ったのは俺なんだけど。俺とセシリアとの決闘のデータは俺達の国にそれぞれ送られており両国共、知っていることになる。勝敗に関しても。

これで、クラス代表を決める際に戦って勝った方がなるということになると、アメリカも黙っていらなくなる。なぜ、セシリアより強い俺が代表ではなく、セシリアが代表なのか？ と。

もちろん、俺はそんなことで一々、文句を言うつもりはないが色々と政治の世界では問題があるため、あの後、俺がセシリアにそのあたりの話をする、すぐに理解してくれた。そもそも、ISの発展は国防に直接関係してくる訳だから、どの国も稼働データは喉から手が出るほど欲しいのは当然だ。

それに本来なら、代表候補を同じクラスにするなど、ありえない。普通に考えて代表候補は国の顔と言っても良い。そんな代表候補を同じクラスにして片方をクラスの代表にしてしまえば、最悪、その国の外交が悪化する可能性もある。わざわざ火種を作る必要はない。

そして、代表候補生は代表候補としてIS学園に来た時点でクラスの代表にならないといけない。クラスの代表になればISでの戦闘が増える。必然的にデータがとれる回数が増えるのだから。

クラスの代表になれないような器なら代表候補を下ろされるだろう。国で保有しているISの数には限りがあるのだから、クラスの代表にもなれないような者に専用機を持たせる意味がない。ここに来た理由をはき違えている者が馬鹿以外は代表候補まで上り詰める者は分かるはず。だから、本来なら代表候補がクラス代表に立候補

しないなんてあるはずがない。今回の俺とセシリアは特異ケースということになるんだ。

おそらく、俺とセシリアと一夏を一緒にクラスにした時点で、アメリカ、イギリス、日本の高官の間で一夏を代表にするというように決められていたはずだ。そうじゃなかった場合、更識簪と同じようにセシリアを違うクラスに配置するはずだ。IS学園のクラスは他にもあるから。

IS学園の勝手な仕業という可能性は限りなく零に近い、アメリカとイギリスの関係を態々、悪化させる理由がIS学園にはないのだから。先進国の中でも特に軍事力を保有している両国を刺激すれば最悪、ISを使った戦争が起こる可能性さえある。それは競技目的でISの使用を推進するIS学園にとってはむしろデメリットばかり目立つ。

俺とセシリアと一夏を同じクラスにするメリットがほとんどない中、イギリスがセシリアを俺達と同じクラスにした理由は……  
…セシリアを俺が一夏に近づかせるためだろう。

そういう訳で既に前々からクラス代表は一夏で決まっていたんだ。もちろん、エンターナル・ヴァルキュリアEV社にも確認を事前にとっている。

「政治って……………」

一夏は、もっと違う理由で代表になっていると思っていたのだろう、政治という言葉聞いて少々、たじろいでいる。

まあ、そう言われたら、何も言えないな。例え、一夏でも。

「そういう事だ。諦めろ、織斑」

織斑先生のその言葉で肩をおとす一夏。

まあ、一夏にとつても実戦経験を積めると思えば悪い話じゃないんだけどな。

それにしても、織斑先生…………どこか嬉しそうだ。…………前々から思ってたけど、この人、若干、ブラコンだな…………俺もシスコンばいから言えないけど…………

「さて、皆も知つての通り、二週間後にはクラス代表戦がある訳だが、代表にならなかつた者も、気をぬくなよ。クラス代表戦の後には個人によるバルトーナメントなのだからな」

『はい』

クラスの女子の声が重なる。

バルトーナメントには外部からのスカウトも来る。そこで目立てば一年のこの時期からでもスカウトされることも、ある訳だから皆、気合をいれるのだろう。

そういう俺も第二世代の訓練機に負けるようでは代表選手として周りに示しがつからないから負ける訳にはいかないのだけど。

横を見ると、一夏が俺に何か助けを求めるように見つめて来るが

…………

「一夏、諦めろ、織斑先生とセシリアの言う通りだ。政治的な問題

になるから、一夏になるしかない」

「……………分かった」

余程、クラス代表になるのが嫌なのか……………でも、他の代表候補  
がいないクラスは全員、手をあげるほど、人気の役職なんだけどな  
……………

だって、そうだろ？

三年しか猶予がないというのに、訓練機と自分に注目してもらえ  
る機会は限られているんだ。少しでも、そのチャンスを掴もうとす  
るのは当たり前だ。

まあ、一年一組は例外中の例外だけど。

クラス代表が決まったことで、一限目のISの授業に入るのだっ  
た。

一夏が、また頭をかかえた……………俺が教えてあげている夜の勉強  
では、未だにIS学園に入る前に覚えておくべき基礎の部分が終わ  
っていないからな、一夏……………色々これから頑張れ……………

「さて、と。出るか」

今日は、学園が休みの土曜日。本来なら、色々とやることがあるのだけど、今日はそういうことを全てキャンセルした。

エターナル・ヴァルキュリア

EV社から、読んでおくように、と言われている書類が溜まっているんだけど……

今日だけは忘れることにする。

今日は、一夏とセシリアが決闘した日にセシリアと約束したデー  
トの日だから。仕事のことが頭にある男と何て誰もデートしても面  
白くないだろう？ だから、一時的にでも、忘れる。最悪……怒  
られることにしよう。

さて、俺は私服に着替えると駅へと向かう。同じIS学園の寮に  
住んでいるのだから駅まで一緒に行けばいいと思うのだけど、女の  
子には女の子にしか分からない何かがあるらしく、駅で待ち合わせ  
することになった。

「あ、リームーだ。やつほ　　っ」

俺が部屋を出た所で動物の着ぐるみのようなパジャマを着た布仏  
本音さんに出会った。彼女は通称、のほほんさんと呼ばれている。  
この子は本当にのほほとしているからな……

「おはよう」

「おはよ　、どつか出かけるの？」

「ああ、ちよつと駅の方まで」

「そうなんだ　　っ」

こんな風におちよけているけど、彼女は生徒会書記……あの更識楯無の部下だ。何でも、更識家に代々仕える使用人の一族らしいけど、本当かは定かではない。何せ、影武者やら、偽情報などが錯綜している世界なんだ。目に見える情報を全て信じていたら、いつか、どこかで痛い目にあう。

まあ、アリス母さんの受けとりだけど。

「私も一緒に行っている　？　リームー」

「ごめん、今日は二人でデートをする約束なんだ」

「む　、それなら仕方ない。そうそう、お嬢さ　　じゃなかった、会長が今度、一緒にお昼でも食べようって言うてたよ　　っ」

「分かった。それはぜひって言うておいて」

「分かったよ　。お嬢様も喜ぶよあ　　っ」

最終的にお嬢様って呼ぶんだな、のほぼさん。まあ、俺は構わないけど。

それに俺も一度、更識楯無とは話をしたいと思っていたんだ。まあ、向こうがIS学園に来た日に接触しなければ、会うつもりはなかったけれど面識ができてしまったからには、もう接触しないよりも接触した方が良くに決まっている。少なくとも俺は、そう思う。

なぜなら、あちらには会長という立場に、のほほんさんという情報源があるのに俺にはなにもないのだから。それなら、こちらも、あちらと接点を持って、あちらの情報を少しでも集めるべきだから……のほほんさんがどこまで俺のことを更識楯無に報告できているのかは疑問だけど。

「それじゃあ、俺は行くよ。またね。のほほんさん」

「またね　　、リームー」

うふふ、今日はリアム様とデートですわ

昨日の間にチェルシーに春の新作のワンピースを送ってもらいましたわ。これにお気に入りの星の形をしたネックレスをつけて今日は完璧ですわ。

ブルーティアーズと同じ蒼いワンピース。リアム様はこれを着た私わたくしを褒めてくださるでしょうか……

あの歳下の小娘には……可愛い、と言っていました……私のことも可愛いと言ってくださるでしょうか？

あん

想像しただけでも、胸の奥が暖かくなりますわ。リアム様……

ふと、時計を見てみます。リアム様との約束した時間は十時。

現在の時刻は九時。

予定よりも一時間も早いですわ。

ですが、私は既に駅前にいますわ。わたくし

だって、楽しみなんですもの

この気持ちは恋をしている女の子にしか分かりませんわ。

鏡をとりだして、髪をチェックをしませんと、もし、どこか、変な所があればリアム様に会えませんか。

それにしても、なかなか、良い街ですわね。リアム様が以前、『日本も良い国だよ』と仰られていた意味が分かりますわ。イギリスにはない魅力がありますわ。



「あれ？ セシリア。もう来てたの？」

「あ、リアム様！？」

わたくし  
私は急いで右手に持っていた鏡を隠します。リアム様に見られるのは恥ずかしいですね。

「こういう時は男が待つべきだと思って早く来たつもりだったんだけど、ごめんね。セシリア、待った？」

「いえ、わたくし私も今、来たところですね。それに、まだ約束の時間の一時間前ですわ。遅刻にはなりませんわ」

「ありがとうございます、行こうか？」

「はい」

わたくし  
私はリアム様の腕に抱きつきます。

「セ、セシリア！？」

「リアム様でも、驚くことがあるのですね」

「そ、そりゃね……………」

顔が赤くなるリアム様。やはりチエルシーの言った通りですね。どんなに女の子に馴れている男性でも咄嗟の行動には弱いもののですね。

それにしても、チエルシーはどこで恋愛に対する知識を手に入れ

てくるのでしょうか？

チエルシーが経験……ありませんわね。いつも、私の傍わたくしにいてくれていましたし……学校で……分かりませんわね……今度、聞くことにしましょう。

「それで、一応、ここでショッピングしようと思うんだけど、構わない？」

「はい」

実は以前、ここで小娘とリアム様がデートしているのを見て、私もこのショッピングモールでデートしてみたかったなんて恥ずかしくて言えませんわ。

「それじゃあ、適当に……」

「あ、リアム様、あのお店に入ってみたいですわ」

「え？」

私が指差したお店は男性用の服の専門店ですわ。

「俺の買い物はいいよ」

やはり、リアム様に物欲はありませんわね。ここ最近、リアム様と一緒にいて分かりましたわ。

それに、私が選わたくしんだ服をリアム様に着ていただく……嬉しいですわ。あの小娘に勝っているみたいで。

「いえ、私はリアム様の服を選んでみたいのです……………ダメでしょうか？」

こつこつ時は上目ずかいでしたわね。後、胸を押しつけるようにする。

は、恥ずかしいですわ……………でも、これをすれば、大抵の男の人は言う事を聞いてくれるとチエルシーは言っていましたし……………

「……………分かったよ」

「ありがとうございます」

腕を組んだまま、お店に入って行く私とリアム様。

さつきから、胸を押しつけたままです。

今更ですが……………リアム様は大きくても大丈夫でしょうか？ 世の中には大きい胸の人は嫌い、という方がいるとチエルシーが昨日言っていましたわ。そういう方だった場合、私はリアム様を諦めなければならぬ、とチエルシーは言っていましたわ……………でも諦めきれませんわ。

だって、初恋ですもの。

「リアム様、リアム様は今日も白色を基調とした服装ですが、白が好きなのですか？」

「いや、特に好きじゃないけど、今日はたまたま白だったただけだよ。でも、セシリアと私服で会うのは初めてじゃなかった？」

「そ、そうですね。言葉のあやですわ。気にしないでくださいませ！」

「う、うん」

危なかったですわ。リアム様にリアム様を調査<sup>ストーキング</sup>していることがばれる所でしたわ。

「では、こちらの黒色のジャケットなど、いかがでしょうか？」

<sup>わたくし</sup>私は一番始めに目に入ったジャケットを手にとってリアム様に見せます。

なかなか、良い生地を使っていますわね。

「あ、いいね」

「はい     では、これは候補としてキープしておきましょう。では、次は」

リアム様には今日、色々な種類の服を着ていただきましたわ。

できれば、写真も撮らせていただきたいと思いますわ。

觀賞用に。

## Episode 05 KNF、ツンデレと遭遇す

「ここがIS学園ね」

今、あたしは世界で唯一、ISの操縦技術を学べる高校に来ていた。

日本に来るのも、一年ぶりだ。たった一年、それなのに以前来た時とは遥かに変わってしまっているような気がする。

今、思えばお父さんとお母さんの仲が悪くなって離婚した後に、お母さんに進められてISの適正試験を受けた時から、あたしの世界は変わった。

ISの適性ランクA。これは代表候補並みの数値らしい。初めはお金のためと割りきっていた。軍人になった気持ちだった。だから、政府の人にIS学園に入学するように言われた時も断った。

別にIS学園に入学して日本に行っても訓練ばかりであいつに会えないと思ったから。

それなら、まだ、軍の施設にいた方がお母さんやお父さんと顔を合わせる機会がないから楽だと思った。

だけど、一カ月程前に世界に広まったニュースを見て私は考えを

変えた。

世界に男でISを動かせる人間が現れたという報道。

二人いるらしいけど、一人はどうでも良い。

もう一人が問題だった。

彼の名前は織斑一夏。

あたしが小学生の時、中国人ということで虐められていた時に助けてくれた少年。

たぶん、あたしはあいつに恋をしていたんだと思う。

あたしの人生を変えたのはIS

あたしを、また好きな人に会わせてくれたのは父でも母で

もなくIS

やるせない。

あたしは思う、ISは色々な人の人生を変えている。いや、断言できる。

良い意味でも悪い意味でも。

そう言う、あたしも変えられてしまった一人。

そんなことを思いつつも私はIS学園の事務所を探す。

「もう、全然、見つからないじゃないの！」

話しに聞いていたけど、何て馬鹿デカイ学園なの。

ISで空から探そうか…………

「そうだ。そうしよう！」

「何をするんですか？」

あたしは驚いて後ろを向く。

「っ!？」



そこには長い金色の髪を結んでいる『男』が立っていた。

ああ、資料で見たことがある、アメリカにいたISを使える男だ。

こいつについて、調べるように国から言われているけど、そう言うのって、あたしの柄じゃないのよね。

それよりも、一応、色々な訓練を受けた、あたしが一切、気づかないなんて……

「どうかしましたか？」

「あ、ごめん。事務所を探しているんだけど」

まあ、使えるモノは使うわ。

「案内しようか？」

「いいの？」

「問題ないよ。俺はリアム・イーリー。よろしく」

………知っているわよ、とは言えないわよね。

「あたしは鳳鈴音よ」  
ファインイン

「鳳さんは転入生？ 珍しいね。こんな時期に」

「ええ、ちよっと国の事情で入学するのが遅れたのよ」

本当は、あたしが拒否していたんだけど、そんなことは言わないと分からないことだから、言わなくても構わないでしょう？

「そうなんだ」

それから、そいつは、あたしの半歩前をスタスタ歩いて行く。少し前を歩いてくれるおかげで、どちらに行くべきか彼を見ていれば分かる……こいつ、女の扱いに馴れてるわ……一夏もこいつくらい、女の子の扱いが上手ければ……

だ、だめ！

一夏がもし女の扱いが上手くなった場合、ライバルがぞっとするほど増える……

そんなことになった場合、いくら幼馴染とは、いえ……

って何で、あたしが弱気になっているのよ！

「ん？ 鳳さん、どうかした？」

あたしの僅かな変化を見逃さずに、話しかけて来る、リアム・イリー……やるわね。

「な、何でもないわよ。それより、まだ着かないの？」

「IS学園は広いからね」

そこで、ふと、あたしは思った。同じ男なら一夏のことを知って

いるんじゃないか？　ということを。

疑問に思ったことは素直に聞いてみるのが、あたしの流儀だ。

「あんたと同じ男でISが使える」

「一夏のこと？」

「知ってるの!？」

思わず、会ったばかりのリアム・イーリーに飛びつく勢いで迫ってしまった。

「っ!？」

「あ、ごめん……………」

さすがに、あたしの突然の行動に驚いたのか、リアム・イーリーは身構えてしまう。

その反応はあたしを指導してくれた教官と同等だと思う。こいつ、侮れないわね。

「いや、俺こそ、驚いて、ごめんね」

「……………それで、一夏のことなんだけど」

そこで、リアム・イーリーは少し気まずそうな顔をする。

「ごめん、着いちゃったんだけど……………」

「え？」

いつの間にか、あたしは事務所の前に来ていた……………ダメね、考え事をする……………周りが見えなくなっちゃう……………

「いいわ。事務所の方で詳しい話を聞くから」

「それなら、失礼するよ」

そう言つて、リアム・イーリーは、どこかへ消える。

さて、あたしは、あんな奴のことよりも一夏のことを聞かないと。

時間は、未だに朝日が眩しい時間、そんな中から金色の髪をポニーテイルにして結んでいる少年はモニター通信で、年上の女性と深刻そうな顔をしながら、話をしていた。

『……………若様、申し訳ありません。午前の授業を休ませてしまいまして……………』

その女性の名前はレーナ・アंकシャス。彼女は基本的にリアムの私生活を第一と考えるため授業を休ませてまで話しをしようという機会は滅多にない。

今回はそれ程の案件ということだ。

「謝らないでください。リーナさんは俺のことをいつも第一に考えてくれています。今回も俺のためにこうして忙しい中、リーナさん、自ら話してくれているのでしょうか？　リーナさんには感謝してもしきれません」

その言葉を聞いたリーナはモニターの向こうで目をつるつるさせる。

『そ、そんな若様、私などにそんなもつたいたい……』

それから、リーナは『私など、まだまだ』『若様のためならば火の中、水の中、どこまでもお供します』などとひとしきり言った後

再び、真面目な顔に戻りリーナは一度、コーヒーに口をつけて話を始める。

『……実はイギリスで開発中だった第三世代ISサイレント・ゼフィルスが亡国機業に略奪されました』

「なっ!？」

驚くリアム。

確かに、アメリカもISを一機、亡国機業に奪われている。だが、アメリカが奪われたのはあくまで第二世代IS、既に世間に公表され実用化されている。

第二世代が奪われたのと、第三世代が奪われたことでは話しは変わってくる。なぜなら、第三世代ISは現在、ISを開発している、どの国にとっても国家機密中の国家機密。トップシークレットだ。

開発している場所でさえ、一部の科学者と代表候補にしか知らされていない。政府の高官でさえも知らない場合もある。

各国は、それほどまでしてでも、第三世代の技術を隠している。

確かにイギリスはヨーロッパの中では最も早くIS学園に第三世代を送りこんだ。しかし、それでもブルーティーズを開発した場所、及び実験施設は公開されていない。

エターナル・ヴァルキュリア

『未だに、EV社でもイギリスの第三世代ISサイレント・ゼフィールの情報は詳しく分かっておりませんでした……唯一、分かっていたのはシールドビット搭載機ということだけです』

エターナル・ヴァルキュリア

『亡国機業は……EV社の諜報部よりも優れた諜報組織を持っている……』

『おそらく……』

「……そういえば、何でサイレント・ゼフィールスが亡国機業に奪われたって分かったんですか？」

『……事前に送り込んでいた諜報員が蒼い機体が空を飛んで行く

のを見て、不審に思い、その飛び立った場所に行ってみるとISの研究所があり、研究員達が研究所の外に出て嘆いていたらしいんです。この情報が得られたのは正直に言ってラッキーだったと言います。」

「その情報がブラフの可能性は？」

「おそらく、ありません。いくら自国の空とはいえ、各国に無断で広範囲をISで飛んだとなると事が露見した時に様々な問題が生じます。それが既に完成された第二世代なら問題ありませんが、第三世代だった場合、それをネタにしてイギリスに技術提供を呼びかける国が出る可能性もありますから。特にフランスのデュノア社などは第三世代の開発に失敗しているので、ここぞとばかりに仕掛けるでしょう。明らかにメリットよりもデメリットの方が大きいはず」

「……………分かりました。これで、分かっているだけで五機のISが亡国機業に奪われたんですね」

「はい。このまま、ISが奪われ続けた場合……………最悪、亡国機業が世界に対して戦争を起こす可能性さえあります」

「……………ただのテロ組織が世界に戦争をしかける……………普通なら笑ってしまう漫画のような話ですが……………」

「ISが二桁、奪われた場合、ありえますからね……………」

モニターの前でまるで、悪夢を見ているかのような絶望的な顔をするリアム。それは遠く離れたアメリカの地にいるリーナも同じだった。

ISが二桁奪われる。世界にはISは四六七機あるのだから問題ない、と思えるかもしれないが、それは間違っている。

一機でもISを所有していない国を相手に戦える可能性を持っている、それがISだ。

もし仮に一齐にISを所有していない各国でISによるテロが起こった場合、被害は予測できない。

そして、被害を受けた国はISを所有してくる国に間違いなくISを要求するだろう。そうならば、数に限りがあるISの奪い合いになる。

そうならばISを所有している国は迂闊にISを動かせなくなり亡国機業の対策を軽んじてしまう。

なぜなら、亡国機業とISを所有していない国、その両方からISを守らなければいけないのだから。

そして、何より、ISは四六七機あると言っても、その全てが実戦用にされている訳ではない。

第三世代の実験機とISの訓練機がその良い例だ。

確かにセシリアのブルーティアーズはBT兵器の装備は積んでいるが実弾兵器は一切積んでいない。正確にはミサイルを積んでいるには積んでいるが、実戦で実弾兵器しか効果を期待できないISと



の戦闘を余儀なくされた時、どれほど、力を発揮できるかは言わなくとも分かる。ブルーティアーズはいわゆる欠陥機と言って良い。

そんな欠陥機と完全に戦争用の装備を持ったISが戦えば、操縦者に圧倒的な力の差がない限り、勝負は明らかだ。

それに二桁もISがあれば、訓練用のISの宝庫であるIS学園を襲える。

そうなれば、IS学園にある多くの訓練機が奪われることになる。

いくら、IS学園に代表候補生達がいたとしても彼らはあくまで代表候補なのだから。代表並みの実力を持った人間が代表候補と同じ数、IS学園に在住していれば話は別かもしれないが。

IS学園には織斑千冬がいるから、と安易に考える者もいるかもしれないが、彼女とて人間、織斑一夏を人質に取られた場合、本来の力は発揮できずに終わるだろう。

いや、厳密に言えば生徒を人質にとられた場合、彼女は何人の生徒を犠牲にすることができのだろうか？ 彼女も教育者、生徒の命を軽んじることなどできないのだから。

そんな彼女の攻略はいくらでも、できる。彼女がもし、どれだけ人間を犠牲にしても訓練機を守る、と教育者にあるまじき行為に走ったなら話は別だが。

「……………分かりました。それとなくIS学園の警備を強化するよう

に織斑先生に話してみます」

『お願いします。私達の方からIS学園に申告できるのですが……  
…そうなった場合、理由を言わなければなりませんので………』

そうならば、イギリスに『アメリカがなぜ、サイレント・ゼフィ  
ルスが奪われたと知っている？ もしやアメリカが亡国企業を手引  
きしたのでは？』と、いらない波紋を呼びかねない。

それを避けるため、リーナはリアムに頼んだのだ。

企業が言った場合と一、個人が言った場合とでは警戒レベルの上  
げ方も違うが、そのことによる波紋もそれに比例して少ないのだか  
ら。

今は警戒レベルを最大限まで上げるよりも、警戒レベルを上げて  
亡国機業を牽制することが重要なことから。

『次の案件は                   』

その後もリーナとリアムのモニター越しの会談は、四限目終了の  
チャイムが鳴る十分程前まで続くのだった。

## Episode 05 KNF、ツンデレと遭遇す（後書き）

翼「前回もそうでしたが、今回も独自解釈が、かなり入っています」  
神「……………確かに、亡国機業に現在、何機ISが奪われてるか、なんて、原作では明かされてないもんね。原作では分かっているだけで三機だし」

翼「おそらく、これから、こんな風にして独自解釈が結構入ってきます。KNFは次回くらいに発動しますのでお楽しみに」  
神「では、失礼します」

## Episode 06 KNF、恐怖する

昼休みを知らせる鐘が鳴ってから、俺は一年一組の教室の中に入る。

残りわずか五分だったので、入ると逆に邪魔してしまいそうだったからだ。

入る時に織斑先生に睨まれてしまったが、見なかったことにしたい……………

「リアム、何で午前中の授業に出てなかったんだよ」

俺が教室に入ってきたのを見ると一夏は一目散に俺の所にやって来た。その瞳には疲労の色が見える……………やはり、男子が一人だけという空間にいと、何かと疲れるのだろう。

実際、俺もアメリカにいた時は……………

「悪い、一夏、ちょっと代表候補の仕事で」

「織斑さん！ リアム様に言いがかりをつけるのはおよしになってくれませんか？」

いつの間にか、俺の斜め後ろまで来ていたセシリアは腰に手を当てて、一夏を忌々しそうに見ながら、そう言う……………セシリア……………

後ろをとられたの、まったく気づかなかった……………代表候補生として何か、また新たに……………習い始めた影響なのかな？ そんな話

は聞いてないけど……

「誰も言いがかりなんてつけないだろ！」

「まあ、なぜ、そんな乱暴な言葉をつかいますの！」

「そっちこそ、いつになったら、その変なクロワッサンを外すんだよ」

「な、な、な、あなたには私のこのファッションが理解できませんの！？ これだから野蛮人なのですわ！」

『むう』

二人の視線がヒバナを散らす。もはや、この二人のやりとりは一年一組では当たり前前のようになってしまう。止めようとする者はいない。

この二人の仲を現す言葉があるとすれば犬猿の仲だろう……

いつもなら、どちらかが痺れをきらして、なし崩しで一緒に食堂に行くのだが……今回は違った。

「一夏あ！」

篤さんがどこからかとりだして来た木刀で一夏に斬りかかって来たからだ。

……教室のどこにそんなモノを隠していたんですか？

「やべっ!？」

「この軟弱者!　なぜ、リアムの後ろに隠れる!」

……………そう、一夏は篝さんの姿を見た途端に俺の後ろに隠れた……俺も余裕みたいに言っているけど、篝さんに木刀を向けられて内心、少しビビっているのは内緒だ……………こんなことでオーディンを部分展開しては……………ダメだ。校則違反だし。

もう一度、篝さんの瞳を見る。

よし、シールドバリアーだけは部分展開だ。

「こうでもしないと、その木刀で斬りかかってくるだろ!？」

「そうだ!」

自身満々にそう言う篝さん。横でセシリアが『リアム様を盾にするなんて!』と怒ってくれているが効果はないようだ……………その気持だけでも嬉しいよ。セシリア。後半、良く聞こえなかったけど『リアム様に私を盾に<sup>わたくし</sup>してもらいたいですわ!』と言っていたのは何かの間違いだろう。恐怖で幻覚を見せるなんて……………さすがは束博士の妹さん……………

このままではいけないと思った俺は最後の勇気を振り絞って

「篤さん、どうしたの？ また一夏が馬鹿やらかしたの？」

できる限り平時と変わらない質問をした……………しかし、心臓の心拍数は一切、下がらない。

「……………一夏が、また、他の……………ごによごによ」

俺の言葉を聞いた瞬間に顔を真っ赤にしながら、何かぶつぶつと呟く篤さん。

……………一夏が誰か他の女の子と仲良くしていたのを見て篤さんが嫉妬したのか……………それなら……………いつものことだ……………何とかなるだろう……………

だから、俺は安易に

「とりあえず、食堂に行こうか」

そう言っつて、昼食をとることを優先させてしまっただった。

そこに誰が待っているかも知らずに。

ちなみに、この日から俺は篤さんを怒らせないようにしようと思心に誓っただった。

「一夏！ 遅いじゃない」

食堂に入ると、一夏達に真っ先に近づいて来たのは髪をツインテールに結んだ小柄な少女、鳳鈴音<sup>ファゼンイン</sup>だった。その手に持ったお盆の上には湯気がたつていないラーメンの器が置かれていた。

彼女のその言葉を聞いた瞬間、箒が一夏を睨みつける。

その箒の視線に一夏は気づいていないが、リアムは気づいたようだ。そして、若干、箒の視線に脅えつつもどうして箒が怒っていたのか理解するのだった。

先日、鳳鈴音<sup>ファゼンイン</sup>と会った時、鳳鈴音<sup>ファゼンイン</sup>は確かにリアムに一夏のことを聞いていた。そこから二人が知り合いだと推測しても、おかしくない。

てつきり、初めは中国に一夏の情報を探るように鳳鈴音<sup>ファゼンイン</sup>が言われていた、と思っていたリアムだったが、どうやら、彼の考えは間違いであった。

元々、一夏と鳳鈴音<sup>ファゼンイン</sup>は面識があったようだ。



一夏に寄って来て『何で遅いのよ!』『別に約束した訳じゃないんだからいいだろ?』と言い争いをしている二人を見て、とりあえず、リアムは一夏の分の食券も購入してセシリア、箒を連れて昼食を受け取りに行く。その時も箒は一夏に何か言いたそうだったが、空腹には勝てなかったのか鯖の塩焼き定食を購入しに向かった。

その後、戻って見てもまだ、言い争いをやめていない、一夏と鈴音を見てリアムは、はあ、とため息をついた後

「あ、織斑先生、御苦労さまです」

その場にいない、千冬の名前を出す。

すると、案の定

「にゃあ!? ち、ち、千冬さん!?!」

「ま、待って、千冬姉! これは鈴が!?!」

二人は顔の前に手を持っていき防御の体勢をとる。

「ほら、一夏、これ、一夏の分の昼食」

そう言って一夏に鮭定食を渡すリアム。

「え? リアム……千冬姉は?」

周りを見回しながら一夏が聞く。

「いないよ。嘘も方便だろ？」

「はあ、良かった……」

千冬がいないのを知ると一夏は胸をなでおろす。あいのむち拳骨を受けるのは、やはり、嫌なのだろう。

「えっ？ えっ？ 何で千冬さんいないの？」

ただし、鈴音だけは未だに状況が良く、飲みこめていないようだった。

その頃、生徒達から僅かな時間解放される昼の休憩時間を利用して、千冬と真耶が昼食をとっていた矢先

「くっちゅん」

クールな顔立ちの人間からは到底、想像できない可愛らしいくしやみしたのは真耶ではなく千冬だった。

「どうしたんですか？ 織斑先生、風邪ですか？」

隣の机で大きなお弁当を食べている真耶が千冬を心配そうに見つめる。

「だ、大丈夫だ、山田君…… 大方、またあの馬鹿どもが私の噂でもしているのだろう」

しかし、千冬の顔は若干、赤い。おそらく、自分が可愛らしくしゃみをして、それが後輩である真耶に聞かれてしまったのが多少なりとも恥ずかしいのだろう。

「はあ、そうですか……あ、おいしい」

真耶は本当に分かっているのか分かっていないのか分からない、曖昧な返事を返しつつも自分のお弁当に入った唐揚げに箸をすすめるのだった。

何気に食い意地をみせる真耶に千冬は苦笑するのだった。

「ふっ」

部屋に備え付けられたシャワーを浴びてジャージに着替えたリアムは冷蔵庫にあるミネラルウォーターを飲んだ後、いつものように一夏の部屋に向かう。一夏にESの基礎を教えるためだ。

初めは一夏のことを思っている筈が教えた方が良く思ったりリアムは箒に先生役を変わっていたのだが……数日後に一夏に『箒の説明は分からないんだ!』と抗議されたため、また行くことになっ

た。

篤は仮にもISの開発者である束の妹だから、と思っていたので安心していたリアムだが、ここで先入観の怖さを思い知らされた。

一度、実際に篤の教える様を見せてもらったら

『一夏、そこは、あれだ、その気合だ！（どうやら、篤も分からないようだ）』

『ええい！ なぜ分からないんだ！（竹刀<sup>しな</sup>を一夏に向ける）』

『い、一夏！？ ま、待て、私達はまだ学生だ！？（一夏の顔を近づくと）』

『私は眠い！ もう寝るぞ！（どうやら、二人で一つの机を使うのが気恥ずかしくなったのだろう）』

これが、ただの初々しい恋人の室内で行われているなら微笑ましいのだが……現在、一夏は授業についていけないから、夜の九時から十二時まで補習のような形で勉強をみてもらっているのだ……さすがに、これはいけない。

このまま基礎ができなければ一夏はISの理論のテストを全て赤点で卒業することになってしまう。IS学園には留年という制度がない。赤点だった場合、退学になるのだが一夏の場合は特異ケースなので退学はありえない。よって、そういうことになってしまう。それは……あまりに酷いだろう。

それに、もし、そのようなことになれば、それなりにプライドが高くシスコンな一夏は『千冬姉の名前に傷つけた……』と言って一生のトラウマになりかねない。シスコンならありえる話だし……  
… 例え、周りはそう思わなくても。

さすがに友人としてそんな一夏を無視できないリアムは、こうして一夏の部屋に向かっているのだ。

ちなみに、なぜ、留年という制度がないのかというと、留年するということはIS学園に一年長くいるということになる。その分、IS学園でISの活動データが長くとれるのだ。

留年という制度があれば代表候補をわざと留年させる国がでてるかもしれない。だから、留年という制度がIS学園にはない。

それに、皆、IS学園に入った時点で、それなりに優秀なので毎年、赤点をとる生徒などいないはずなのだ…… 通常の場合。

「一夏の馬鹿！」

リアムが、一夏の部屋に向かっている最中、一夏の部屋の方から突然、鈴音の叫びに近い声が聞こえてきた。

(…………… また一夏…………… 何かデリカシーのないことをしたのか?)

鈴音が一夏の部屋から、こちらに走って来る。

リアムはこのまま、見て見ぬふりをするつもりだった。これは一夏と鈴音の問題なのだから。

鈴音は泣いていた

彼女の瞳の色はおかしくなかったのかもしれない。だけど、俺には、いや、僕にはそれは、それは……その瞳に映る色は……それは……

リアムは鈴音が走って行った方向へと走り出した。

その夜、星の光は輝きを失い、星はゆっくりと涙を降らすのだった。



## Episode 06 KNF、恐怖する（後書き）

女神「次回、自身満々にKNFを発動させる、と言った馬鹿は誰かしら？」

翼「……………面目ございません……………」

神「で、言い訳は？」

翼「大まかな流れを少し、いじった関係で……………」

神「最終話までのプロットはできているのでしょうか？」

翼「……………はい……………大まかな道筋は……………」

神「はあ？」

翼「え　と、確かに本筋はアンケートをとったおかげでできたのですが……………」

神「それで」

翼「核はできてるけど、機体（細かい話）はできていないんです」

神「ようするに物語の本質に関わってくる話はまとまっているけど、細かい話ができていないのね。例えば、蘭ちゃんのデートをいつするかとか、蘭ちゃんのデートをいつするかとか、だから、このEpisodeは若干、繋ぎみたいで残念な感じに仕上がったのね」

翼「言い訳のしようがありません……………」

神「はあ、これだから、馬鹿は」

翼「すみません」

神「それで次回、次回、今回はN（狙ったようなタイミング）で現れただけだから、次はKFが発動？」

翼「はい！」

神「それなら、一つにまとめてEpisode 06で良かったんじゃないの？」

翼「若干、分量が多くなりすぎた関係で……………」

神「はあ、まあ、次回、どうな風に鈴ちゃんとフラグをたてるか楽しみにしているわ。蘭ちゃんは一夏に一目惚れだったから、リアム



にも一目惚れという形をとったんでしょうけど、鈴ちゃんはそのような簡単じゃなでしょ？ きちんと一夏君が好きな理由があるんだから」

翼「そのあたりも含めて慎重に書いていきたいと思います」

神「では、また次回、お会いしましょう」

翼「勝手に閉められた!？」

## Episode 7 KNFの違和感

また、あの喪失感、絶望感、罪悪感が僕を襲ってくる。まるで、体を蝕む何かのように。

耳に与えられた音は絶望しか奏でない。

信じられない。

信じたくない。

目の前にいる大人が煩わしい。

冷静に物事を考えられない自分が煩わしい。

心のどこかで目の前の大人が嘘を言っていない、と言っていることが煩わしい。

職員室にあるテレビのニュースから悲鳴と共に爆発が聞こえてくるのが煩わしい。

急に学校が休みになったのが煩わしい。

今朝まで、笑顔だったのだ。

どこか変な父さんも

優しいけど、マイペースなリーナ母さんも

厳しいけど、できれば褒めてくれるアリス母さんも

機械のことに詳しいムーラ母さんも

いつもと同じ日常

いつもと同じように学校に来て

いつもと同じように退屈な授業を受けて

いつもと同じように……

なぜ？

「君の両親は……半日前に起きたロサンゼルスの上ショッピングモールが爆破……されたのにまきこまれ……」

なぜ？ 政府の高官だという男がこんな嘘をつくんだ？

なぜ？ 男はさも、本当のことを言っている風に話をするんだ？

分からない

理解できない

信じたくない

自分の全てを肯定してくれる人達が……

僕の喪失感、絶望感、罪悪感を、いともたやすく消し去ってくれる程、優しいあの人達が……なぜ？  
分かっている。

これはただの現実逃避。

だけど、だけど、僕はこのことを受け入れられない

受け入れたくない

言葉にするだけで泣きそうになる

でも、その言葉は僕の心に突き刺さる

まるで悪魔が嘲笑うかのように僕の中で暴れまわる

父さんが

リーナ母さんが

アリス母さんが

ムーラ母さんが

死んだ

走る。

リアムは何も考えられず走る。

少女は後ろからリアムが走って来たのに気づいたようで、リアムから逃げるように走る。

消灯時間はまだ、先だと言つのに彼ら二人以外、廊下を歩く者はいなかった。

少女は彼を振り払いたためだけに、寮の外に出る。

まさか、規則を破つてまで、追いかけて来ると思っていなかったから。

「何なのよっ！」

少女、鈴音は叫ぶ。

後ろを振り返りもせず、自分とある一定の距離をとっているリアムに向かって

「……………」

鈴音に『何なのよっ！』と叫ばれて、何も言えない。

ちょうど、寮からの外出が許可されていた時間が終わり、寮の周りの電灯から光が消える。鈴音とリアムを照らすのは月の光だけだった。

そうなくても、ただ、リアムは無言で彼女の後ろに立っていた。

「あんた、何？ ストーカーってわけ？ もしかして、あたしが初日、事務所を探していた時にタイミングよく現れたのも、あたしのことをストーキングしていたからなの？」

鈴音は目じりに涙をためながら、リアムの方を向いて叫ぶ。

「……………」

その言葉を聞いてもリアムは何も答えない。

まるで、何かを迷っているような……………そんな雰囲気はリアムにはあった。

「何とか言いなさいよ！ この変態！」

鈴音も通常の状態ではなかった。先ほどまで、彼女は織斑一夏の部屋にいた。そこで彼女は知ってしまったのだ、自分を自分でいさせてくれた結婚の約束を一夏が勘違いしていたことを。

父と母が別れて、自暴自棄になった時も、この約束があったから生きていけた。それほどまでに彼女の中では重い約束だった。

確かにその約束を一夏は覚えていた、しかし、勘違いしていたのだ。いくら、前向きな彼女でも頭の中が混乱してしまっていて何も

もおかしくない。

「…………あたしの前から消えなさいよ！」

よほど何も言わないリアムの態度が彼女の気にさわったのか、彼女は涙を右手の袖でふいて、リアムに向かって左手を向ける。

彼女の左手の周りに淡い光が集まる。

ISの部分展開。

すぐにリアムはそのことを察した。彼が部分展開を好んで行うからではない。

アメリカ軍にいた時、彼の周りにいたのはナターシャを初めとした代表候補ではなく、正式な国家代表達がいた。彼女等もごく生活の一部のようにISを部分展開していた。それを常に見ていた彼にとって、たかが、代表候補である鈴音の部分展開を見きれないはずがなかった。

「…………本当にむかつくわね！」

彼の目の前に大型の青龍刀が向けられる。

命の危機。

そんな状態になっても彼は眉一つ動かさなかった。

「言っとくけどね！ あたしは本気よ！」



月が雲に隠れ、二人の間には暗黒しか生まれない。

彼らがお互いを認識できるのは寮から漏れ出す僅かな光のおかげだ。

「…………… たんだ」

「はあ？」

リアムの口から絞り出された言葉を上手く聞きとれなかった鈴音はみけんにしわをよせたまま、もう一度、リアムの言葉を待つ。

再び、雲から光を奪い返した月の光で鈴音がリアムの顔を確認できるようになった時、彼の瞳から涙が流れていた。

「っ！？」

その顔を見て、さすがに、驚く鈴音。まさか、ISを部分展開したのが、彼を泣かせてしまった原因だったのだろうか？ と多少、罪悪感に蝕まれるも、すぐに心の中で首を振る。

こいつは自分を追いかけて回しているストーカーだ、遠慮なんて必要ないと。

月明かりに照らされながらも、リアムはゆっくりとその唇を震わせる。

「似ていたんだ」

その声は鈴音が今まで聞いたことのないほど、綺麗で透き通るよ

うな綺麗な声だった。

不覚にも一瞬、こいつの声に聞き入ってしまった自分に心の中で拳骨を浴びせて再び、リアムの言葉を待つ。

「初めて会った時から感じていた違和感。それが今、やっと分かったんだ」

リアムの声はとても、穏やかで、今までストーカーだの、変態だの叫んでいた鈴音の方が、まるで変な人に見える。

しかし、不思議なことに今まで怒りを最高値まで溜めこんでいた鈴音は不思議な程、彼の言葉を聞いていると落ちつけた。

「君は僕に似ている」

リアムの声はゆっくりと、しっかり、鈴音の中に浸透していった。

久しぶりに一夏と再開した。IS学園に千冬さんがいたのは予想外だったけど、一夏に会えた喜びに比べたら、そんなのどうでもいい。

朝、再開して話した時、分かった一夏は一年前から何も変わっていない。まあ、一年でそんなに男の子から男の人に変わってたら、逆に不審に思うけど。

あいにく、一夏とあたしは同じクラスじゃなかったから、せめて昼食だけでも一緒にとうろと思つた。日本に来たら、やっぱりラーメンを食べたいじゃない。だから、あたしはラーメンを注文して一夏が食堂に現れるのを待った。

遅い……

いつたい、あたしをいつまで待たせるのよ！

………やつと来たと思つたら、あいつ………女の子を二人も連れて来た。

まあ、一人の金髪はどうやら、一夏ではなく、リアム・イーリ―って男と一緒にいたいだけみたいだから問題ない。だけど、問題なのは、当然のように一夏の隣に座る黒髪をポニーテイルにした女、篠ノ之箒だ。事前に政府からもらっている情報にも載っていた、こ

の子、ISを開発した篠ノ之博士の妹だ。

……まあ、強敵だけど……あたしは一夏の『幼馴染』なんだから、数歩、リードしているから、そんなに焦らなくていいわ……と、思っていたら、あたしがセカンド!? 何よ、セカンド幼馴染って!?

確かに、篠ノ之さんの方が早かったのかもしれないけど、あたしのことをセカンド、二番目ですって! 一夏に抗議すると篠ノ之さんは、勝ち誇ったような顔をした。

ぐぬぬ!

この女、敵ね。

不意に、昼食の席で一夏は『親父<sup>おやじ</sup>さん、元気か?』と聞いてきた。

……正直に言っつて、分からない。両親が離婚してから一度も会っていない。一応、一夏には苦笑でごまかしたけど……あたしが苦笑したのを見て、リアム・イーリーはなぜか、あたしを見つめていたけど、一夏以外の男の事なんてどうでも良い。

一夏と言いつ争っている間に、いつの間にか、昼休みが終わってしまった。

だけど、言い争えて嬉しいな……中国でいた時は満足に言い争いができる友達もいなかったし……

夜、一夏の部屋に行ってみたら………なんと、あの篠ノ之さんがいた………

何だよ！

何でそこにいるのよ！

そこにいるのは………

先に一緒にいたから？

あたしが一夏と一緒にいなかったから？

たまたま、遅れた、あたしは一緒にいらなくて。たまたま、一緒にいた幼馴染のあんたは一夏の一緒にいられるわけ？

………だけど、だけど、まだ、あたしには『約束』がある。

一夏との約束。

そう、『結婚』の約束。

あたしが酢豚を美味しく作れるようになったら、毎日、あたしの酢豚を食べてくれる。本当は味噌汁って言うらしいけど、そんなの恥ずかしいじゃない。

日本から離れた後も酢豚の練習だけは欠かさなかった。

ISの訓練でヘトヘトになって周りの皆が、けが人のようにベッドに倒れ込んでいく中、あたしは必死な思いで一夏との『結婚の約

束』のために腕の筋肉が痙攣しかけているにも関わらず、酢豚の練習をした。

もちろん、一夏と結婚した後のことも考えて、離婚前に父さんに教わっていた中華料理も練習した。

全ては一夏と笑っていたいから。

なのに……あろうことが、一夏は……

「あれだろ？　鈴が酢豚を上手く作れるようになったら、毎日、酢豚を奢ってくれるって約束だろ？」

それを聞いた時、あたしは怒りより、先にあたしを絶望感に包まれた。

両親が離婚して、寂しくて、悲しくて、どうしてもいいか分からない時も、この約束があたしを支えてくれた。

枕を涙で濡らしていた時も……この約束があったから、涙を拭いて、また歩けた。

あたしにとっては、とても、とても、大切な約束。

だけど……あいつにとっては……

それが分かった時、また、父さんと母さんが離れ離れになった時、味わった孤独感があたしを襲う。

あの時は、一夏との約束があったから、また、歩き出せた。

だけど、だけど、その一夏との約束が潰えた今……………

「一夏の馬鹿！」

気づいた時には、あたしは瞳に涙をためて、一夏を殴った後、一夏と『篠ノ之箒』の部屋を後にした。

寂しい

寂しいよお……………

パパ……………

ママ……………

## Episode 07 KNFの違和感（後書き）

翼「さつそくですが！ この鈴ちゃんも原作よりも一夏君に依存しています！」

女神「幼児退行？」

翼「原作では、きっちりとは書かれていないけど、一夏君に鈴ちゃんはちよつと依存しているふしがあったような気がしたから、作者はそこにピント当てて、このstageを書いていきたいと思っています」

神「……………ようは、また、作者の独自解釈？」

翼「うん！」

神「……………そうなの」

翼「ついでに言うと、原作はもちろん、全巻持っています！ けどIS-unconscious-を書くときは、読んでいません！」

神「はあ？ 何だよ」

翼「PCのキーボードをうつ時、両手を高速？ で使うから、持ちながらだと書く速度が遅くなるから嫌なの。だから、一夏のクラス代表に決定の時の山田先生の言葉も違うし、原作のお話は最低限しか書いてないの」

神「そういえば、一夏とセシリアの決闘シーンも……………鈴と一夏の再開シーンもなかったわね……………」

翼「うん！ 作者は原作と同じシーンを極力書きません！ 皆さん、ご了承ください」

神「ちなみに私はアニメ派よ」

翼「という、ことで次回、またお会いしましょう」

神「18話目にして、未だに原作一巻を終わってない二次作も、ここくらいじゃない？」

翼「それは言わないで（泣）」



## Episode 08 KNFの後悔

「君は僕に似ている                      父さんと母さん達を失った、あの時の僕に」

そう言われた時、あたしは口を開けた状態で啞然としていた。

「はあ！？    あたしとあんたが似ている！？    何でよ！」

なぜだが分からないけど、あいつの言葉に悪意がないのは分かる。それどころか、あたしを気づかうような意味にも聞こえる。

他人の言葉の意味が、ここまで分かるなんて……………初めてのことで。

……………だけど、気づかってくれていたとしても、目の前のこいつとあたしが似ているという言葉には反対だ。

それどころか、苛立ちさえ覚える。目の前のこいつは明らかに温室育ちで何の苦勞もなく生きてこれた人間だと思う。

あたしが不幸のどん底にいるとは思えないけど、絶対にあたしよりは恵まれていると思った。

最後の方で何か言っていたような気もするけど、そんなことは関係ない。

「……………あの時の俺と同じ目をしているからかな？    まるで捨てられて子犬みたいな」

「あたしは犬じゃないわよ！」

そんなことは向こうも言われずとも分かっていると思うし、あたしも分かっている。

けど言わずにはいられない。

「あんた何かに、あたしの何が分かるって言うのよ！」

「分からない」

「分からないなら言うな！」

あたしはISの部分展開を解いて、あいつの傍までズカズカと歩いて行って、こいつの襟を掴んだ。

何で、こいつにこんな悲しそうな顔をされないといけないのよ！

寂しいのはあたしなのよ！

「何なのよ！ あんたは、別にあたしはあんたの何でもない。だから無視してなさいよ！」

ああ、自分で言うのもなんだけど、例え、どんな形でも、あたしを気づかせてくれている人間に言う言葉ではないのは分かっている。

けど……

「……………無視できない」

「はあ！？ あんた、知らないの？　そういう身勝手な奴のことを世間ではお節介って言うのよ！」

「だけど、そういう時に一人でいれば　余計に寂しくなるだけだから」

まるで経験談を話すように目の前の男は、言葉を紡ぐ。

そこで、気づいた。

こいつが、あまりにも変態　というよりもこいつの突拍子もない行動と言葉に対して、怒りをぶつけることで、あたしの胸の中から先ほどの、寂しさがなくなっていることを。

怒りに気が紛れただけかもしれない。

いや、絶対そうだ。

そうだ。全然、こいつのおかげじゃない。

というより、こいつは、ただの変態だ。

「あ、あたしは寂しくないわよ！」

嘘だ。

心の中で誰かが呟く。

お父さんに会えなくなつて、明らかに変わってしまった母さんと

会わなくなつて、一夏に約束を忘れられていた寂しさが薄れているのは目の前の男の行動と言葉のおかげ、だと。

だけど、そんなの認められない。

認めたくない。

目の前の男はただの変態だから。

ただ、ストーカーだ。

「うん」

何よ、何で、あんたにそんな分かりきられたような返事をされないといけないのよ！

あたしは、あたしは！

「帰る」

そう言つて寮の方に向かってトボトボと歩いて行く。

あたしの後ろであいつがどんな顔をしているのだろう………か？

でも、あたしの知つたことじゃない。

あんな失礼な奴のことなんて。

鈴音は泣いていた

それは別におかしい事ではなかったのかもしれない。ただ  
ど、俺には、いや、僕にはそれは、それは………その瞳に映る色は  
………

突然、親と会えなくなってしまった子供のモノだから

あれは、俺の転生後の父さんと母さん達が死んだ時のことだ。

正直に言えば、俺は普通の精神状態ではなかった。

父さんと母さん達の友人が気づかってくれた、おかげで、何とか葬儀は一週間後になることになったが、その一週間、俺は抜けがらのようだった。

自分が転生者であることは伝えていなかった。

父さんと母さん達に嫌われるのがただ、嫌だった。

だから、自分が本当は、あなた達の子供ではなく、その存在を奪った他の誰か、だ　　と言うのが怖かった。今、思い返しても卑怯だと思っし、安易に転生などという選択をした俺を殴りたかった。

そして、何より父さんと母さん達にそのことを、言わなかったことを当時の俺はとても後悔した。

それに転生して間もない俺は、とても、よそよそしかったと思う。

色々と父さんと母さん達に引け目を感じていたからだろう。

だけど、父さんと母さん達は、そんな俺を肯定するかのように優しく接してくれた。俺が単に都合の良い風に解釈していただけなのかもしれない。

だけど、確かに、父さんと母さん達は俺の存在を肯定してくれていた、と思う。なぜかは分からないけど。

そんな父さんと母さん達を失った後の俺は酷かった。

支えを失った家のように崩れていた。

そんな俺と一緒にいてくれたのは……………レーナさんだった。

何もせず、ただ、抜けがらのように生きている俺にレーナさんは何も言わずに世話をしてくれた。

そして、葬儀の前日

「お一人は寂しいですか？」

「……………」

「私も実は、ある方に出会うまで、たった一人でした。何も信用できない。自分の持っているモノなどない。他人など必要ないと思っていました」

「……………」

「ですが、たった一人のお方に会っただけで、私の人生は大きく変わりました。一人は寂しいことに気づいたんです。おそらく初めから持たなかった私と、持っていて失った若様では、その失望の大きさは比べものにならないでしょう。だけど」

それ以上に、一人だと自分で思い込むことは寂しいことなのですよ

「全人類が若様を一人にしたとしても、私が若様の傍にいます。若様が寂しい思いをされたのなら、私は若様のお傍にいます。ですから、一人だ、と自分で思い込むのはおやめください」

その日、父さんにも母さん達にも見せたことのない本当の涙をレーナさんに見せた。

一人だと思う、それがこれほど、辛いとは思わなかった。

人は一人では生きていけない。

ただの偽善な言葉。

だけど、この時程、この言葉の意味が分かったことはない。

俺はレーナさんから学んだ。

一人じゃない時の喜びを。

自分勝手に一人だと決め込んだ時の辛さを。

全ての人を寂しさから救うことなんて、ちつぽけな俺にはできない。

だけど、俺の目の前にいる『自分を一人だと決めこんで泣いてい



る子』がいれば助けようと思った。

お節介だと言われても。

偽善と言われたとしても。

もらった優しさの分だけ、他人にも優しさを返そうと思った。

ねえ？

リーナ母さん

アリス母さん

ムーラ母さん

僕って間違っているのかな？

これが間違いなら、僕は世界が間違いでもいいと思うな。

だって、あの時、リーナさんの胸の中は、暖かったから。

……だけど、今回はやり方を間違えた。

突然の衝動に動かされるまま、行動したのはいいけど、これは完全に嫌われた。

慰めるどころか、どう考えても俺は、凰さんを襲っていた変態だ。  
自己嫌悪した所で何も変わらないのは事実だけど。

本当に父さんと母さん達とレーナさん、ナターシャ姉さんが関わると、衝動に動かされるばかりで、思考できなくなってしまうのは……どう考えても悪い癖だ。

セシリアの一件で反省したつもりだったんだけど……

アメリカなら、どう考えても訴えられている。

いや……日本でも同じか……

謝りたい………だけど、今、凰さんの所に行っても間違いなく、追いつめられるだけ。

一夏を経由して………ダメだ。

そもそも、一夏と両親絡みのことなのだろう。

このことをナターシャ姉さんに話したら、まず、間違いなく、お説教より先に爆笑されるだろうな………アメリカにいる時も一回、同じようなことをしてしまった時に相談したら、爆笑されたからな………

レーナさんは忙しいからな………ただでさえも、俺の我儘をきいてもらっているから今は俺の悩みを聞いてもらっている時間はないだろう………

本当に思う、こういう時、リーナ母さんがいたら……

アリス母さんがいたら……三日は説教だな

ムーラ母さんなら……笑いながら、相手に金を渡して解決しなさいって言うだろうな。

父さんは、『初対面の好感度は低い方がギャルゲエではお得だぞ！ デレた時の嬉しさが倍増するからな』と笑って……そうか。事実、問題、父さんは、母さん達の前でもギャルゲエを普通にプレイする兵だから……変態行為やセクハラをした時の対処を方……一番、知ってるな。

ああ、父さん、あなたに関しては今ほど、いないことを残念に感じたことはありません。

あなたなら、全世界のオタクたちの神に

と、俺は何て馬鹿なことを考えていたんだ……

それよりも……今は鳳さんへの謝り方を考えないと……

そうだ……この前、ナターシャ姉さんが困った時はイーリスさんに相談しなさいって言っていたような……

よし、帰って相談しよう。



## Episode 08 KNFの後悔（後書き）

女神「いまいち、この頃、KNFの切れが悪いわね。それに文章量も少なくなってるない」

翼「ぎくっ!？」

神「それに、感想にも全然、返信できてないようだし」

翼「ぎくっ!？」　べ、別に『リザイン』の攻略に忙しかったり、春の新作アニメを見ている時間が多いせいで、執筆に使う休み時間が減っている訳じゃない……………です」

神「……………そうなの、ね？」

翼「ぎくっ!？」　……………そうです。ごめんさい（涙）」

神「はあ、それで、リザインの感想は？」

翼「めっちゃ面白いです!」

神「リザインは、R18の同人ゲームなので、18歳未満の方は気になっても買わないでくださいね」

翼「誰か、リザインのファンの人がいたら……………ぐはあ」

神「仲間と語り合う前に、執筆しろ」

翼「（返事がない、ただの屍のようだ）」

神「ご愛読ありがとうございました。ちなみに、裏情報なんですけど、鈴ちゃんのEpisodeを書くにあたり翼は、アニメ版の『あかね色に染まる坂』の一話を参考にしています。」

リアム　親切にも案内する　後を追いかける（変態行為）

準一　不良から助ける　了承なしにキスする（変態行為）

え？　若干、違っって？　同じようなもんでしょ（笑）

ちなみに、翼はあかね色に染まる坂のPC版、PS2版、アニメD

V D、および、星空へも持っている。f e n gのファンよ、次に日雇いのバイトをしてお金が入った時は星空を買い予定らしいわ。浪人なんだから、いつできるか不明なのにね。

と、ここでお時間が来てしまいました。では失礼します」

## Episode 09 KNF、相談相手を間違える

『ははは、なんだ。おまえが電話してくるからてつきり、国家規模の大型演習でもやりたいとか言い出すかと思えば、ただの色恋ざたかよ』

電話の向こう側で豪快に笑われているのが容易に想像できる。

今更ながら、なぜ、この人に電話をするような悪手をとってしまったのか、後悔せざるを得ない。

この人は昔から戦闘<sup>バトルマニア</sup>狂で戦闘<sup>バトル</sup>のこと以外はからっきし、頭のないような人だったんだ。

『しっかし、おまえがそこまで気にかける子が日本にいるとはな。チャイニーズだっけ？』

「あ、はい……………」

『そういえば、入隊したての頃、ナタルに内緒で親を亡くした女のケアをやってたな……………あいつは今、どこに配属されているんだ？』

……………また、この人は俺の黒歴史をほりだそうとする……………正直に言って、イーリスさんが言っている、その子の時も初めは自爆して……………そこから、どうしていいかわからず、たまたま、そのあたりにいたイーリスさんに相談にのってもらったような……………

「……………その子、もう。除隊しました」

『ほづ』

「何でも、親が死んで自棄を起こして周りの反対を押し切って軍に入ったとかで……………」

『それで、普通の幸せでも見つける　とでも言っただけじゃないのか？』

「……………何で分かったんですか？」

『ふふ、内緒だよ、内緒。おまえは知らなくていいことだからな』

……………何か含みのある言い方だ。

この件について俺以上に何か知っているのかもしれないし、ただ  
バトルマニアの戦闘狂としての勘かもしれない。

できれば、後者と願いたい。

『しかし、前も言ったが、相談する相手を間違ったな。こういうことはナタルに相談すべきだな』

ナタルとはナターシャ姉さんがイーリスさんからのみ呼ばれている愛称である。元々、戦闘狂で浮いていたイーリスさんと優秀すぎて浮いていたナターシャ姉さんはIS学園時代に親友になり、イーリスさんは愛称で呼ぶようになったとか……………それだけしか教えてくれない。いくら聞いても、どうしても、そう呼ぶようになったのか教えてくれない。

それにしても……………『前も言ったが』か……………普通に前の時のこ



とも覚えているじゃないですかイーリスさん……………あえて、俺に何もアドバイスしないのか……………

『おっと。今のなし。おまえのことを変態だの言った、そのチャイニーズの命が危なくなるからナタルに相談するのはやめておけ。さすがに、あいつでもチャイナとの国際情勢は分かっているだろうから下手なことしないだろうが……………おまえのこととなると予測がつかないからな。相当なブラコンになっちまってるぜ、おまえと離れて』

「……………確かに、ブラコンの気がありましたけど、いくらナターシヤ姉さんでも中国と全面戦争の火種になる事なんて」

『ありえるぞ』

「え？」

『この間、やっぱり、おまえを本国に戻して監禁しようという案が政府の中であつたらしいんだけど、もし、そのような暴挙に国がでるのなら、おまえを連れて亡命するぞ』と国の高官を脅したらしい。まあ、元々、政府の高官の暴挙なんてEV社の社長さんが軽くあしらっていたんだけど、ナタルがそんなことを言いだしたから高官は大慌てで、その会議すらしなくなつたよ』

……………俺を庇ってくれるのは嬉しいけど……………いや、亡命は色々問題があるだろ……………でも、俺のいない所でそんなことが起きていたなんて……………俺がもつと優秀だったら、ある程度、政府の動きは予測できただろうに。俺も、まだまだ勉強不足だな。

「それで、結局、何も、アドバイスはくれないんですね？」

『若者は悩め』

「……………イーリスさんも、まだ若いじゃないですか？」

『ははは、これは一本とられたな。そういえば、シールドビットの使い方は少しは上手くなったか？』

「……………あまり、進展はありませんね」

『そうか、そうか、もっとそっちの方も励めよ。今のおまえじゃ、ヴアルキリーレベルだ。歴代のブリュンヒルデには及ばない』

「……………そういうイーリスさんもじゃないですか？」

『ん？ IS学園に行く前にボコボコにしてやったのを、もう忘れたのか？』

「ボコボコつて、あの時はグングニルとシールドビットくらいしかロールアウトしてなかったじゃないですか。今なら、デュランダルとアイギスがあります。前みたいな一方的なことにはなりませんよ」

『そうか、そうか、それなら、本国に帰って来るのを楽しみにまっているよ』

……………しまった。今の言葉、バトルマニア戦闘狂には禁句のだったんだ。

この人にこんなことを言ってしまったら模擬戦を一日中させられる……………

いつもはナターシャ姉さんが助けてくれたけど、今はどこかに行っていないからな……………どうしよう。

『じゃあ、そろそろ、訓練の時間だから切るぞ』

「あ、はい。ありがとうございました」

携帯電話が切れる。

ふう……………それにしても、イーリスさんに俺の新装備の情報を教えただけで、何もアドバースもらえなかった……………はあ、結局は自分で考えるしかないのか……………

部屋に戻った、あたしは、まず、自分の携帯を確認する。一応、これでも代表候補だから、緊急の案件があつた場合、困るから……………どんなに気分が優れなくても、やるべきことくらいする。

そしたら……………本国の教官から電話が入っていた。

はあ、あの人、厳しいから苦手なんだけどな……………

あたしは渋々、同室の子にお願いして少し、外に出てもらう。一応、国家機密のような案件かもしれないから。

『凰鈴音代表候補生、なぜ、連絡が遅れたかは聞かないでおきましよう』

「あ、ありがとうございます」

……挨拶とか、もしもし、とかなしでいきなり、フルネームを呼ぶなんて……びっくりした。

『本日の案件ですが、あなたはこちらが依頼したリアム・イーリーに関しての報告書を作成していませんね？』

「え！？」

確かに政府の高官からはリアム・イーリーについて調べるように言われていたけど……まさか、あれって命令だったの！？

『やはりですか、あなたの性格からして無視を決め込むと思っていました』

「………なんで、あたし、なんですか？ 他にも中国の生徒は………」

あんな変態のことを調べるだなんて……

『それは、あなたが国家代表候補だからです。他の生徒と違い、あなたは色々な特典を持っている変わりに守秘義務に始まり、色々な

義務があります。それは専用機を持ち国家代表候補になった時点で理解していると、こちらは認識していますか?」

「た、確かに、そうですね」

『言いたくはなかったのですが、何か勘違いしているようですので、言わせていただきます。あなたは何を勘違いしているのですか?』

こちらがやれと言えば、あなたはNOと言う返答はできないのですよ? 国家代表候補になった時に、我々はあなたに、もっと慎重に考えるべきだ。今すぐ、決断することはない、と忠告したのにも関わらず、あなたは、その話が来た時すぐに、了解して国家代表候補になった。今さら、何を言っているんですか?』

「っ……………」

何も言い返せない。

事実だから、あたしは国家代表候補の話が来た時、二つ返事で代表候補になった。周りの教官達は、すぐに決める必要はない、と言っていたけど、悩むなんて女々しい事しなくなかった、あたしはすぐに了解したのだ。

でも、それで一夏と再開できたのだから、それ自体は後悔していない。

『分かったのなら、明日から彼について調べてください。彼に関する情報はアメリカの戦力を測る意味でも重要な意味があります。それはあなたも分かっていますね?』

「……………分かりました」

『きちんと、こちらで調べた情報に関しても目を通しておいてくださいね、では』

「失礼します」

それだけ言つて、あたしは電話を切る。

はあ、何で好き好んで、あんな変態のことをあたしが調べないといけないのよ。

とりあえず、外に出ていてもらつた同室の子を部屋の中に戻つて来てもらい、その後、あたしは変態リナム・イーリーに関する資料に目を通す。

性別・男

年齢・十五歳

身長・183センチ

体重・69キロ

こんなプロフィールなんて……正直に言つてどうでも良い。だって興味がないんだもん。あたしはそのまま、プロフィールを読み進めて行く。

そして、ある項目で目を止める。

家族構成・戸籍上は本人のみ（現在、従姉で国家代表のナターシヤ・ファイルス世話になっている）

どういうことよ。

あいつって、どっかのボンボンじゃなかったの？

そして、あたしはある言葉を見た時に旋律する。

ロサンゼルス爆破テロにて両親を失う

ロサンゼルス爆破テロって一般市民に五百人以上の死者を出した最悪のテロだ。今でも小学生の時にニュースで見たことを覚えてい  
る。まるで、映画の中みたいな出来事が現実起こった　　とい  
うことで、日本でも大きく報道されたから。

正直、あの時、子供ながらに怖いと思った。

だって、普通のショッピングセンターがドンドン爆発して……  
次の日、同じクラスの馬鹿な男は面白がっていたけど……

あの事件で両親を失った？

何て悪い冗談なの？

でも……これは中国の中でも、アメリカのCIAに匹敵するよ  
うな機関が調べた情報だから間違っている可能性は、ほぼない。

もし、曖昧な情報だったら、ここに書かず、裏がとれるまでは隠  
されている。

逆に言えばここに書かれている場合は裏がとれている　　と言  
う事だ。

……あいつも両親を……

いや、あたしの場合はまだ、会える可能性があるけど……あいつは……

って何を同情しているのよ、あたし！

あいつは、ただの変態であたしが同情してあげることなんて全然、ないんだから！

……でも、明日から、こいつのことについて調べないといけないのよね……気が重いな……それも一夏と喧嘩をしてしまったから一夏からこいつの情報を聞きだすのは気まずい。

というか、一夏のことを思い出すと腹がたってきた。本当に……クラス対抗戦では、ぎつとぎとのめっちゃめっちゃにしてやるんだから！

はあ、今日はなんか疲れたな……もう、寝よう。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9451r/>

---

IS - unconscious -

2011年5月3日07時48分発行